148
428

金澤龍玉著作

演劇脚本

復讐高音鼓

自大序至大詰

088474-000-2

特52-593

復讐高音鼓

金沢　竜玉／著

M27

DBJ-0128

演劇脚本 復讐高音城

場割

大序
三保明神社内の場
三保浦磯邊の場
幕目
萩村富士右門内の場
駿河國山中の場
幕目
産土神社鳥居先の場
住吉神社門前の場
舞楽試合の場
富士右門屋敷の場
辻の場
五幕目
遠里小野松原の場
岸野隠家太郎出立の場
巴屋見世先の場
梶田十蔵住家の場
六幕目
阿彌陀寺開帳の場
同見染の場

東京帝國大學圖書之印

東京帝國大學圖書之印 昭和二年七月

七幕目

（赤間ヶ關千歳屋の場
同　同中二階の場
奥座敷庭先の場

大詰

（室積平馬屋敷の場
鳩胸峠老母卯原隱家の場
同　室の津沖中の場
濱邊の場

演劇脚本　復讐高音鼓

大序　（三保明神社内の場
三保浦磯邊の場

役名

一浅間左衛門
一富士右門
一足利義滿
一今川上總之助
一人商人五四郎
一田舎十郎戴
一宇助
一今川了俊
一小磯
一小雪

一傾城乙女
一靈龜の精
一太鼓持一人
一遣手一人
一漁師子役六人
一立大名二人
一侍一人
一禿二人
一家來大勢
一大龜一正

造物見附淺黄幕所々に松の實木上手陣幕高張挑灯今川家陣所の心本釣鐘今川了俊上總之助
大名四人並び居る下り葉にて幕明く　了俊「此度武將足利義滿公には某が領分駿河の國　上總
之助「富士山御遊覽と有つて遠路の御下向　大名□「我々は隣國の諸侯　大名△「其外諸代外樣の面
々義滿公の御出迎ひ　皆々「伺候致して厶り升る　了「方々には御苦勞千萬に存升る　悴上總之
助は御馳走役　□「我々は詰切りの役目なれば　皆々「伺候仕り升せうかな　了「某は陸路警固
の役目　皆々「然らば御前へ了俊殿　了「いづれも　皆々「上總之助殿後刻御意得升せう　〔ト上
手へ這入る」　了「悴用意調へば早速御前へ最早晨鐘に程も有まい遲參いたすな　〔ト上手へ
這入る」　上「扨々どいつも堅いやつでは有る是から我等が趣向ヤレ〳〵向ふへ乙女太夫が
來るは〳〵ナヽイ〳〵　〔ト向ふより傾城乙女太夫禿遣手太鼓持付て出て」　乙女「殿樣先度の
約束故爰で逢ふと思ふて最前から來て居るに遲い事でムんすなア　上「今迄堅藏殿に取りま
かれとつくりとしびれが切れたンヲけふは辻留めろこをばどうして通つたのじや　白八「イ
ヤ其智惠者は此奴何がけふは辻どめと聞て何でも夜の内にと出掛たが矢張備へがりんと擇
へて居てヤイ〳〵此女は通さぬといひおつた某ぬからぬ顏で今川上總之助妹八重梅罷通り
升といふたれば皆々が主人の御息女ヤイ〳〵と尻もつ立る何れも御苦勞姫君には先づ〳〵
お通りとすりぬけて參り升た何ときつい者でムり升せうがな　上「イヤ遲れ粹めろなたは
上氣もせずようおじやつたのう　乙「サイヤアア來る事は來ても白八さんのてんでう口にハア
〳〵思ふて來たわいなア　上「我等が役はまだ間もあり向ふの茶屋で天津乙女と時雨の床入
ろなたの所持の羽衣を此白龍が取りかける　乙「また悪い事ばつかりそんなら私しや先へ往
て　上「待て居や　白「旦那跡よりサアムり升せ　乙「サア羽衣おじや　羽衣「アイヽ　〔ト橋掛り
へ這入る向ふより娘小磯漁師網六出て」　網六「小磯さん樂みが出來たな〳〵　小磯「何いは
んすどいなア三保の浦の明神さんへ日參するのじやわいなア　網「夫はよい穴が出來てお目
度たう存じ升　小「よい穴とはへ　網「明神樣の堂の後ろはうこらあたりを盛屋たらけじや小
「悪い事いはしやんすなモウ先へ行う　網「チツト先へやつては爰迄連れ立つて來た甲斐が
ない一所に行わいのう　〔ト両人本舞臺へ來る　上「コレ〳〵女中お待なされ〳〵　小「ハイ
網「是は又どうまた者じや爰へ來ると氣が長う成たサア〳〵行んせ〳〵　小「モウこちや參
らいでも大事ない　網「エヽ　小「お前ゝ勝手に行かしやんせ　網「サア〳〵大事に成つて來た
アヽ扨は狐が取付たわい　小「エヽ　網「眉毛の數をよまれぬ内ドリヤ粹を通して小磯さんば
かされさんせ　〔ト橋掛りへ這入る」　上「本に氣さんとな人じや○何女中參詣かな　小「アイ○
ちつと明神樣へ立願がムり升て日參を致し升る　上「ムヽ其願ひは戀じやな〳〵　小「アイ○
イヽエ　上「イヤさうであらうがの〳〵　小「色々の事おつしやる私しや存じませぬ　上「御存

じなくば教へてやらう　小「ろりや何をへ　上「願ひ事の叶ふ拜み様を　小「どう拜み升るのじ
やへ　上「サア元神様は鶴鴿といふ鳥を御覽有て交りを被成た夫じやに因て我等又鳥をうへ
て鶴かイヤ〳〵鶴でない鳩其神めがお娘の足をねがけるじや　小「悪い事なされ升ないなア
上「どこに悪い事鳩は正八幡の使はしめ心願の事有ばおれを拜むじや　小「あなたを拜み升
と願ひが叶ひ升かへハイ〳〵〔ト手を合す〕　上「是はしたり其様な違方では願が聞へんも
そつと近う寄て　小「ハイ〳〵〇さう云て何といふて拜み升のじやへ　上「ヲヽ可愛い　小「ヲ
ヽ可愛い〔ト此内乙女太夫出かけ居て〕乙女「殿さん　上「ヤアそなたは乙女いつの間に　乙「
いつの間に來うと搆ふて下さんすなさうして今のは何でムんすへ　上「ヤア今のはヲヽさう
じや拜み様を教へて貰ふてじやあつかましいいやらしいあんまりの事で物教いはれぬわいなア
殿さん一寸ムんせ〇あんまりでムんせうあの様な悪性な事をさんして濟かいな〳〵　小「殿
さん一寸ムんせいなア〇つゝとモウ分らんわいおア今教へて下さんした事は本間でムり升
かへ　上「何の偽りいふてよい者か〔ト乙女又來て〕　乙「そんならわしにいはしやんした事
は嘘じやな〳〵　上「何のマア嘘いふてよい者かわが身より外に心は替らぬわいのう　小「殿
さん私が事を　乙「イヽエこちの殿さんじやわいなア　小「イヽエこちへ　乙「イヽエ〔ト両方
より引張合ふ〕〔トヾ上總乙助眞中ゐへたり〕　上「ア、待てくれ〳〵さう引張られてもいふ者
は目が廻ふて成る者じやないモウ堪忍してくれ〳〵　乙「イヱ〳〵堪忍成らぬわいなア　上「
こりや術ない〇チヽよい事がある二人から半分つゝ可愛がつたら両方得心じや有う　小「ろ
んなら私を可愛がつて　乙「心變りはないかいおア　上「心が變つてよい者か　両人「ヲヽ嬉し
うムんす〔ト侍一人出て來り〕　侍「ハッ若殿様へ申上升大殿様より只今お越しあれとの儀
でムり升　上「又堅藏の所へ行のかこりやまたいやな事では有るぞ〔ト明六ッの本釣鐘成る
上「ありやモウ東雲　侍「サア〳〵ちやつとお越しあられ升せう　遣手「殿さんまだ咄去たい事
が有るわいおア　上「サア夫は跡で間を見合せて　侍「サア〳〵お越しあられ升せう〔ト上總
之助を連れて這入る〕乙「エヽモウあの侍がいとしぼさうに無理に〇どうぞして殿さんの傍
へ行く思案はムんせぬかいなア　小「よい事がムんすけふゝ私に御前へ出で富士の謂れを咄
せとやらいつそ私と一所に御前へムんせいおア　乙「エヽろんならどうぞ一所に御前へ　小「
サア私に付て殿さんに逢はしやんせ追付北の方乙女の前様襠立派に斯う參りや　両人「ホヽ
ヽヽ　小「サアムんせ〔ト両人上手へ這入る返し
造物正面涙幕東西蔽原機遊涙打際の蹴込み眞中に富士右門着流し腰簑笠を着て石に腰掛釣
籠釣竿を持て居る見得一擬コイヤイ涙の音にて道具納る　右門「ヤア誠に一炊の夢東雲の東

風定めなき浮世の樣我も代々に傳はりて忝くも天下の伶人と名たれし身をも世に連れて故郷を離れ仇に過ぎ行此年月左れ共捨ざる樂器のつれ〴〵磯邊に遊ぶうろくずの釣に臨んで鬱氣の樂みハテ樣々の有樣じやわい〔ト釣竿取て餌をさし浪打際へ打込み　右「ハテ心得ぬ沖は平浪成るに只此磯邊に限り浪打寄るはハテ訝かしやなア〔ト𠮟ろ〳〵にて上手の鼓原より龜の精黑威の鎧金入やうの直垂にてせり上る　右「眼前遮ぎる異形の出立窺ひ出しは害せん爲かイデ正体の顯はすまいか〔ト薄𠮟ろ〳〵燒酎火を燃し」　龜の精「汝を見掛け賴み度一儀有り我も得たる術あれど子細有て遁れ得ぬ急難目前に差掛れり貴殿是を助けくれなば子孫に傳へ幸ひの道を開かん屹度後に試し見よ右門知之　右「ムヽ何か心にあたらぬ共時に至らば計らひ得させん　龜の精「賴母しヽ〳〵シンチクオアンシテシゼチリワキヤウ〳〵〔ト薄𠮟ろ〳〵にてせり下る」　右「形ち武具に見ゆれ共着たる摸樣の龜甲形扨は三保の浦浪に幾年を經る靈龜にて急難爰に來るを以て術に及ばぬ願ひ事ハテ奇瑞を見る事じやよなア〔ト向ふより子役六人大きなる龜に繩をくゝり付引張て出て　子役皆々「よい〳〵よいやなア〔ト本舞臺迄來る　松吉「ナア土さよ珍らしい此大龜どうぞ仕樣は有るまいか　土松「チヽ皆寄て叩き殺し　梅之助「此甲を舟に去て磯邊を乘たら面白からう　竹松「そんなら寄て叩き殺し　梅之助「背中と腹と二ツに放さう　松吉「チヽ殺せ〳〵〔ト殺さうとする」　右「コリヤ〳〵子供らさりとては入らぬ殺生殊に稀なる科ない大龜放してやれ〳〵　土「イヤ〳〵こちのとゝさんの大事の網を破りおつた　松「皆引出したら　松「にらみおつたわい　梅「夫でこちらが　竹、梅「殺すのじや〳〵　右「成程夫なれば尤然し龜は神靈の精能く存亡を見吉凶をしるすなりとサ斯樣な事を申すとも分かり得まじ島目をろちらにくれる此龜を我にくれよ〔ト錢百文出して見せる」　土「其錢こちらへ下さるなら　皆々「龜はたすけてやり升せう　右「夫は重疊夫なれば引替に是を取れ〔ト錢を渡し　右「此汀へ此儘に　皆々「こちらも寄つて逃してやらう〔ト子役龜を磯邊へ持行　土「龜よ禮をせい　皆々「三遍浮かべ〳〵〔ト踊り乍ら下手へ這入る行違へて宇助出る」　右「宇助殿でムり升るか　宇「右門殿か○コレ貴殿はようもぬつぺりこつぺりして居るおれも山では潰されぬ赤目の宇助貴樣が母親の病氣人參代に金五兩借してくれいと樂器とやら秘事とやら結搆な卷物をおれに突附け泣愁歎ろんな物に望みはなけれど其卷物取て大枚の金五兩にしてやつたも貴樣のお娘小雪が望み廿日卅日と約束仕乍らけふで幾日になると思ふやるぞ　右「御尤でムり升る　宇「置てくれ何が尤無理でもモウこらへ袋の破れかぶれ戻さにや娘小雪こつちへおこすか金戻すか二ツ一ツの返事右門どうしやぞい　右「サア取りあへず返濟と思へど甲斐なき母が身をかり何か手繰れ大きに延引然し此上はけふは　宇「アヽモウいふな小雪を内へ連れていぬさう思ふてくれ　右「イヤさう有ては拙者

めが　字「エヽ面倒な」「トせり合ふ五四郎橋掛りより出て宇助を投る　右「ヤアあなたは　五四郎「大事おいものでどんす　字「どろらい目に合はしおつた○ヨウうぬヤアどつから湧いてうせた何でおれを投げわがうたのじや　五「投げは致さぬ時の挨拶氏神三保の明神へ久々の參詣通りかゝり口論の樣子おなだめ申さん爲に一寸出升たので厶り升　字「ハテ口論じやない借た物を返へさぬ因て催促を　五「サア其借用の金手前取替へて返濟致さうと存じて　右「アイヤ是迄親しう御意得申ぬ御方　五「イヤわしや別府の町の者で五四郎といふて鎌倉通ひの商人久し振りで戻りけふで七日斗り滯留　右「成程昨日一寸見受け升たアノ角家の御老母は　五「ありや私が母で是も長の病氣故何かの心勞　字「エヽ置あがれうぬらが咄し聞く耳はないわいサア右門受取うか　右「デモ今と申ては　字「ないか　五「イヤ有る手前がお取替へ申　右「じやと申て　五「ハテ入らぬ遠慮　字「借て返すか　右「サア　字「どうじやぞい　右「あなたのお情字助殿の御催促少し心に思ふ子細何分にも暮六ツ迄心の極め返答申さう　五「ムヽこつちは見兼ね用達つ金　字「戻さぬ故の此催促　右「サア借受けるとも返すとも　五「心のすんだ其上で　字「金に娘のかへ事するこの　右「御無心申て秘書を得るか　五「二つに　字「一つの　右「返答は暮六つ　五「必す共に　右「お待被成て下さり升せ「トト字助は向ふへ五四郎はろつと釣籠取てヅイと橋掛りへ這入る」　右「一旦の間を合せし五両の金子延引なすは不實の至り元は大事な樂器の秘書何れ取得で叶はぬ品ハテどうがな「トト梶田十藏木綿やつしにて出て」十藏「アイヤ〳〵お待被下れう御家來梶田十藏めで厶り升　右「イヤ梶田十藏と申家來我世にあり玄刷り忠なる者と目を掛しが奥が召遣ひよしと申女に不義玄出奔なして行衛知れず　十「成程不義露顯に及びお怒りもあるべきを御子息富士太郎樣の御執成にて其座は遁れ言譯なきまゝ國遠致して樣々の憂き艱難備前の國石成坂にて賤しき業の馬追ひ商賣主人のお目を掠めし罪と夫婦諸共悔み泣ぬ日迚も厶り升せぬ　右「またしも夫で人間の誠時節を待て歸參を願ふか　十「何卒不義のお詫び申歸參の上にて以前に增しあつく忠勤を勵まんものと津の國へ立寄りしに御行方も定かならず漸う委敷便りを聞て一昨日此地に着き尋ね廻りし今日のしぎ何卒身の罪お免しあつて元の主從となし下さる樣ヘッ〳〵偏に願ひ奉り升る　右「生得汝が忠義の魂承知致せど一旦の落度何れ一つの功を立後日の願ひは我宅へ　十「功になるべき事あらば　右「其時こそは　十「以前の如く　右「結ぶ主從　十「三世の奇緣　右「先づ夫迄は十藏去らば「トト橋掛りへ這入る」　十「何をいふても此身の落度然し一つの功を立て詫びせよとはまだ御不便のかゝるお詞何でも急ぎ功に成るべき工夫が肝心さうじや「トト急度思入有て上手へ這入る返し

造物後ろ一面の涙幕高二重の大座船東西共涙の打寄せ船の前涙打際の書割船の中に義滿烏

帽子裝束にて眞中にすはり居る上手に今川了俊下手に上總之助後ろに東西に分れ大名二人づゝ並び上るりにて道具留る　浮「羅漢」元弘建武の世の乱れ足利三世の將軍前左大臣源義滿天下一統の功成て富士山遊覽あるべき爲濱出の御遊び三保の浦岸を尽せし大小名數艘の船に居並びしは目覺ましかりける次第なり我君仰出さるゝは　義滿「世も治に歸へるは方々の忠勤故義滿がけふの富士詣も方々の奔走祝着に存ずる　了「ハア我君の仰の如く四海糸の如く乱れしも武威に服し　上「総之助「今日の御遊覽は太平の世にしろしめし玉ふ御勳し　大名「當國の領主今川殿御親子　□「隣國の我々に至る迄　△「鎖さぬ御代は千代八千代と　皆々「存と奉り升る　浮「皆々渴仰なしにける了俊重ねて　了「夫に附き此浦の漁師共に申付魚の献上○ッレ悴申付よ　上「ハア漁師ども、献上の魚持參致してよからう　漁師皆々「ハア、　浮「御說を受けて所の漁師釣なすうろくず我先に「ト橋掛りより漁師大勢名々魚を持乙女小磯も出て」□「鼻に角の有るかながしら　△「お日出鯛から鱧鰹　○「心も鱸の生肴　×「かけ鯛いはずと此大蛸　皆々「差上升でムり升　浮「ムり升と手柄顏爭ひ出して献じける中に交りて傾城乙女小磯と共に安則に目ませ仕方を呑込で態と三つ指咳拂ひ　上「ホウ夫々の得物太義〳〵兼て申付置し富士の因緣名所の謂れ義滿公への御馳走に語られよ　乙女「ハヽア　浮「とおつ〳〵出れば武將を始め滿座の諸侯も目を放さず見つゝ見られて恥かしきまだうら若き菊桔梗謂れを語り始めける　小「殿さんのお詞の嬉しいやら有難いやら聞覺へたあらましをなア　乙「お赦し受て時知らぬ富士の因緣　小「名所の謂れ　乙「鹿の子斑らよ　小「咄し升せう　乙「駿河の富士とは申せども四州にまたがる山續き　小「それなア未申は駿河に屬し　乙「丑寅の隅は相模の御領　小「關八州より見上れば何れも異なる御山の形ち小裏は脚長く南は嶮しき千尺の甲斐より登るを吉田口　乙「駿河は大宮　小「相模と須走　浮「はんかいせいてう凡九里雲を貫く其高さ本に夫々孝靈天皇五年の夏お生れあされた蓬萊山近江には湖一夜の間に両國一所に出來た咄しも空事の雪は六月に消へて其夜に積る不死仙境の尊き山ヲヽ不死とも不二とも二つなき文字に譯ては色々に書くも文者の智惠比らべ天め地分れし其時に神さびて高く尊き駿河なる富士の高根の天野原宿禰のお歌を聞からは孝靈樣の御時代に出來た山とも思はれず社を山の頂きに建るは役の行者樣又佛像數多造りしは空海大師淺間は富士の一名なり是高山はまのあたり木枯らしの森賤機山うと成る澤は偽りの橋と申せば我々に　両人「何ぞをつかふかいなア　浮「虛言は更に申さじと上總之助を尻目に掛けおめる色なく語りける諸事は眞顏の上總之助そらさぬ体にて　上「ヲヽ出來た〳〵君にも御滿悅親人にも御大慶喪美は追て件の茶屋で扣へておらう　両人「畏り升たそんなら必ず　浮「お出をと目の内に君を枝枝暫乙女色を含で立歸る義滿御殿斜めならず　義「實にも女が申せし如く淺間は富士の一

名なると信濃路の淺間が嶽にけをされて近世かゝる古實を知らず賤の女が物語りにて予も一首を得たり○昨日まて富士の高根に見し雪の袖にも移る田子の浦浪　了「ハア、遥れの御秀逸斯る目出度折柄なれば何れも舞樂の用意〳〵、内にて大勢「畏つてムり升る　浮「命に應じて淺間左衛門照行伶人の司と聞へし其骨柄太鼓の役にぞかうしける堂下の舞曲は雪の袖をひるがへし弦魚官の聲は三保に二度天人の舞樂を奏するかと疑はれ曲半ばに過ざる内左衛門急度四方を見渡し「ト左衛門裝束にて出て色々あつて上手を見て」　淺「ハテ心得ぬ音律濁れば調子も乱るゝは察する所吉野の殘黨君を討んと伺ふ者ありと覺ゆる警固の衆中蘆原を御吟味あれ　浮「御吟味あれと淺間が下知畏つたと近習の名々かけ出を御舟諸將も擬勢心ゆるさぬ茂みより狩出したる破れ竹笠釣竿提し浪人振り　淺「扨こそ〳〵ソレ何れも　皆々「腕廻はせ　浮「追取り廻はせば人々も淺間が舞樂の現前にアゝと感ずる斗りなり　淺「ヤア潛まり屈むはおこのやつ　口「眞直に白狀せずば　○「火水の拷問　皆々「サア〳〵何と　浮「何と〳〵とひしめいたりこなたは刀投出し飛しさつてうづくまり　右「御尤の御疑ひ義滿公の御舟此所に止め玉ふとは露知らず釣なせしが思はずも御座寄せ玉ふに南無三逃んと存せしに道遮ぎられ隱れ所なく此蘆原にかゝみ居たるを御咎め申譯け外になし御仁君の御惠みを以て御救し被下らば有難う存じ升る　淺「ヤア紛らはしき言語斯う見た所が舞樂による人とも見へず吉野の浪人と見た目は違はじ心に思ひなき汝ならば音律くるふ樣やあらん遁れぬ所じや白狀致せ　右「ハア、左樣に御意なされば申上ねば遁れぬ身の上當時是より程近き茨村に住める富士右門と申者親々より傳はりて身不肖乍ら音樂の道に達せぬと申にもあらず恐れ乍ら御見知り置下さるべう存じ升る　浮「詞の端々御大將聞し召され右門に向ひ　華「ムゝシテ先祖は如何なる者ぞ　右「ハア、恐れ多き御上意拙者の先祖は住吉の伶人富士右京之進知親と申せし者なりしに天王寺の伶人淺間照盛正し〳〵富士が從弟たりしに攝政公へ讒言なし終には富士を退け淺間を召され淺間增々威勢に募り上意と僞り高峯と号せし太鼓も奪はれ無念積りて病に伏し身まかり玉へば我父右近有知も母諸共住吉を去て身のなりはひも此駿河無念の月日も一片の煙りと相成りせめて先祖へ孝道と受け傳はつたる音律も佛事の爲に世を過ごす身の成果を御推量被下り升せ　浮「御推量と斗りにて涙と共に語りける　華「ホゝウ艱苦の中にも音律の道を忘れぬ神妙〳〵聞捨難き彼が素性左衛門には遁れぬ一家事を糺してよきに計らひ遣はすべし　淺「ハア、畏り奉り升イヤ何右門殿淺間左衛門照行只今聞けば二代三代過たる昔語りは先祖の恥辱其身の不調法を隱さん爲讒言なゝは際ある中のよまひ言其上舞樂の道に達せし樣にいはるゝが餘もやさうでは有まい此後は扶助してくれん猿まねの音樂は一家の恥辱御前体よく披露せん御免を受けて歸宅せられよ　右「田夫野

人の身を以て申上るも恐れありと此儘去らば偽りの罪遁れ難し只今も仰せらるゝ音律の乱れしを以て我かしこに有ることを知りたりと仰せらるゝ忍び聞く者音樂をしるにあらず五音も又乱るべからず五音の變せしを以て聞く人有りと知るときは聊か珍らしからず君子は道を得ん事をたのしみ小人は其歎きを得ん事を樂しむ直くあらずして奏しがたし 淺「ハヽ、假令火を水に消さんとする共天王寺の伶人は太子の御時六時堂の前の鐘寒暑に因て上り下り有るをもて聖靈會迄の中間を指南す我家には迦陵頻伽の秘曲を傳授す世に印を去るや何と 右「ホヽ、本朝の樂て神樂を始とも迦陵頻伽は梵語にして鳥の名なり神田の古實によらば日本の神の岩戸に立籠り玉ふ時八百萬の神舞樂を奏し玉ふ諸行無常の調を以て本意とせずまつた我家には樂器の内太皷を第一とす 淺「ヤアいふな其太皷は某が家の業紛らはしき申條 右「ハヽ、太皷は一名をふんといひ又つゝみと訓す申樂行はれてより細腰皷に太皷小皷の名あり太皷は乱世に是を打て勢を集め治る上には時を知らす某が申所の太皷は春陽の樂器なれば第一の傳とす申所に偽りありや 淺「サア夫は 両人「サア〳〵〳〵 右「御返答は何とでムる 淺「何と丶詰よる右門に返答ていせき拳を貫く憤怒の息ざし義滿公御眉麗は去く 淺「双方共に理に叶ひ此上は水魚の交り我は吾妻に遊びて富士を見て富士を得たり最前盤乙女が淺間は富士の一名といひしも一家の盡せぬ緣盃事は都の舘富士は跡より上洛を拍子に君が榮へも萬歳と拜する海上路になし我家をさして立歸る 〔ト大三重にて双方引ば り宜敷く幕

二幕目 〔萩村富士右門内の場〕 〔駿河國山中の場〕

役名			
一富士太郎	一娘櫻子		
一木村三木之進	一富士右門		
一娘小雪	一侍二人		
一赤目の宇助	一捕手大勢		
一大羽軍平	一馬士一人		
一播磨の五四郎	一家來五人		
一母三雲	一馬一正		
一府中五四郎	一駕舁二人		

捨物平舞臺向ふ見附赤壁納戸口上手折廻り障子家体下手板塀いつもの所門口幕の内より富

士太郎打網をつゞくり居る在郷歌にて幕開ら〳〵　太郎「ヤレ〳〵ひよんな漁師の業に入て仕馴れぬ事の情なさ網のつゞくりにはつとしたドレ一休みせうわいの」「ト小雪振袖にて奥より茶を汲み出て」小雪「兄さん出花じや一つ呑んせ　太郎「ナヽ妹よう氣が付たはつこり氣の尽た所じや　小「どうで仕付ぬ手業精が尽き升せう私が手傳ひ升せうわいなア」「ト網をつゞくりに掛る三雲着流し菊の花を持て橋掛りより出て」三雲「今戻り升たぞや　太郎「ナヽ母様お帰でムり升か　小「きつうお早うムり升たなア　三「父上はまだお帰りないかや　太郎「ハイまだお帰りはムり升せぬ　小「母様奇麗な野菊を摘でお帰り被成升たなア　三「サイのふお寺參りの帰り道野邊に乱菊の此見事摘んで帰り升たもあすは姑御の一週忌佛様へ供うと思ひ升して　太郎「夫は何よりの御馳走でムり升る　三「馳走の序にモウ晝飯たべやつたか　小「イヽエお二方のお帰りを待ており升た　三「夫こそ入らぬ御遠慮じや父上の程は知れまい私はまだはしうない二人共にマア先へ　小「お花も上げて左様致し升せう　太郎「そんなら母さん両人「お先へたべ升そう」「ト太郎先へ小雪菊の花を持て納戸へ這入る向ふより五四郎釣籠を持門口へ來て」五四郎「右門様とは内方でムり升るか私はッイ府の町の者まだお帰りはムり升せぬか　三「まだ夫ヽは帰へられ升せぬ　五「御免被成升せ「トずつと通る」三「何ぞ御用あつてお出被成升たか　五「私は京の五條に暮して古手商賣府の町の二三五といふはわしが弟今度母者人を京へ呼迎へんと來た所が中風の病ひ所で今日御亭主に逢てよ〳〵見れば昔し住吉に居られた時の大恩ろ久々にて逢た所が右門殿の難義の場所宇助といふ人に借られた五両の金　三「左様なら宇助殿が　五「サアろこよ又悦ばす俄の出世けふ義滿様とやらのお舟に召され樂の事からお見出しで急に吾妻へ連れらるゝといはれた所が舞樂とやらいふ大事の秘書持ては行たし金はなしそこでわしに五両の無心尤用意はあるけれどサア何十になつても背かれぬは母の詞金を出せば夫だけの價があるかと遣女子の小了簡ろこで聞きや爰にお銀御があるげな夫を嫁よ貰ふた代り樽代じやといふて母者人へつき付る氣夫も爰の逗留二三日だけ介抱旁々おこしてあるは旅立の時ろつと戻し母への手前はよいようにそりや胸にあると右門殿にいふたれば早速承知彼の五両の金を持て宇助殿方へ卷物取りに行れ升たわいのう　三「夫はマア悦ばしう存じ升る　五「所で右門殿がいはれたは帰りがけに内へ寄り此釣籠を目印に連れていんでとおこされた夫で態々來升たてや「ト小雪覗き居る」三「イヤ迚もの事夫ヽの帰りを待た上で　五「コリヤ尤じや一ト帰りいんで出なをして來る分の事　三「ならう事ならどうぞ左様に　五「心得たろんなら追つ付け帰つたら　三「様子も聞て　五「其上で　三「五四郎様　五「後に逢ひ升せう「ト思入あつて橋掛りへ忍ぶ右門走り出て來り内へ這入り」右門「今帰たぞ　三「ナヽお帰り被成升したか「ト太郎小雪奥より出て」太郎「只今でム

り升るか」小雪「嫌おひもとうムり升せう　三「早速乍ら様子を聞かねば　右「ムヽ成程ナニ兄弟の者今身共歸り掛け漁師どもが申には此富士の兄弟仲間へ入て間もないに働に不精なとおこりおつた一歸り顔出し仕てお來やれ　太郎「左様なら往て參じ升せう　小「私も一所になア　三「夫がよい　右「イヤモウ何するのも暫しの渡世じや　太郎「左様おらば父上　小「母様太郎「どうゝ様子の　右「ヤア　太郎「ドリヤ參り升せうか〔ト両人向ふへ這入る」　三「右門殿思ひ掛けない耳寄りな様子の段々　右「されば今日將軍家の咎めに逢ふたが此身の出世樂器の道より御意に叶ひ昔に歸る富士の家近々上洛せよとの仰付られなれども樂器の秘書御覽に供んも人手にあつては儘にもならずまづ是を取り得たく又早う我遂に悦ばせ度く急ぎしに能く思へば兄弟の者大切の品質物に差入れし事聞きとつらば末に至つて彼秘書麁略に存じおらうと夫故態々出し抜たいひ聞かせには折もあらんが兎に角大事の彼一卷　三「サア其事に付て〔ト橋掛りより侍出て」　侍「お頼み申さう富士右門殿のお宅は是か主人今川上總之助より火急の用事直様同道いたせと使の趣イザ御越なされい　右「是は御苦勞千万然らば參上仕らん刀を出しやれ　三「ハイ〔ト納戸へ這入り刀を持て出て右門に渡す」　三「何かはお歸りあつた上　侍「イザお越し　右「御免下され〔ト仲間先に立右門向ふへ三雲は奥へ這入る橋掛りより小雪走り出て内へ這入り」　小雪「最前五四郎様とやらが見へ始めの程は聞かねども私を連れていねるのと金の様子は〇偖に大事の卷物を人手に渡してあるとやら大切ないものが戻る事ならばどうぞさうしてお二方のお心が休めたいアヽどういふ譯か委しい事聞きたいなア〔ト五四郎橋掛りよりそつと出て門口にて足音する小雪上手の障子家体へ這入る」　五四郎「お内儀あるじはまだ戻らずか〔ト奥より三雲出て」　三雲「五四郎様たつた今歸られ升して咄さうと思ふ内今川様より急のお召し　五「ナヽそりや翌早々上洛せいに違ひはない今噂を聞て來た時に娘の事じや母者を言ひ紛らし金の替りは此お娘と見せたら直によい様にくろめて來う一寸ならば來てもよからう　三「ナヽ夫しきの事は何が扱アノ子供に其咄しを小「ろりや聞て居升する〔ト上手より出る」　五「お娘か　小「様子を聞けばあなたのお世話私しやッィいて參り升せう　三「ろんなら一寸往てたもるか　五「直ぐに連て戻り升する　小「そんならかゝさん　三「早う戻りや　五「サアムれ〔ト五四郎小雪橋掛りへ這入る向ふより太郎戻り」　太郎「母様小雪は戻り升たか　三「戻り升した　太郎「濱邊で見失ひ夫でうか〳〵シテ父上は　三「ちよつとまた所から呼びに見へてもそつと先に　太郎「そりや仲間やうな人が呼びに來たのじやムり升せぬか　三「ムヽさうじやわいなア　太郎「今ちらりと見たが夫なら何ぞ氣遣ひあ　三「ヤア　太郎「私は一寸〔ト表へ出て」　太郎「あれは偖に　三「何じやいのう〔ト向ふより家來大勢右門の前後を取卷き跡より大羽軍平野袴鞭先にて付出て」　家來大勢「歩め〳〵

〔ト本舞臺へ來て〕軍平「宅は是か　右門「へイ　家皆々「動くな　太郎「アイヤお待なされい　三「見れば夫ト右門殿を　右「両人共に氣遣ふな今朝將軍の御前に於て近き内に上洛致せよとあつて立歸た其跡で我を嫉む逆意の仕業　軍「御若年の我君一旦御意に叶ひしがお紕しあれば吉野方に心を寄せし富士右門終には君へ仇をなさん敵の末は根を斷てと以ての外の御怒り家内も共に搦め來れと主人の仰せサアうぬら腕廻せ〔ト木村三木之進家來を連れ窺ひ居る〕太郎「コハ覺へもなき　三「無實のお咎め　右「ハテ差當りしお上の御威勢申開の立べき所で相立見する扣へて居やれ　軍「ソレ悴めから引くゝれ〔ト家來ばらく〕太郎に掛る一寸立廻つて」　太郎「非道の縄目かゝり升せぬぞ　右「コリヤ悪しく手向ひ仕り理あつて罪に落入るかうは成るまい　軍「ヤアこなたは　三木「軍平殿君よりの御意の下らぬお役目　軍「何と　三木「イヤ私の宿意を以て權威に任せ僞り表裏只今君の御意下り急ぎ右門を上洛させよと主人今川承り斯る使を家る某　軍「ヤア　三木「跡方もなき罪を拵へ富士親子を失おはんとする此工みは偖に淺間〇サア淺き手立但し御上意に相違なくば何ぞ証據でもあつての義か　軍「サア夫は　三木「由なき事に加擔なしあたら命を失ふ所存か　軍「ムヽ　三木「此旨一々言上せうの軍「サ其義は　三木「合点參らば早く歸れよ　軍「然らば此儘　三木「お引あさるか　軍「エヽ思へば　三木「何と　軍「家來參れ〔ト家來を連れ橋掛りへ這入る〕太郎「先づく〜　三人「あれへ　三木「御免下れい〔ト上座に直る〕　右「近頃以て御苦勞の御入來　三「殊に難義を遁れしも　太郎「あなた樣の御厚意　三人「有難う存じ升する〔ト三木之進百両包みを出し〕　三木「早速ながら彌々明朝君のお立に付添ふて上洛のあるべき樣尤主人の差圖にて御子息迄のお身のまはり諸式の道具皆城内に取揃へ御家來迄両三人讓り申て道中使ひ殘る方なき御拵らへ有難く思召されよ　右「ハヽコハ恐れ入たる御惠み　三「是も偏に今川樣のお執成しいか斗りか有難う三人「存じ奉り升する　三木「お悦びは左ころ〜〜是に又金子百両外に手元の拵へ火急の段は氣の毒ながら明朝　右「取敢へず直樣出立　三木「某も心せき早お暇　三「此上乍ら　太郎「万事宜しう　右「御役目御苦勞〔ト三木之進は向ふへ這入る暮六つの鐘鳴る字助出て〕　字助「サア約束の暮六つじや金返すか小雪を渡すか　右「チヽよう來て下さつた金渡さうシタが彼の品は　字「爰にある〔ト帛紗包みの卷物を出す右門百両の封押切て五両の金を出し〕　右「長々の延引御禮はゆる〜〜極めの利足にちと多けれども金子六両御請取下されい　字「成らう事ならやつぱりお娘が望みじや　右「イヤモウ金の替りに娘を渡して此右門が立升せうかい　太郎「誠に嬉しさに紛れ升したが此妹は母樣ゑれへ參り升した　三「南無阿彌陀佛　太郎「アヽコレ待た　右「ヤイかゝる目出度折柄に何故の自害なるぞ　三「言譯もなきアノ小雪最前五四郎と

いふ人が見へ右門殿が秘書を取り得る金五両あだては母の手前委細の事は右門殿承知の事と日印に釣籠持て眞身の咄し連れていんだら引返し迄て來る筈此事あなたへ咄さうと思ふに間もない今日のしだら聞けば聞く程紛らはしい娘小雪を五四郎に奪ひ取られしは母の誤りどうぞ死なして下されい　右「ムヽ　字「最前女子を馬に載せ滅多に走つた横顔は慥かに小雪おれが望みも邪魔する人買追欠てさうじや」「ト向ふへ走り這入る太郎も行うとする」　右「ヤア悴何處へ行く　太郎「五四郎とやら追駈て　右「さう思ふは尤なれども方角知れず時も過ぎ殊更先の面躰も知らず　太郎「エヽ　右「サアせかずと篤と思案のいたせ　太郎「チエヽ父上　右「悴　三「何とせうぞいのう「ト泣落す侍走り出て」　侍「ハッ右門様へ主人の仰せ我君只今御出立直様お越しあれと急ぎのお迎ひに參上仕つて厶り升する　右「ヤア〳〵最早君の　太郎「お立とな　侍「急ぎ御用意　右「心得升した　侍「おぬかりあるな「トいひ捨て走り這入る」　右「思もよらぬ今日の出世　太郎「悦びあれば　三「悲しみの　右「あるも定まる世の因果　太郎「とはいへ妹の　三「生死の程が　右「ハテ滿ればかくる道理　両人「デモ　右「公事を娘に替へられうかい「ト宜しく返し山幕を冠せる

道物山幕雨車雷の鳴物にて道具納る「ト向ふより五四郎鎧櫂ばつてう笠にて走り出る上手より宇助俠をかぶり走り出て本舞臺にて突當り両人こけ」　五四郎「ヤレ〳〵どいらい雷じや

是では馬も動きおるまいドレはつ附うか「ト行うとする」　宇助「コリヤ待ちやがれ　五「うぬどいつじや　宇「今日三浦で逢た赤目の宇助じやそれが連てふけつた小雪おれにおこせ　五「わりやどうして夫を知つた　宇「ナヽ右門が處でしれたゆへ山は手のもの追付たのじや　五「うぬに相手になる際はないわい　宇「行衛をいはぬか「ト両人立廻り宇助を蹴倒し」　五「そんなじやないわい「ト上手へ走り這入る宇助立上つて」　宇「どつちへうせた何でもおのれ「ト上手へ引返し這入る山幕切て落す返し

道物正面二重の高土手板松遠見浪の打寄せ岩をどに見せかけあり本釣鐘にて道具納る「ト右門着付野袴鞭先大小菅笠富士太郎同じ拵へ跡に駕舁家來付添ひ出て」　右門「太郎あの鐘は六つであらうな　太郎「左樣でムり升　右「モウ明るよ間もあるまい然し今の時雨には困つたや　太郎「けれどもさつぱり晴れ升てムり升する○アイタヽヽヽ　右「何とした〳〵　太郎「爪を石にて怪我し升した　右「歩みもつかぬ旅路道理〳〵駕舁先の宿へは早いかはど　駕舁「モウ五六丁あるでムり升せう　右「ムヽ其駕は先へやつてよき茶店を起し休んで居やれ　駕「スヤお駕は先へ　右「ナヽサ　太郎「コレ駕の衆母樣がお休みならそろ〳〵と頼み升　駕「ろんなら先へ　右「早く〳〵「ト駕かき家來下手へ這入る五四郎駄賃馬の上へ櫻子を振袖でくゝりて深き三度笠をきせて坊主合羽にて姿を隠し馬のたを連て出て」　馬士「何と五四郎夜道と

いふものは中々いけるものじやないかア　五四郎「ナイヤイ此人買は何が成らうぞい　馬「中でも此馬方はつらい役じや　五「何するも商賣じやヤイめ郎よ追付けおやまに賣つたら味い物は喰はしよいべゝ着せるはサアはへすとうせう　馬「はてつばらめ歩まないゝ〔ト行かける右門太郎に呼きすつと出て」　右「五四郎待て　両人「何じやぞい　右「様子は殘らず聞た　太郎「人買の五四郎め　右「娘を返へせ　両人「夫知つたら〔ト切てかゝる右門太郎立廻てとゞめ馬士を切り五四郎を一寸當櫻子を下ろし合羽笠など解くと遠見の岩の間より朝日出る鶏笛になり」　右「スリヤ五四郎といふた汝は　五「播磨の五四郎　太郎「妹小雪と思ふたろちは　櫻子「櫻子と申升る　右「ろんなら五に　太郎「きつい間違ひ　五「ヤア〔ト かゝる右門ポント切る」　両人「ヤ　右「コリヤ〔ト押へる太郎あたりへこなし右門刀を拭ふ櫻子ふるふ此見得よろしく幕

三幕目

役名

一大内義弘　一赤松義則　一赤瀬和泉　一小原女お槌

（産土神社鳥居先の場　住吉神社門前の場　舞樂試合の場　邦ヶ辻の場　富士右門屋敷の場）

一富士太郎　一大島隼人　一奴國平　一熊毛主計　一村主兵助　一此村玄蕃　一娘お花　一雜兵作内　一住ノ江守　一雜兵文治　一同長太　一萩原左膳　一岩田藤馬　一小原女お橋　一相良大弐　一下部忠助　一右門妻三雲　一室積平馬　一忍ぶ賣お京　一姫櫻子　一浅間照行　一右門知之　一百姓大勢　一仕出し大勢　一諸士大勢　一並大名大勢　一里の子五人　一家來二人

行物見附浅黄幕上手茶見世臆病口茂賀半暖簾をかけ下手松の實木櫻の釣枝床机ょ雜兵長太

作内文治軍兵の拵へ邊りに鉢肴を並べ長太瓢簞を叩き作内文治と茶碗にて拍子ぞり壬生雛子にて幕開く 作、文「瓢簞頼ひぞ〳〵 三人「瓢簞じや〳〵 お花「お銚子替へ升せうか 三人「コリヤ〳〵おむす一つあいをしろ〳〵 花「私しや不調法にムり升 長太「不調法なら教へてやらう 花「アイ、申悪い事おされすと村外れの壬生狂言御見物被成升せぬか 文治「なんだ狂言 花「アイ紅葉狩りじやの二人狂のと六ッかしい狂言致し升〔ト捨臺詞にて酒事に成る向ふより小原女お橘お桃お京は忍ぶ籠を持て出て〕 お桃「マア行かんせいなア お京「何でもさうには違ひないわいなア お橘「格好が違ふてゐるわいなア 桃「マア茶店で一休みしてから又尋て見る待たんせいなア〔ト無理にお京を連て本舞臺へ來る〕 作、文「ヤア〳〵女共姦ましい 三人「下がれ〳〵 女三人「ハイ〳〵 長「酒興酒宴の場席も搆はず慮外働ら〳〵女郎共ろこ動きおるな 作内「長太待て〳〵形りは賤しい女郎なれどあてやかな者だぞよ 文「如何樣そおをものだよ 長「ゑいは器量にめんじて了簡致すは爰へ來い 三人「ハイ 花「何にも怖はい事はムんせぬ程に行かしやんせいなア 桃「わしが腰骨に引ッ付て二人作らお出で〳〵〔ト傍へ來り〕 三人「ハイ何でムんす 長「何でもあいつは器量がよい仔細をいへ 桃「サア其子の産れ付のよいのが持合ひの根元でムんす 三人「とは又どうして 桃「今年の春で此大阪からこちの里へムんした優しい男フトした縁で此子の内へ掛り人何が互ひの浮氣ざかり 京「アヽコレそりや何をいひじやぞいなア 桃「ハテ咄しするのも便りを聞く種じやわいなア 作「さうして跡は 二人「どうじや〳〵 桃「わしも始めは法界悋氣此子の所へ走つて往て胸盡をかうとつて 長「こりや何とする 桃「我身斗りよい事して近所の娘の鼻明かし夫で濟むか〳〵性悪女子の助兵衛め〔ト長太の胸ぐら取て突放す床机より落ちる〕 京、桃「チヽ、滅相な 京「どこもお怪我はムり升せなんだか 長「イヤろもしが手をとり起してくれたで痛みが早速留つた樣だシテ其男の仕廻はどうじや 京「お羞しい事乍らふと内を出やしやんして今に行方が知れ升せぬわいなア 長「氣遣ひ致すなおらが尋ね出してくれう今宵は三人とも屋敷で一宿せい 京「イエ〳〵夫では 長「ハテ身共に任せい○何と両人三人を連歸り惠方果報の圖引とどうであらう 作、文「こりやよこのらう 桃「定らぬ闇とるよりいつそ私はお前に隨はう 長「エヽ何さらすぞい〔ト突飛ばす お花はお京お桃に逃いと叫く両人行うとするを〕 両人「コリヤ逃さぬは 長「おら〔ト追廻しの立廻りに成る向ふより室積平馬着込み腹卷金入の野袴武者草鞋にて出て本舞臺へ來て〕 平馬「靜まりおらう〔ト此聲に驚きお京お花は茶店お橘お桃は橋掛りへ逃けて這入る〕 平「ヤイ我達は何と心得おる 此度足利殿の嚴命に因て某が主人赤松上總之助義則公まつた大内櫂太夫義廣殿と吉野の臣山名氏清を討亡すと雖とも其殘黨所々に埋伏油斷ならず當所に陣を張り毎日近在を詮議の時節女童べを捕らへての酒興言語同

斷不敵のしだら憎きやつらめ　長「不屈きの段眞平　二人「御免下さり升せう　平「以後急度たしなみおらう　三人「ハア、　平「と申は表向申さば陣中の鬱晴らし其方達に申付た彼の富士が娘櫻子先日ちらりと見受け身が宿所の伽にと思ひの外今朝聞ば右門が實子富士太郎と申者と近々婚禮の由左あれば我望みは叶はぬ道理只今是へ參る道筋儘に夫と見た目は違はぬ是非此道へ參るは必定長太文治は是に殘り櫻子が親子參るを待受け此方の手に入る樣合点か　作「何が扨主人の御意　文「追附け吉左右お聞せ申でムり升せう　平「出かす〳〵淺間照行に密談の仔細もあれば作内來やれ「ト作内を連れ向ふへ這入る」　長「なんと文治慈といふやつい捨らおいの然しモウ一盃引ッ掛ようか　文「ナヽサ○コレお娘よ酒だ〳〵「トお花たんぼ持出て酒事に成る向ふより村主兵助着附木綿紙子のつぎ〳〵手に皷を持編笠を着て一本さし子役三四人附て出て」　子役合「コレ〳〵皷のおつさん皷を叩いて見せさんせ　口「おりやゝ謠が面白い早う始めて　皆々「見せさんせ　兵助「いつもの所へ店出して夫から始めて聞さう程におれに附てムれ〳〵　花「ナヽ、皷樣今ムんしたか敷物は爰にあるぞへ　長「娘ありや何者だ　花「お皷を打て謠を諷ふて合力を受る人でムんす　長「品ンのよい乞食だな　文「りやんての果か　兵「是は有難いお見立涙人体抔とは忝うムり升元は大和の涙人三つ山の何某といはれし町人の悴でムり升が何が色めに打込んで然も其色めが二人で月と花とに有頂天親の身代遣ひ果し二人の太夫も行方知れず親の内は不首尾よあり太夫を尋ね求めてと出升たが種に盡て今では此形り後悔先に立ずと本に夢が覺め升した　子役「伯父さん始めさんせい　皆々「コレ〳〵　兵「サア今拍つぞ()お聞つらうはムり升せうけれど悪いも却てお笑草御酒の興にもなり升せうお聞被成て下さり升せ○抑々大和の國三ッ山物語り世も古への奈良の榮や拍手公成といふものあり又其頃桂子櫻子迚二人の遊女ありしに彼拍手公成に契りを籠めて玉手箱二道かゝるさゝがにのいと淺からぬ思ひ妻月の夜風に行かう住家はうねひみゝなし山里も二ッの采女のきぬ花よ月よと爭ひしに「ト此謠に大小をかり向ふより三雲着流し櫛出し帽子娘櫻子奴一人附添ひ出て」　三雲「ノウ櫻子彌生に近附き往き來う人の賑はしき心も春に浮立てばそなたも心が勇んで居やらうの　櫻「母樣の御意の通り御恩も深き私が身の上殊に義賈樣との御取結びは此身の治りお嬉しう存じ升　三「娘と定め其上に悴が嫁と定ひるも是皆過去の因緣事富士太郎が元服も婚禮の下拵へ夫故けふの神詣は吉事を祈る爲でムるわいのう　櫻「父上にも今日は大切な樂のお役目お留守中の事なれば富士太郎さんゐも嘸御待兼でムんせうモウお歸り被成升せぬか　三「最前から餘程の道向ふの茶店で一寸休んで歸り升せう「ト皆々本舞臺へ來る」　両人「イヤけうといゝ〳〵マア息つぎに一盃呑め　忠助「南無三最前の茶店でお茸入を取殘し升たさうな一走り取て參り升せう　三「そんおらさうして被下

れい　忠「チイ〳〵」ト向ふへ走り這入る」　長「イヤ富士右門殿の御内証親子連で何れへお越し被成た　三「さうおつしやるはどなたでムり升る　長「我々は室積平馬の内の者共　文「ろこ元のお出を先程より相待おつた　長「仔細と申は息女櫻子殿主人平馬兼ての懇望我々を以てのいひ入れ早速請られ櫻子殿を　三「ア、是は有難い義でムり升れど此義斗りは　長「なり升せぬか　三「サア大内様の差圖に因て近々富士太郎と説言させる此櫻子　長「ならずばいつそ手短かに　文「合点じや」ト両人櫻子が手を取らうとする」　三「こりや何と被成る　文「主人へ連行く　両人「櫻子來い」ト引立る三雲さゝへる立廻りの内兵助両人を投る」　両人「アイタ、ゝ、○ヨウうぬは最前の物貰ひめ　文「武士たるものを　両人「なぜ投た　兵「何の投升せうぞ　長「投ぬものが何で爰へ出しやばつた　兵「お爲を存じて　両人「何爲とは　兵「先程より承り升ればぬしあるお人を無理口説夫でも武士といはれ升か　両人「ヤ　兵「サアお爲といふは爰の事但命がなうても不義不道をする御所存か　両人「イヤ夫は　兵「訴へて褒美にせうか　両人「サア　三人「サア〳〵　文「七面倒な　長「邪魔するうぬから」ト宜敷立廻つて両人逃て這入る」　兵「ハテ馬鹿〳〵しい　三「是はマア急難を遁れ升たもあなたのお蔭　櫻「何とお禮を申さうやら　兵「イヤお禮おつたやる樣な者でハムり升せぬ姫君お懐かしうムり升る」ト笠を脱ぐ」　櫻「ヤアろなたは兵助思ひ掛けない　兵「よう御無事でおつて下さり升た　三「ろんなら兼て聞に聞た　櫻「家の臣村主兵助でムり升わいなア　兵「思ひ出すも便りなき次第父御は正しき南朝の臣橘本治部之亟祐近樣世の乱れに悲しくも我々夫婦がお供申落んともあてどなくさまよう折しもあなたの御病氣　櫻「ろなたが藥を求めんと行きやつた跡へ途中の狼藉お礼を切伏せ自分を奪ひ立退く曲者何國ともなく伴はれしが不思議に天下の御伶人富士右門樣に助けられ命永らへもあればこそ今の對面　兵「殊に主從縁の尽さる所先刻より承ればどうこの御親子の間　櫻「サアお二方のお情けにて父上の菩提母樣の吊ひ夫に富士太郎樣といふ夫は〳〵立派な御實子と　兵「アノ縁組でムり升るか　櫻「チイのう　兵「重々厚き御懇情エヽ奥樣有難うムり升　三「何の禮に及ぶ事聞けば此子も差しからぬ父の素性見ればこなたも流浪の樣子　櫻「聞たいはお礼の身の上咄して聞かしや　兵「ハッ拙者其節藥を求め松原迄歸り見れば人影だにも嵐吹く松の木影尋ね廻れど其甲斐なき通行人の噂さには廿三四の女一人痛手を負ふて眞南へ今駈ずしと聞や否行掛る内二八餘りの女を捕へ猿轡をはめ縛つて行しは不便な者やといふも耳より扨ころ姫君シテ連行し方角はと尋ね聞しは街道の西南女房如きは死ねば死ねと追駈しかどはや時過ぎ姫君を奪ひ取られし不忠者申譯に切腹と刀の柄に手は掛たれど姫君の御先途も見屆けず此儘死んは重なる不忠と命限り根限り尋ね廻つてお行方求め父上樣の御筐の金子の包みお手渡し申さいでは〻と國々をさまよひ歩き斯く成り果候得共矢張

りお金は封印の儘肌に附け朝夕拜ゑて袖乞のなりはひ昔を今に三ッ山の諺も名にし櫻子と
ある名を呼ぶも姫君の便り求めんとの心念願通じ御ぇんばせ拜する事拙者が悦び生々世々
奥樣姫君御推量被成て下さり升せ　三「聞ば聞く程忠義の臣此後は悴富士に何と仕へてたも
らぬか　兵「ハッ姫君のお傍に置て下さり升せうなれば御恩ある御家猶忠義の勵み度き拙者
が望み　櫻「ヲヽ出ぇのしやつた然し父上の思召が　三「そりや氣遣ふに及ばぬ事只さへ慈悲心
深き夫ト共に悦び給ふらん　両人「エヽ忝い〔ト兵助櫻子に金を渡す向ふより津守國平忠助
出て〕國平「忠助よい所で逢ふたシテ奥樣のムる所は　忠助「アノ茶店の内に　國「サア參らう
か〔ト本舞臺へ來て〕　忠「お莫入を取つて參り升た　三「國平でないか　國「ハッ奥樣是にお渡
りでムり升か親旦那より急のお使ひ樂家より取つて返せば御他行のよしお跡を慕ひ參る道
にて忠助に逢ひ早速參上イザお弥御覽あられ升せう　三「夫は太義〔ト弥を見て〕　三「娘悦び
や大内樣の仰せには日柄もよければあすの夜に婚禮の取結び用意せよとの父御のお弥　櫻「
エヽ夫はマアお嬉い事でムり升　兵「スリヤ明日御祝言の取結び　三「サアお上みの仰せ早う
歸つて何かの用意　國「奥樣此仁は　三「サア此者は仔細ある家來屋敷に歸つて委しう咄し升
せう　兵「是非朋輩になれば以後は入魂に　國「何が扨忠義は同じ　三「妾は直ぐに　兵「お屋敷
へ　國「下郎は是れより樂屋へ歸り　三「ろんなら此儘　國「お別れ申　兵「サアお出被成升せ〔
ト皆々這入る國平殘つて〕　國「旦那も嘸お待兼樂屋へ引返さうか〔ト お京出掛居て〕　京「逢
いたかつた逢ひ度うムり升たわいなア　國「思ひ掛ないどうして此所へ　京「サアお前日外所
を立退かしやんしてから都ゝ元より此大阪へ捜し參れど便りも知れず振捨られた私が身の
上まだしも神樣のお蔭にや今朝ちらりとお姿を見附たも深い緣斯うお目に掛るからは早う
戻つて女夫に成り一所に暮して下さんせいなア　國「俄に所を立退たも故郷津の國住の江に
歸り主取りせしは家名を引起さん我心願成就致さば呼び迎ん夫迄ゝ國へ歸り吉左右を待て
居や　京「イエ〳〵そりや聞へ升せぬ折角逢ふて又別れいとはあんまり胴慾じやわいなア
國「サア何事も思ふに任せぬ主ある此身聞入て立歸つてたもひのう　京「そんなら一寸あの鼓
賣の内へ〔ト文治長太出掛居る〕　國「滅相な御用先といひ殊に壹中　京「大事ないわいなア
〔ト長太文治ワアイといふて中へ這入る両人悔りして〕　國「あなた方は　長「奴めちと遠慮ひ
ろいだがよい其女郎めは最前おらが見初めて置たに　文「ヤイ女郎め斯う成つたらこちらへ
來い　國「ハテ腎張な雜兵達見初めたとあるからは　京「わしを捕へてじやら〳〵と夫から跡
でお前の御主人へ無体の狼狽　長「したら何じや兼て淺間照行殿と不和なる右門が身内の下
素め　文「ぶつばなゑて女を奪ひ取れ　両人「覺悟ひろげ〔ト文治お京をひりに引ッ張り向ふ
へ這入る長太支へ立廻つて國平を當向ふへ走り這入る國平起上つて〕　國「うぬ何國迄も〔ト

向ふへ走り這入る返し

造物奥深に金具張りの大門平舞臺立派なる石塁東西築地塀上手下馬札禅の鳴物にて道具納る〔ト向ふより赤松義則陣羽織胸鎧跡より藤馬和泉大貳袴軍兵大勢付添ひ出る室積平馬出迎ひ〕 平「御前には存じの外なるお早きお歸り併し先刻より義弘公にもお尋夫故途中迄お迎へ参らんと只今参る折柄でムり升 赤松「此度某發向せしは遠江の城主山名氏清將軍義滿公を恨み挙らん抔企て去るに因て斯くいふ赤松義則大内抔討に手間隙入らず難おく没せしは我軍略山名か殘黨當浪花に埋伏のよし根々斷ちくれんと當地に滯留も申さば繁華少しは軍氣の鬱敷旁々然るに昨日物見が訴へ來に當つて怪敷雲合大内を扳掛け參つて見れば案に違ひ夫幸ひに若江淀川近邊より小堀江迄歸る野面ヲ雲の色氣四面を見晴らし斯樣の義なればさゝへを持參にも及ばんものと夫のみ殘念にて立歸つたてや 平「コハ宜しき御鬱散樂人淺間敷御同伴遊ばされしは扨はお立寄りにてムり升るか 樂「イヤ先刻より御挨拶と存じたれども差扣へあり升たが誠よ此度我々が大慶は御両所樣當所の御社へ御新願あつて勇めの樂器則住吉富士右門某両人に仰下り昨朝より用意萬端早御前へ上る折柄お姿を見付けお供仕つてムり升る 赤「シテ樂の場所はしつらい置つるや 平「今朝より急度申付飾り置升てムる則富士右門もとくに參り何か大内の主シへ媚諂ひうね一人が樂人づら胸惡く存升るて赤「ア、匹夫の彼等に目を掛けるは胸の器が小さい〳〵淺間迚も左に心得花は櫻木人は武士樂人の達人より劔術の手練に及び武家に身を寄せ日の本に名を上る名將になるも一生樂「御意の通り某兼て武に心を寄せ劔術躰術を以て閉口させる折もがなと心掛け罷在り升藤「我々迚も淺間殿を師と頼み樂の道に入乍ら君の御威勢を見升しては 景「下拙等も同じ大小指すならば勇々しき武士に成り度もの 大「殊更以て義則公のお勢ひお供の道筋三人とも藤「恐れ入り 両人「挙り升 平「將軍の御膝元には諸士大名ありといへども分けて此度の御両所其内でも御主人臣下たる某迄おのづと尊き身の威勢 赤「ハテ扨益おき廣言未熟の至り樂「尊き者は自然と尊く夜の星に顯てるゝも其道理二ッとなきと恐れ乍ら左衛門承知致しおり升る〔ト門の内より住の江守袴羽織にて出て〕 住の江「淺間左衛門樣へ申上升る師たる右門先刻より貴公樣の御入來を相待おられ升るイザ神前へお入あつて然るべう存じ升る樂「何樣急がるゝも老人の御尤 赤「時刻も餘程平馬用意よくば急ぎ神樂の奏してよからう樂「然らば君にも 赤「直樣假家へ 樂「イザお入り 皆々「あらせられ升せう〔ト赤松義則平馬付添ひ門内へ這入る〕 樂「何江守富士殿も今日は御苦勞某も追ッ付夫へと達してくりやれ住「畏つてムり升〔ト門内へ這入る〕 藤「今朝先生御他行の節平馬樣お越しあつて右門が一件外に手段もあるべき義か密々に御意得んと御傳言疾くより申上んと存じたれども君の御前

差扣へ平馬樣にも御面談あられ升せう　淺「年月意趣ある富士右門彼足利に目見得て後諸大名の舞樂にも我を召されず剩へ彼の高峯と号する太皷富士に返しいはんや今日高慢に其太皷も持參に及ばん御前に於て耻ぢ面與へ跡にて太皷取返し是非に及ばゝ絶命と待設けたる今日只今　和「平馬樣にも富士が娘櫻子とやらに兼ての執心　式「此義も先生にお賴みあらん　國「右門をなくして其跡では如何樣とも心の儘　和「然らば平馬樣に　式「今一應　和「御内談あり富士が一件　藤「仕廻ひを附けるは　淺「コレ○イザ參り升せう（ト淺間先に三人門内へ這入る下手より國平出て」　國平「淺間といひ門人が詞のはし主人富士を恨むる樣子油斷ならざる今日の時宜とあつて門内へ入る事叶はずハテ心ならぬ事じやなア（ト お京出て」　京「ハイ御免被成て下さり升せ　國「何者じや（ト顔見合せ」　京「國平殿か又方々尋ねたわいなア　國「こりやろこ所か此方には一大事に及びさうなハテどうかな　京「どうあつても一旦國へ　國「アヽろこ所ではないといふに　京「夫迄はお前は（ト平馬出て」　平馬「憎い両人動きやがるな　國「コハ何事でムり升る　平「慮外な下郎め當所に於て神勇めの樂器始る其折柄門前に女を捕へ不忠の仕業神前の穢れ　國「イヤ全く不義にあらず此女は拙者が妹故郷より親共の使ひに因て　京「アヽ何のさうでは　國「ハテ女の差出る場所ではないぞ○併も血を分た眞實眞身の　平「ハテあてやかな妹じやなアなに下郎身が頼ひべき一義取持致せ　國「そりや何を　平「アノ女身が御に　両人「エヽ　平「身も兼て心掛て居る一女ありと雖ども今に於て心に任せぬ然るに其者心に叶ふた口説落して隨はせ　國「是は存じも寄らぬ賤しき者を心入先づ一應尋ねし上よて　京「否じやわいなア　平「得心の致さずば僞りの兄弟不義の死罪に行うか　國「イヤ其事は　平「兄弟なれば取持致せ　國「サア夫は　平「隨ふか　國「サア　両人「サア〳〵〳〵　平「エヽ面倒な（ト平馬お京を追廻す下手よりお槌お橋出て」　槌、橋「コレ見附けた（ト お京を捕へる國平お京を無理に連行く平馬さゝへる蛇の子取りに成りトヽ國平兵馬を突倒し四人下手へ逃て這入る」　平「うぬやるまいぞ〳〵（ト追駈け這入る返し

造物三間の間高二重見附唐紙大襖間白張の幕を掛け大内の紋赤松の紋付下手折廻り庭の書割二重よ赤松義則後ろに大島隼人熊毛主計小姓一人太刀を持て居る眞中に三寶土器長柄の銚子平舞臺の上手に淺間素袍掛け烏帽子藤馬和泉大貳下手に富士右門雞兜樂裝束後ろに樂太皷を据へ住の江守卯平和中左勝雞兜樂人の拵へにて並び居る白雌子にて道具留る　平人「今日の樂は山名氏清退治の悦び是則ち當社の神力　主計「逆意の輩討亡し全くの動はし　平人「神を勇めの催し首尾よく納り我々迄も　皆々「大悦至極に存じ奉る　大内「元弘建武の乱より藩屏の爭ひ止ひ時なく數十年にして和田楠も山名氏清が爲に遂に落城　赤松「然るに山名要害に詩り義滿公へ敵せん有樣此度の討手は家門の臣耶黨も尽くなし　大「づれ〳〵の

鬱胸を晴さばやと舞樂の次第　赤「當國天王寺の荒陵には淺間左衛門照行　義「まつた住吉にも富士右門知之　赤「誠の音律感に絶へたり　義「酒宴の催し勞を晴らせよ　赤「役義の者共

両人「太義〳〵　義「コハ有難くも御意よ叶ひ祖父たる淺間照影より今に傳はる舞樂の古實斯くの如き目出度折りにも召に應ずる先父の滿足身の大慶　右「冥加に餘る只今のお詞某迚も正平年中祖父にて候富士右京之進知之より有知に傳はりしが不慮の義に付さよひ居たり然るに義滿公富士山御遊覽の時に至つて以前に歸る身の面目足利家の御厚恩廣大無量と恐入り奉り升てムり升　義「何右門殿斯る席にて申すは異なものなれど我先祖は樂人の筋殊に御邊は太鼓の家と日頃の廣言樂の道に尋くともやゝもすれば蜂の如く逆人起る此時節期に望んでは樂人たりとも戰場にて鉾も交へんも斗り難し其折柄にて老より若きが勢ひ勝るが理の當然　義「こりや先生の御意の如く右門殿は年久しく駿河にあつての御浪人　泉「漁師でもなく鋤鍬仕事　式「武の道の心掛けは　三人「何とし て〳〵　義「各々ろりや何事でムる右門殿も某も樂道に給はる御扶持ありやわながち武藝は入らざる業富士殿の思召し扣へられい　赤「イヤ照行侯唐土陣中に舞樂を奏するもの例し多し就中漢楚鴻門の會は項伯莊劔を舞して壽きなす項伯莊と楚王の臣なれども忠義の爲にハ伶倫の業を辞せず何れ祿を食む者ハ誰も斯くこそあるべけれ今音律の家に生れ武藝を内に暗んず者淺間照行汝より外にあるまじ

但し富士よも覺へあるや聞かまほし　右「神樂に劔を用ゆるは惡鬼を拂ふ謂れなり本朝の武藝といふは弓馬劔術槍棒柔水練の七種其外極意の妙劔十字手裏劔等も法あるべく弓は六藝の一つよして百千の敵を防ぐべし爰を以て武士を弓取りと号けたり匹夫の勇は勝に誇り變に應せず機よ臨まず兵法は形を則とし心を師とす既に形は心より成るものなれば一心定る其時は金石の敵を碎くに何か恐れん劔術手練　赤「ヤア　右「トサア申も匹夫のおこがましく伶人たりとも事に望まば又御用に立べき事なきにしも非ずとサア憚り乍ら存じ升る　義「何樣建武の乱には山門の清衆戰ふて貞寂を潔よくする然るに淺間照行が莫太なる我慢の空言ハ、、、、　義「名玉磨かされば瓦同然武術煆練せば貴人の宴會其術を顯はし見やれ　右「我々は樂器の役義劔術立合ひ御所望にもあるまじされど辞すれば臆そる理り併し世話に申生兵法道なき業に大疵なし其身を果すも又うつけの第一　義「うつけとは誰が事入らざる舌の根動さば御前とて用捨はないぞ　右「そりやこそや用捨に預らずともさして恐るゝに足らざる義是非とも高劣糺す心か　義「おんでもない事　右「何を小癪な　赤「両人扣へ○富士が詞もゆかしければ淺間が怒りも一理あり酒宴の興に義弘殿二人の試合見物に及ばうではムるまいか　義「由なき論とは存ずれども時の一興　赤「両人立合へ　右「御諚ならばいなみ難し　義「望む所の高劣ためし　右「取敢ず立合ひ　両人「仕るでムらう　右「併し木刀竹刀の用意もなく　赤「何

サ〳〵互ひに白刃を以て　義「夫は餘り短慮の仕業殊には神前生血の穢れハテ何をがなヲヽ夫よ槍の穂を扳取り蛭まきの上へ布を以て鞠の如く括り用ひなば即ち時の長柄用意致せ　右「ハッ御諚を返すに似たれども年頃手馴し此撥の業くれも時の興　義「面白い何れとも心に任せよ　赤「ソレ玄蕃急ぎ手鎗とりしつらへ　平「イヤ室積平馬委細承り升てムり升る　赤「然らば用意　平「ハア、　赤「双方仕度　両人「畏つてムり升る〔ト両人身拵へに掛る鎗の穂ぬかずに卷たるを平馬持出て淺間が前へ直し　平「申さば両人嚊れの試合〳〵と合点か　淺「淺間が覺への手練の早業受けてお見やれ　右「受けるは老が握りし撥去らば勝負の決して〳〵れう　両人「サア〳〵〳〵〔ト面白き立廻りあつてト〻左衛門の鎗を右門叩き落し撥にて打つ」　平「一寸加勢に〔ト刀を抜き切て掛る刀を右門取りむね打にする門弟三人寄らうとする右門急度見得」　右「身動きなさば命がないぞ　義「逃れ手練　右「ハッ　義「ヤヽ出來た〳〵○義則公。にも御加勢かな　赤「何彼しきに○免しもなきに臣たる平馬未熟の武藝主家の恥辱イデ手打に　義「イヤ平馬が加勢は一家の照行おくれし意恨を救はんと俱に打るゝ白刃の胸打是らも以後のよき見せしめ　赤「とはいへ憎き　義「サア生は得難く捨るは易し義則公マヽ御宥免　赤「ハテ冥加なうづむしめ　義「當座の褒美ソレ隼人劔殿に掛し鎗持參せよ　平「ハッ〔ト奥へ這入る」　赤「右門其方家に傳はる秘書は如何なせしぞ　右「富士家に傳はる舊記樂譜笛を知らせし秘書義滿公へ上覽の後他出致せバ肌身放はず斯の通り〔ト隼人鎗を持ち出る」　義「身命を擲つて我々を慰さめし恩賞遣はすハ淺間照行鎗の銘は筑紫信國永く家に傳へよ〔ト藤馬受取り淺間に見せる置けと仕形する」　赤「同じ興を催せし富士への褒美と此太刀一振作は長船銘は備前光忠〔ト玄蕃取つて右門に渡す」　右「冥加に餘るお賜物有難く頂戴仕つてムり升る〔ト時鐘鳴る」　義「酒宴の興も早是迄　赤「方々退出　右「御両所にハ先づ　皆々「入らせられ升せう〔ト赤松大内家來這入る」　右「何卯平江守左膳よは大切なる高峯の太皷頂戴の劔諸共我宅へ持參なし頓て歸ると告て置きやれ　三人「畏つてムり升る〔ト二重の太皷を手舁にして左膳ハ太刀を持て下座へ這入る」　右「上みを欺きし長柄其甲斐もなく不覺のあり樣哀れ眞劔鋭き穂先も誠の手者に向ふてハ行かぬぞよ以來業を慎しみおらう〔ト平馬門弟三人柄に手を掛る」　右「何じや〳〵両刀にて知行を取れば富士に打たれ嘸お腰が痛み申さん師たる淺間は恥つらかゝされ我達も無念に思ふかゝヽ助け置ば仇なれども一家の好身心魂にこたへたであらう　四人「ム、　右「不便なやつの〔ト向ふへ這入る平馬淺間の傍へ行き」　平「無念な口惜い〳〵わいお身は何ともないかイヤサ右門が恐ろしいかエヽ何れも來やれ〔ト平馬三人行うとする」　淺「待た何れへムる　平「ハテ知れた事右門めに　三人「追つ附て　淺「イヤ行ぬ一應にては中々及ばぬ　四人「ム、　淺「ハテ討取る工夫は身共に　四人「すりや先生

も　淺「樂譜の秘書高峯の太皷諸共に　平「ナヽサ手序に戀の意趣富士太郎も打放し櫻子を奪ひ取り日頃の本望　淺「富士が歸りは合邦が辻有無をいはせずたんだ一討　平「夜陰の勝負は長柄が屈竟　淺「此儘行かば悟るは必定　平「二手に別れて　淺「ぬかるな　四人「合点じや　淺「行け　四人「ハッ〔ト四人向ふへ走り這入る」　淺「頃はたろがれ雨夜も佶强ソレ〔ト鎗をひつしごき急度見得にて返し

造物平舞臺眞中に閻魔堂東西鼓原後ろ黑幕都て合邦が辻閻魔堂の体本鈞鐘雨車にて道具納る〔ト蛙の聲虫笛の合方右門跡より國平松明の消へしを持出る」　右「思ひ掛なき雷の有樣因つた天氣ではないか　國「左樣でムり升只今の降り出しに松明をしめらし暗くて旦那のお足元が　右「大事ない〳〵只心せきは明日の祝言　右「サァお越しあられ升せう〔ト本舞臺へ來る雨車に成る」　右「又降り出したナヽ幸ひの此辻堂雨舍り致さう　國「暫く爰にお待被下雨具を調のへ參り升でムり升せう　右「太義乍らさうしてくりやれ　國「ドリャ往て參り升せう〔ト引返し這入る」　右「心はせけゞ時雨の妨げ莫をくゆらせ虫の音でも聞くが一興○香爐に線香の類ひはなきや○ない筈〳〵此所は昔し聖德太子守屋を討て天王寺を建立し石を以て佛像の數六万体を作り給ふ此閻魔王も其一ッ古へ此邊りに覺授院ある故是を以て覺授が辻を諸人あへて合邦が辻と唱ふるもひがこと然るに數度兵火に此堂に限り遁れて百年を經ると聞く地氣濕して寒せき自ら焔硝を生じ火若し其地に落る時は忽ち燃へ移る事を恐るゝを以て閻魔堂とも線香堂とも是を唱ふる爰に宿るも他生の緣ハテ樣々の次第じやなア〔ト此内東西より淺間平馬三人鼓原へ忍ぶ」　右「今迄鳴つる虫蛙殺伐の音聞ゆるは〔ト淺間窺ひ寄る虫の音止む」　右「扨こそ物音　淺「覺悟〔ト鎗にて突て掛る平馬諸士三人探り〳〵切結ぶ作内火繩振廻し下へ落すと仕掛にて線香臺燃へる淺間上手の松へ登り上より鎗を突出す煙りに咽びて右門よろめく所滅多切に四人切り左衞門飛びおり止めを刺し」　淺「まんまと止め三人「遁れ　淺「太義〳〵　平「シテ此上は　淺「コレ〔ト平馬に呼く平馬より段々に呼き」　平三人「然らば　淺「ムれ〔ト平馬三人下手へ這入る淺間右門の一卷を取る人音する故後ろへ隱れる太郎走り出て死骸に躓き悔りして香爐臺の燃さしを取る焔硝燃へ上る此明りにて死骸を見て」　太郎「ヤァ親人か〔ト呼び返し懷中へ手を入れ」　太「ヤヽコリャ樂譜の秘書も〔ト後ろより平馬切て掛る立廻りあつて」　太「コレこそ必定敵の手掛り〔ト平馬を見事に投げ鎗を見て急度見得返し

造物二重見附張ぼせの襖上手中二階下手忍び返し附の塀二階を見せ例の所に門口上手二階に三雲樂太皷の前に太刀を抜き見て居る二重の上に金綱の川鹿詩書の臺に載せあるを櫻子見て居る二重の下に兵助若黨の拵らへ刀を杖につき腰の痛ひこなしにて見て居る上手の二

階は燭臺二重は雪洞櫻子兵助は手燭を持て居る少し小凄き雲氣樣の合方にて道具納る　三人「ハテいぶかしい　三「心よからぬ義則公より夫トに賜はりし此太刀　櫻「父上常々御秘藏の川鹿常に見馴れぬ色替り悶へ苦しむ其有樣　兵「夜陰に音を發する不思議　三「產は長船鑢の相違　櫻「都て其主の凶實知らすが川鹿の德　兵「何にもせよ　三「心ならざる　三人「有樣じやなア〔ト鉢の中の川鹿の死骸より煙硝立つ〕　櫻「そんなら川鹿は　兩人「ム、〔ト國平向ふより走り出て　國「若旦那御加勢〳〵　櫻「嗔樣〳〵　三「加勢とは何事じやぞ　國「ハッ只今御前より歸り道合邦が辻にて俄の時雨下郎が傘を求めに參りし跡何者か多勢の刃音親旦那に限り幾十人集りたれば迚事とも仕給ふ御氣性にはあらね共夜蔭の働き萬が一と危急を見捨御注進下郎は是より引返さん急いで御加勢〳〵〔ト逸散に向ふへ這入る〕　三「最前門弟江守左勝の兩人舞樂終つて太鼓持參の折柄我夫頓がて歸宅と聞しよ　櫻「大方富士太郎樣も御加勢被成てムらうが　三「若しや道抔違ひはせぬか○ア、早う安否が　二人「聞たい事じやなア　兵「かて〻加へて此病癩主人の御用に遇る〻不忠ヱ、不甲斐ない　櫻「ヲ、そなたの氣質でいさう思やるも道理〳〵　三「イヤ氣遣ひしやんな我夫に限つて僅か知れた無法者又悴や國平も大方加勢しやるであらう程にヤア氣を靜めて居や〔ト下手の見越しの松より淺間頬冠りして登り障子を明けて下へおり上手の二階へ上り太鼓のあるを見てうなづき障子をさす〕櫻「あの人影は　兵「うぬ盜賊〔ト淺間二階の火を消そ兵助上らうとする淺間一かせ切る櫻子淺間の足を抱きおろす三雲手早く太鼓を打つ戸屋の内にて大勢人音する淺間三雲を當て奥へ忍ぶ太郎鎗の穂先を持ち走り出て」　太郎「母人何れにムる　櫻「富士太郎樣か　兵「若旦那親旦那は如何でムり升る　太郎「ヤア兵助は　櫻「ヤア嗔樣が　太郎「何母人が○水々　櫻「アイ〳〵〔ト水を三雲に呑ませし」　太郎「母人〳〵　櫻「嗔さんいのう〳〵　○「ヲ、富士太郎か○我夫の安否はどうじや　兩人「どうでムり升　太郎「ヲヱ、　三「ヱ、何事じや心元ない　兵「申若旦那委しい仔細　櫻「いふて聞かして　兩人「下さり升せ　太郎「某し親人の御歸宅例の如くお迎ひ申さんと歩びに隨ひ胸騒き合点行かず程なく天王寺仮家へ走せ附け勤番の諸士に問へば早歸宅と承り扨は道ころ違ひぬれと清水坂を西へ下り合邦が辻へと來掛りし所何國となく烟硝の香ひよく〳〵見れば火氣よ倒れる閻魔堂てなたに人影餘火に移して篤くと見れば紛ふ方なき親人おいたはしや止めを刺し兼て御所持の卷物もなく然るに思はず拾ひ取たる此穂先無念乍らも其塲を見捨飛んで歸る折柄遠音に響く早太鼓心も空に我家の門前百姓迄重り乱入せんとひしめく所へ某が駈付け皆々止め駈入れば此体だら〻家内の騒ぎは兎も角も只殘念なは親人樣無念乍ら立歸つた富士太郎が胸中御推量被成て下さり升せ　櫻、兵「ハア、三「筑紫信國所持の銘は大内義弘　太郎「信義五常の義弘樣に限り餘もや左樣の　三「悴悦びや

敵は知れたわいの　太郎「何敵が　三人「知れ升たとは　三「サア最前門弟中の咄しを聞ば兵法立會の御褒美として夫トへは赤松殿より此太刀まつた義弘公より鎗一筋淺間照行へ下し給ふと聞く　太郎「ムヽスリヤ打負たるを意恨に思ひ　櫻「父上を害せしは　三「疑念に及ばぬ三人「淺間照行「ト下手より長太文治出て」長文「櫻子うせう「ト掛るを富士太郎立廻つて投る兵助もよろぼひ乍ら文治を投る此立廻りの間に淺間奥より出て差足よて門口へ出る櫻子手燭を差出す」皆々「偖に淺間　淺「エヽ「ト手燭を手裏劍にて叩き落し走り這入る」　皆々「ムヽ「ト皆々向ふを見込む此とたん宜敷拍子幕

四幕目　〔遠里小野松原の場〕〔岸野隠家太郎出立の場〕

役名

一奴　國平
一同　岩平
一人買　五四郎
一娘　八重梅
一媒　照葉
一馬頭　六
一娘　櫻子
一富士太郎
一老婆　卯原
一靈龜の精

一坊主　雲床
一媒　呉服
一同　赤葉
一同　諸葉
一右門妻　三雲
一牛頭　八
一仕出し　大勢
一屋元　大勢
一悪者　一人
一家來　一人
一犬　一疋

遠物見附黒幕板松同じく釣枝都て遠里小野松原の体葬禮の模様影燈籠持一人白張提灯持二人天蓋持一人伴僧一人乗物其外色々仕出し居る鳴物にて幕開く　仕出し○「イヤ申雲床様お前の馴染の葛川ども吉生れ年は五十三歳惜しい事致し升た　雲床「さればいのう此住吉の遠里小野に芝居が出來ればいつでも急度した立女形であつたが　口「今は冥途の旅芝居へ初下り雲床様はお力落し　雲「イヤモウ推量して下んせヤア何れも太義ながら　皆々「サア參り升せう　五四郎「待て　雲「ヤア誰やらん呼んだぞよ爰は名に負ふ狐原葬禮をちやつとやらしやれ　皆々「心得升た　五「待て　雲「ヤアお前は閻魔様じやムり升せぬか　五「ナヽ閻魔とも〳〵其ども吉が近付のゑんまやの平十郎じやわい　雲「其ゑんまや平十郎様がなんで爰へはお出被成れた　五「ヤア○ナヽ今爰へ顯はれたはアヽいかふ地獄も衰微じや　雲「左様でムり升せう　五「

所で田舎の振附葛川ども吉近付の顔を幸いどうぞ地獄へ來て三十日斗りすけて貰ふと思ふて來た幸ひ死骸を連れて行たい　雪「是迄娑婆で悪い事した事もないども吉を地獄へ落すとは御無体でムり升　五「地獄の飢饉にや替られぬッン牛頭馬頭の鬼ども　アノ死骸を請取り無間地獄へ連れて行け　牛頭、馬頭「ハア、　雪「マア〳〵待て被下升せけふの佛を地獄へ落して　は送つて來たこちらが迷惑殊に駙染のども吉どうぞ御了簡は被下升せぬか　馬「イヤ閻魔様が了簡せいといはしやれても　牛「鬼仲間が了簡せぬのじや　雪「是は又情ない〇どうぞ私等を裸にして亡者はお赦し被下升せ　皆々「ハイ〳〵私等も脱ぎ升どうぞ御了簡を頼み升　五「其方達が殘らず脱いでも一人前三百か五百の質種なれども志しがやさしい其着物で亡者は赦して遣はさう　雪「エ、忝うムり升なまいだんぶ　皆々「おまいだんぶ〔ト皆々裸に成り迯り逃入る」　五「ハ、、、牛頭八馬頭六皆〳〵も太義じや　馬「お頭らが閻魔の思ひ付きに乗禮を以て來たとい　両人「氣の利いた今の奴等　五「閻魔でおゞして追剝とは何と趣向が新らしからう〇アレ〳〵向ふへ人が來る様子皆々ぬかるな　皆々「合点じや〔ト小隱れする向ふ　お富士太郎涙人の拵らへ樹の枝に火縄を〳〵りつけ出て」　太郎「モウ日が暮れた火縄があれば道も急がぬ綾る〳〵歸らう〔ト本舞臺へ來て」　太「よい所に腰掛石暫時お慈悲に預り升せう誠に木石とはいへ諸人の足を助けるはやつぱり有情人間に産れ父たる人に孝道を積まずば木竹に劣りし非情の此身親人お赦るされて被下れ升せ〔ト額掛りより八重樫足の痛むてなしにて出て」　八重樫「あの子のいふ通り提灯を持つて參じたら物に躓きはせまいに〇申ろこにお出被成れ升はどなたでムり升へ　太郎「是は女中名を尋ねて何にさつしやる　八重「ちと尋る人と申升は夫々道連此あたりで見失ふた故若しやと尋升てお辭を聞てお嬉しう存じ升　太郎「ハ、、、イヤ女中何をいはしやるやら〇ドリヤ歸宅致さう　八重「アヽ申私しやあなたに御無心がムり升て有様はどうからお歸りを　太郎「待て居やしやつたの　八重「アイ　太郎「そりやどういふ譯で　八重「ハイつゝともう惚れ升た　太郎「是は如何な事然し少し此身に望みもあれば　八重「聞かれ升せぬかへ〇さうじや〔ト自害せうとする　太郎「アヽコレ待つしやれ　八重「イヱ〳〵姫ごせのあられもない事いひ出し叶はぬ時には豫ての覺悟　太郎「ハテ扨短氣千万如何よも承知致した　八重「エヽそんなら御得心で　太郎「サア〳〵能くムる〔ト懐劔を納めさす」　八重「エヽ嬉しうムり升〔ト五四郎皆々出て」　五四郎「ろりや　牛馬「動きあがるな　太郎「ろち達は　五「ヤイ〳〵太い奴じや覬念ひろげ〔ト刀を抜き見せると太郎倒れる」　五「何じや脆い奴刃物を見せたら倒れおつたとんとこいつは只取りじや　八重「アヽコレ〳〵目を廻はしてじや何とせうぞいのう　五「めろ〳〵はゑてもモウ叶はぬ引剝で仕舞へ　両人「ヲヽ合点じや〔ト太郎が着物を剝うとする奴國平旅の拵へにて出て皆々取つて投げ」

國平「ヤア旦那樣でムり升せぬか旦那樣〳〵　太郎「國平かよい處へ來て呉れたなア　國「私が參り升たからはお氣遣ひはムり升せぬ　兩人「奴め覺悟〔ト打掛る立廻つて見事に投げ」　國「コリヤうぬら何とする　牛頭「イヤなんともせぬ閻魔の堂の建立其着物　馬頭「殘らず脱いで置て行け　國「ハヽヽおらを誰だと思ふ富士右門か家來津守國平うぬらが手にあふ者じや ない道おつ開いて早くなくなれ　五「疊で仕舞へ　皆々「合点じや〔ト皆々かゝる八重梅太郎逃げて這入る國平立廻りあつて皆々を追散らし　國「旦那樣どつちへお出被成れたエヽ心掛りな〔ト橋掛りより太郎走り出て」　太郎「アヽ救るせ〳〵　國「旦那樣か　太郎「國平か　國「早速ながら彼手がゝりなりとも求めんと都は元より近國を馳せ廻はり升た所彼が門弟にでつくはし餘所に紛らし承はれば西國に由緣のあつて則書面と出せし故まんまと奪取り虚實の程は御賢慮に預らんと立歸り升てムり升〔ト書面を渡す」　太郎「ムヽ西國とばかりで住所知れず　國「然らば拙者は西國へ　太郎「直樣參り事の實否は　國「書面を以てお知らせ申さん　太郎「出かした行きやれ　國「してこいな〔ト向ふへ這入る」　太郎「ハテ勇ましい〔ト思ひ入ある。橋掛りお八重梅走り出て行當り兩人透し見るこなしよろし〳〵返し

遺物見附赤壁納戸口上手障子家体反古張下手一つ龕などありいつもの所に門口借錢乞立掛り三雲櫻子挨拶して居る在郷唄にて道具留る　皆々「聞かんぞ〳〵　勘兵衛「コレ三雲殿味噌屋勘兵衛を覺へて居やるか此鬼味噌を泣味噌でよはらしなせ住吉を夜拔した掛けた錢は三貫三百三十三文サア今よこせ〳〵　作兵衛「此酒屋作兵衛も五貫六百七十八文　八「此古手屋は六貫九文けふは居催促　長兵衛「米屋の長兵衛も八貫七百今受取らう　三「御尤でムり升夜拔けしたのではムり升せぬ右門殿が死なれ打續いて兵助が最期で嫁が身持も物入續き　長「コレ〳〵お袋其因果咄し聞には來ぬぞや　皆々「マア子息殿に逢ひ升せうかい　櫻「こちの人も一心寺へ參られ升て　皆々「留守なら戻らるゝ迄居催促じや　櫻「さうなさつて被下り升て　長「いやなら借金拂らやるか皆々「どうじやぞいのう〔ト此内卯原食籠を服紗に包み出て」　卯原「ソレ拂ひの金〔ト金二兩はりだす」　皆々「是は　卯「金さへ拂らや言分ハムんすまい　三「イエ申此金をお前に拂らはしては　卯「ハテ時の用には鼻とやら私が悪うは致し升せぬ　長「私等がかけ四人〳〵て十二貫餘り　勘「そこへ二兩貫ひ升ると少しつりがさんじ升れど　作「遲なり升たかはりに私共が貫ひ升　勘「ヤレ〳〵來世の金が蘇へつた　皆々「ハイお有難う存じ升〔ト皆々橋掛りへ這入る」　櫻「本にマア只今のお世話お嬉しう存じ升　卯「何の〳〵淺間ハ一家の親みありしを遠つ親の確執より互に呉越の形りと成りしが右門殿の御立身餘所事とは思はず悦びしを悴左衛門是を嫉み高峯の太皷を意趣にして討て立退〳〵義理知ず嫌此身をも憎しと思し召れう三雲殿　三「何のいなア悪人の親なりとて必ず悪人で有らう筈もなし其

氣兼はムんせん　卯「三雲殿命長きは　三「耻多しとて　卯「よういふた事でムんすなア　櫻「只今のお志しは夫ト富士太郎歸り次第急度お手渡し申升せう　卯「アノ何のいなせめては悴が罪滅ぼしさうして翌は七七日の忌日此おはぎい婆々が手すさい御佛へ供へて被下升せ（ト服紗取ると餅一つころげ出る」　卯「是は〳〵麁相な事然し土によごれた此餅は佛にい上げられぬ幸い道に寢て居る犬（ト ほをりやる犬來て喰ふ」　卯「アレ見なされ嬉しがつて尾を振るはホ、、　三「數々のお志し佛にも悅ばせ太郎にも喰はし升せう　卯「夫は忝うムんす私はモウ歸り升せう　三「そんなら歸らしやんすか　卯「嫁御御袋樣に氣を付て下さんせ　兩人「ようムんしたへ（ト卯原向ふへ這入る」　三「人の心は上はべに知れぬ者でないかいのう　櫻「左樣でムり升る敵淺間に引替へてお袋樣の御深切父上には非道な事被成れぬお產付き善を積めば福ひおりの本文も偽りでムり升かいな　三「さう思やるも尤併し悅びあれば悲しみある浮世の習ひ○娘　櫻「母樣　兩人「おじきなき世の成行じやなア　浮「瑞璃「されば浮世の舍り定めぬ行脚の僧何國をさして行ぞともたどりて爰へ岸野なる人家を目當に立休らひ　鰕「龍の僧「今唱ふる鐘は淺澤の寺にも住ます里だにも國々所々を巡ゞる身の一所不住の沙門とはハテ面白の境界じやなア　浮「心に何かうなづきて軒のとばそに鉦打鳴らせば　三「表に聞ゆる鉦の音ソレ報謝入れてたも　櫻「ハイ　浮「ハイと娘がかい立て僅に入れる一錢も是ぞ千金後の爲指出す顏を打詠め　鰕「若きに似合はぬ志し厚〳〵回向の致し申さん　櫻「夫は忝うムり升　鰕「其志しにあまへての御無心今宵一宿のさせては被下まいか　櫻「夫はお易い事なれど　鰕「獨り旅い御法度かな　三「イヤ隨分苦るしかるまじ殊には御僧幸ひ今宵は佛の爲め夜すがら御回向頼みたしサ、是へ〳〵　鰕「然らば敕さつしやれ　浮「こなたも幸ひ笠を脫ぎ草鞋とく〳〵上り口追出家の氣散じは世を捨て人の所行なり折から歸る富士太郎一心寺の戻り足心息せき門の口　太郎「母人只今歸り升した　三「ナ、太郎歸つたか　櫻「こちの人待兼たわいなア　太郎「申母人あの坊樣は　三「御宿の無心とお出被成れたを幸ひお止め申て今宵の追善　太郎「夫はよいお思召でムり升　櫻「あなたにお咄し申さうと存じ升たは卯原樣が見へ升て　太郎「卯原樣とは　三「仇たる淺間が實母卯原殿思ひ處ない處へ來合はせ掛乞衆の金取換へ夫は〳〵深切な　太郎「ハテなア○眼前敵の淺間が親假令一家の端たりとも今の親み其意を得ず　鰕「何老母夫にムるは御子息じやの　三「ハイ左樣でムり升る　鰕「お咄しの卯原とやらは愚僧是へ參る時分に歸へられた老母かの　三「ハイ　上「其老母なら極めて惡人隨分俱にぬからぬが專一でムるぞや　太郎「私も左樣に存じ升　三「夫でも差當つた難義を救ひ連合の忌日も知り佛前へお供へとてコレ此樣おおはぎまでを　太郎「イヤ渴しても盜泉の水を飲ます是を父に供へん事心にあたひ升せぬ　鰕「此供物彼老母が持參とな　櫻「ハイ持つて見へた其時

に思はず一つ落し庭の犬が尾を振り升て　軍「其餅を喰ひ升たか　太郎「シテ其犬は　三「何氣なう其儘に　太郎「行升たか　三「チイのう　太郎「ム、　軍「こりや其儘に行さうなものじや「ト初夜の鐘鳴る　櫻「アリヤモウ五ツ　太郎「御僧樣には御勞苦ながら　軍「佛間へ參つて御回向致升せう　三「サア斯う御出被成升せ　淨「もてなし伴ふ一間の障子明けて佛間へ行く折しも息せきと走り來て富士の家居に會釋なく門の戸叩けば　八重梅「ちと御頼申升せう惡者に出合ひ難義致し升ぞうぞお助け被成て被下升せ　櫻「夫と御難義でムり升せうマアお這入り被成升せ「ト内へ這入り富士太郎を見て」八重「ヤアあなたは「ト太郎惚りして氣を換へ」太郎「惡い〳〵○サア惡者に出會ふたとはきつい難義でムり升せう諸事は　淨「と仕方を呑込ひ娘八重梅「アイ○イヽエアノ私は○道通りの者で大勢の惡者手込めにせうとするをだまし漸う其場を拔け思はず爰へ參と升たのでムんすぞうぞ暫らく何所へなりとかくまふて下さんせ三「見れば若い女中樣夫ぢ〳〵　御難義被成升たなア　ひよつと又惡者が跡追ふて來まいものでもない櫻子此お方を暫し奥へ連升たがよい　櫻「アイ○女中さんサアムんせ　八重「エヽ嬉しうムんそわいなア　淨「娘は喜び限りなく勝手へころは入りにけり折しも表に人の音の奴仕立の一本ざし一飾ある骨柄何れの家來か門口にずつと入り　軍平「頼まうぞ〳〵　太郎「何の御用でムり升　軍「只今是へ十七八の女子が參つた筈出しておくりやれ　三「左樣な女中はこなたへは參り升せぬ門違でムり升せう　軍「だまらう門違ひか門違ひでないか家搜しせん　淨「と欠込む向ふへすつ〳〵と太郎　太郎「何の偽り申升せうかくまふた覺へはムり升せぬ　軍「アノ是でもないか　淨「引拔く白刃に震ふ太郎前後正躰倒れる有樣ハヽヽ大笑　軍「コリヤ恐ろしいか其性根では敵を討ちに出ぬも尤ハテ難症もあれはあるものじやなア　淨「刀を鞘に納むれば嬉しく出る娘櫻子太郎が傍へ走り寄り　櫻「申太郎樣〳〵イのう　太郎「面目次第もムり升せぬ　淨「何氣なき体母と不審に詞を潜め　三「敵討をお存じ被成しお前樣は　軍「大内權太夫義弘が草履摑みの軍平と云ふ者　三「アノあなたが　軍「富士涙間近しい一家でありながら遺恨を挾む淺間左衛門富士右門を討て樂譜の一卷奪ひ取り其場を立退き行方知れず此事上へ聞へなば家の瑕瑾親を討たれ寶を奪はれがなら仇を酬はん所存もなく樂譜の一卷詮議もせず此所に引籠り月日を送るは合点が行ずと主人の疑ひ其方參り見屆け來よとお指圖受けし奴が役目出立の延引は道理ころ主人の館へ同道して立歸る直々言譯致されよ　三「コレ〳〵富士太郎卑怯の病を立直し家を立るが誠の孝行　櫻「イエ〳〵母樣太郎樣が他國へお出被成てはあなたのお力もムり升まいぞうぞお延し被下升せ　軍「無益の論議サア富士太郎立ちやれ　太郎「左樣なれば御前迄　三「妾も附て行たけれど代りは嫁の櫻子　太郎「イヤ夫には　三「ハテ義弘公を重んじて母が名代ッレ袴も着けて　太郎「左樣ならば兎も角も櫻子

支度しや　櫻「アイ〳〵○是も父御の御筐なれば　三「大事に思ふて着けて行きや　太郎「有難う厶り升　軍「サア夜が更る早く〳〵　櫻「母様つい往て參じ升　太郎「サア御家來様　三「よう御出被成升た　猪「挨拶しか〳〵せき立て太郎夫婦を伴ふ奴　軍「サア行きやれ　猪「大内か館へ出て行影見ゆる迄見送り〳〵　三「右門殿が死なしやつてから思ひも寄らぬあの臆病櫻子獨りが心遣ひ夫に附けても思ひ出すは妹の小雪何所にどうして暮すやら爺御の最期も知りやるまいア、憂世でいあるわいなア　猪「又さめ〳〵と袖の海乾く間もなき風情なり　三「ナ、我ながら未練な歎きドレ寐て二人の歸りを待うか　猪「涙を留て奥の一間へ入月の鐘ゥ〳〵と鳴渡り既よ其夜も更渡り水も子の刻過る頃牛より黑き大男閻魔の形りを其儘に吠附く犬を追ひまくり門の戸こぢて内に入り老母が襟髪引掴み刀拔持ち釣鐘解　五四郎「ヤア婆々金があるなら早く出せ序に飯も食ひ度い　両人「何ぞ味い菜はないか　猪「睨らみ付けたる此世の地獄三雲は踊る胸撫おろし　三「見れば皆冥途のお方々金を取て何に被成る〳〵今年は貯へは厶り升せぬ　五「イヤ地獄も今年は旱魃此閻魔も喰ふや喰はず　牛「今では餓鬼にも負けにやならぬ　馬「鬼に金棒も力がおくて弱り山伏し　五「サアちやつきりちやつと有る所をぬかせ但しどう腹に風穴明けうか　三「サア　四人「サア〳〵〳〵　猪「どうじや〳〵と責せつしやう若しもの事のあるときは伴太郎が歎きをば思ふは老の一思案　三「成程斯〳〵成果し家なれど本の家内が着るきろげ夫なと集めていんで被下升せ　五「エ、しぶとい女郎ソレ牛頭馬頭　両人「合点じや　猪「心得二人が腰の細引取出しがんじがらみに縛り上げ　五「サア是でもぬかさぬか　三「どのやうに縛つてもないが定おり去らぬわいのう　五「二人とも有丈さら へ　両人「ナ、合点じや　猪「三雲を踏飛し二人納戸へ駈り入る五四郎はあたりを見廻し有合ふ葛籠半櫃を取出す隙に牛頭馬頭がひつさらへて持て出る器物着類諸道具を手ぐりに五四郎人物へ取り納める後ろの方以前の行脚今からひよりこなたへ取るも白涙の慾には見得ぬ空眼したり顔にわつくせき草臥ッと一息つぎ　両人「何と頭ようごんすか　五「ナ、よい〳〵然しようないは腹盛梅わいらはどうじや　馬「イヤモ跡へ寄つて居る　牛「爰に櫃がある「ト此内旅僧以前の重箱をそつと出す」　五「そりや明きがらじや　馬「此重箱は慥かに牡丹餅　牛「てりやまぶじや　五「是もふてうは三ッ割じや　猪「銘々かつ〳〵掴み喰ひ咽を通ればコハ不思議や一人がもがけば三人とも手足を縮めて四苦八苦　五「ア、ヲ訝しや今此牡丹餅咽を過ぐるといなや俄に腹が剛張るは　両人「サア苦しい○こりやたまらぬ　猪「のたうち廻つて三人が血嘔吐にまみれて死したるは心地よかりし有様なり太郎櫻子は途中より胸騒ぎして歸り來る門の戸明けて不審顔又も驚く家内の様子　太郎「こりや何じやのりまぶれ○ヤア母人を何故に　猪「滅相なと欠寄り母が縄目解くも遲しと取縋り　三「ナ、二人の者か　太郎「何

故でムり升る　三「さいのう盗賊が三人忍び入り　櫻「エヽ、　太郎「其盗賊の此有樣は　三「ナヽ、不思議おは卯原殿の送られし萩の餅を取出し喰ふと其儘血を吐たヽ　櫻「偖に毒藥　太郎「扨ころ心善からぬ淺間が母我々親子を計らんと思ひの外に盗人めが代りに喰らい相果しか　三「夫に犬に與へし餅は　太郎「油斷させん其爲に一の餅には仔細なく殘りに仕込みし此鴆毒　三「あぶない事で　三人「あつたよな」ト三雲五四郎が顔見て」　三「此者は娘小雪をかどとかしたる偖に五四郎　太郎「エヽ、事されたれど妹が詮議もならずエヽ殘り多い　三「シテそなたをお召しヽ　櫻「サア其事は　太郎「サアおれが咄すだまつて居ようぞ　三「シテ其樣子は　太郎「敵の樣子有所でも求めたかとお尋ね被成た迄の事　櫻「イヽエ翌直に出立を　太郎「ハテ入らざる差出扣へて居よ　三「アイタヽヽ此中からの癪氣の痛み今のどさくさで　櫻「お痛みはお道理樣　太郎「御介抱して直ぐにお寐間へ　三「アイヤつい直らう是から夜と共に父御の回向し升わいのう　二人「ろんなら母樣　三「二人は休みや　淨「互に明けぬ夜の暗らさ心殘して母親は奥の一間へ入る跡に櫻子は夫トの傍不思議の思ひ晴れぬ胸　櫻「太郎樣現在お上みのお赦し受け敵討の出立母樣にもお聞し申俱に悦ふと思ふに引換へ今のお詞　太郎「サア夫には深い仔細あつて　櫻「イヽエ仔細であるまいお前の臆病　太郎「何と　櫻「とヽ樣の御最期の後お氣絶倒してお前の御卑怯　太郎「ヤア　櫻「刃を見れば五體をすくめ正氣を失ひ本に思へば不甲斐ない何として其樣な心に成つて下さんしたぞいなア　淨「取付き歎く不便さよ今更何と富士太郎思はぬ　未練に成りしも　何の因果ぞと夫婦顔を見合してかこち歎くぞ道理なり　靈「父母に不孝の富士太郎生て甲斐なき娑婆塞げ　太郎「何と　靈「役に立ずば討殺せと母御より愚僧へ頼み出家の身なれど道理に服し今手に掛ける覺悟せい　淨「既に討んと其有樣ノウ哀しやと取付く櫻子引退けスハと刀拔くハツト恐るヽ富士太郎猶も目先へ突付るヽ白刃に有らぬひつろぎ竹覺へず病氣に取乱し逃げる太郎が胸先へ差付襟際しつかと取り　靈「此竹光でも恐るヽか白刃に性根取乱さば眼中とても濕ひべき箬富士太郎ハテ心勞の致すよな　太郎「斯る化病も尊き御僧の御覽の上は御承知ある箬兎に角卑怯の淺間左衞門片時も早く本望遂し父への供養と思へども折しも一人の母が病苦まつた某が臆病も敵に油斷させんず爲一旦立たる淺間なれども當地に住居の實母有れば是に便りし來りもせん若しやと窺ふ此月日富士太郎が心の内御推量被下升せ　靈「斯る因緣聞得るも誠に他生に結ぶ緣其孝道の二つを立つる敵討眼前爰に有合ふ淺間　太郎「何淺間が　櫻「爰に　両人「有るとは　靈「其照行はコレ爰に」ト以前の太鼓を持出て」　靈「形は直ぐに立ながら表は矢張り丸からぬ内に色ぞる三巴は唐土のみけんとやく爰に表する三つの頭四方に火焔の勢鋭ぞく一旦の理非は立ど顧て亡ぶる天の誡め昔し右門が改易の折柄淺間の家に奪ひ取り照行永く持傳へし太鼓打て今の

恨みを晴らし父が今宵の佛事供養目前の孝な　浮「心得たること敵の詞　太郎「いふにや及ぶ古への晉豫讓　櫻「敵の衣を裂たる例し　霊「急がれ両人　両人「心得たり〳〵ト富士太皷謠の合方よ成る」　霊「兼てより斯くあるべきと思ひなは〳〵　太郎「望まれし故仇となり只恨めしきは太皷なり　櫻「左あれば親の敵ぞかし　霊「討てや両人イザ〳〵　監「討てや〳〵と責皷　太郎「父の敵　櫻「當の仇　霊「富士が恨みを晴らせば涙こそ上なかりけり○チヽ出來た〳〵　太郎「今宵の供養に當前の　櫻「父上の仇討たる嬉しさ　太郎「是も偏に御僧の恩　両人「エヽ忝ない　霊「悦びあれば悲しみもある習ひ此義も篤と心得て必ず其時定業と諦らむべし其期に至り二度の難生せん死すと思へば必ず死ん死せずと思ふて計られよ○コリヤ是敵淺間より母の卯原へ送りし書面　櫻「さうしてあなたの　霊「先刻來たる途中にて老母が落せし其密書は紛ふ方なき淺間が自筆　太郎「扨ころ淺間が通路の容子　霊「母を居所へ迎ひの一書奥にあり〳〵敵の有所　太郎「コリヤ是播州室積平馬が館に忍ぶとある文体　霊「早出立に及ぶべき時節も二日餘も過じ身を全うに本懐遂し　太郎「不思議の御縁に今宵の高恩　櫻「そりやあなたは　両人「何れの何人　霊「忘れても清見が關の淺間よりかすみて見へし三保の浦邊よ　両人「何と　霊「重ねて逢ひ升せう　浮「暇乞二人は禮の詞さへ只伏し拜むこなたも目禮返禮の靈龜の化身とは見へず形は失せにけり　太郎「心有りげな旅僧の　櫻「今の一首　浮「更に不思議も晴れやらぬ時にこなたの一間なる障子の内に聲あつて　八重梅「ヤア富士太郎上總之介安則對面せん　浮「對面せんと呼はつて障子をさつと押開き一間の内には以前の娘打て替はりし其粧ひ木綿布子に引換へて錦の直垂折烏帽子欣然と上座に掛りし其有樣奴も變じて其上下數多の腰元太郎見るより飛しさり　太郎「思掛なき御粧ひ如何に〳〵　浮「と斗りにて夫婦は呆れて居たりけり　軍「ホヽウ不審な尤是に渡らせ玉ふは今川上總之介安則公の妹姫八重梅樣　八重「賤の女と成つて入込しも戀に事寄せ其方が心を引き見ん爲則父上了俊樣の仰せにて兄上總之介安則　軍「まつた某は家老庵原主膳といふ者奴となつて來りしに感じても餘りある汝が心底態と詞荒ら〳〵しく罵りし跡より裏から忍び入りしに思ひもよらぬ最前の仕誼此上は一時も早く出立の用意　太郎「ハッ忝けなく存じ升れど○エヽ敵も討ちたし母が病床も離れ難く望みは二つ身は一ッ両刀帶せし身なれども此義に於てどうムつても　浮「思ひ掛なき襖の内わつと玉ぎる母よりも驚く夫婦が駈寄つて　太郎「ヤア母人　櫻「かゝさん　太郎「母人イのう○申何故の御生害でムり升　櫻「ひよんな事を被成升たなア　浮「歎けば母は顔を振上げ　三「目出度門出に歎くは不吉今川樣ゟ御厚情の御意下りしに猶豫の体は母に心引かれし未練者只成らぬ身の櫻子も行衛の知れぬ小雪が事も案事はせぬ母が非業の死をするも元

の起りは皆照行母が祝ふた門出の血祭り仇に返すな何れも去らば　淨「去らば〳〵も次第に弱はる老女より太郎夫婦が引入る思ひ見聞く人々口に唱名顔背け此世の別れぞ果敢なけれ　軍「ヤア未練なり富士太郎跡万端は主膳が計らふ心殘さず出立〳〵　太郎「重ね〳〵の御高恩仰せにあまへあれなる高峯の太皷の義は淺間左衛門目をかくれば何卒敵討濟て歸國迄は今川家へお預り被下らば此上の御高恩と有難う存じ升　軍「ホヽウ高峯の皷は此主膳主人に急度お預け申さん心殘さず出立しやれ又此一振は相州正宗門出の餞別納めてたもれ　太郎「ハヽヽ難有く頂戴仕つてムり升る是より直ぐ樣發足せん　淨「と立上れば　八重「ヤレ待て太郎　淨「呼び留め　八重「敵は淺間業わる曲者其方は舞樂の家　軍「敵を狙ふ出立に手練が見たい何と〳〵　太郎「御尤の仰せ舞樂の家には育つれども君に仕へる身にあれば少し計りの心掛は　軍「ホヽウ左もあらんソレ腰元共　四人「ハア、　淨「下知の下よりこのしづく四人兼て用意や仕たりけん紅葉の枝をてんでに携へ太郎やらぬと取卷たり　太郎「コハやさしき御相手おとなげなけれどお相手に　照葉「サヽ夫が不覺女と心得　三人「油斷して怪我さしやんな　太郎「たとへ相手は鬼神なりとも此富士太郎が一心にて　四人「其廣言を　淨「其廣言をと打て掛るを右往左往へ打拂ひひら〳〵ぱつと稻妻の光りつひか〳〵　照「照葉が正眼受けて見や　太郎「照葉とあれば陽の拵へ〔ト立廻つて〕　吳服「所を吳服が　太郎「どつこい吳服なれば陰の拵へ○眞向たち割○是を左右へ　赤葉「所を赤葉がたますに手なし〔ト立廻りあつて〕　太郎「赤葉がちりまを　赤「何ぞいふてか○ア、皆行かしやんせ　淨「赤葉が下知に殘りの女中ひらがり掛つて照葉のかんばせ林に狂ふ里鹿の諸葉と共に落にけり　軍「逃れ手の内まつ斯うせば〔ト百両包をはをる太郎受留め〕　太郎「ヤア是は　軍「些少ながら路用に仕やれ　太郎「ハア、難有う存じ升此上猶豫恐れあり　櫻「ろんなら直ぐに　太郎「出立せんお身は家に止まつて胎子を安く產み落せよ　八重「ヲヽ女子は女子相互跡は宜ろしく介抱せん　太郎「男子ならば叡太郎と号くべし　八重「シテ敵を尋ねるは　軍「何國をあてに　太郎「アヽイヤ有家は篤より二通の書面播州室積平馬が方に　軍「イヽヤさう思はせでそちを釣寄せ討取は平馬が助太刀其當人は播摩にあるまい〳〵　太郎「若し照行播州にあらずば直に夫より海船で西は九州筑紫迄　軍「東は敎賀南は紀の路　淨「北へ越後に佐渡が島日の本のあらん限りをば尋ね求めて淺間が首引提げ立歸らん　軍「去らば　太郎「櫻子去らば　淨「去らば〳〵と詞數いはぬ心の暇乞　軍「姫君のお立ち　腰元大勢「ハア、　軍「急がれ太郎　太郎「ハッ　淨「思ひは跡に　惡者「うぬ〔ト切てかゝるを見事に切る〕　太郎「門出の血祭り　軍「見事〔ト此とたんよろし〳〵幕

五幕目　〔巴屋見世先の場〕〔梶田十蔵住家の場〕

役名	
一富士太郎	一女房櫻子
一掛川貫蔵	一醫者道養
一子分小助	一九郎八
一同江吉	一馬士多治右衛門
一同ぜぶ六	一旅人仕出し大勢
一妹お梅	一下女三人
一女房およし	一侍一人

地物三間の二重見附襖橋掛り落間中庭の摸樣隣の塀を見せかけ巴屋と書きあり上手は家体都て旅籠屋の体下女三人旅人を留めて居る在郷歌にて幕開ら〳〵 下女三人「お泊りじやないかへ〳〵 旅人皆々「ナ、泊めてくれ 下女三人「サア〳〵お上り被成いなア 旅女形「こつちの若にはぐれたので不自由で成らぬ女中さんお頼み申ぞへ 旅獣役「エ、こちらのやうな旅役者が人使ふてよいものか 立役「何と馬虹さん今夜は貴樣の江戸駒でおれが万里と出掛たらついなでじや 獣「何をいふやら中屋が長唄なりやおりや淨瑠璃で押へてこますぞ 下女三人「サアア二階へ行うしやんせいなア 立「ドリヤ風呂へ入て休まうか 〔ト皆々奥と二階へ這入る向ふより九郎八口利の形り貫蔵附て出て」 九郎八「是はよい所でお目に懸り升た 貫蔵「拙者も貴公の住家へ 九郎「マアムり升せ 〔ト本舞臺へ來る」 下女三人「ナ、且那樣お歸り 九郎「客共はあるか 下女三人「たんと留て置升たわいなア 九郎「そんならさり〳〵風呂へぼい入れ支度も腹のへらぬ内に喰こして仕舞へ 下女三人「アイ〳〵 〔ト奥へ這入る」 九郎「時にこなたの申されし愈々主人淺間殿にハ其富士とやらを討て立退れしとな 貫「サア貴殿は元淺間の仲間勘當を受て國遠爰こそ貴殿がよい詫處じや 九郎「夫は忝ないシテ詫の種に成る事は 貫「富士の悴富士太郎敵を討んと尋ね廻るよし其方宿屋商賣を幸ひ心を付て討て捨なば手柄となり又身共が主人室積平馬殿其富士が嫁の櫻子に大熱心遠け行けば褒美といひ淺間殿へは主人がよきに申て呉れらるゝ夫故元の好身に參つたのさ 九郎「ヱ、シテ其富士と云ふ奴は 貫「年の頃は廿三色白なる男 九郎「又櫻子は 貫「年の頃十八九四つ斗りの子を連れ富士太郎が行衛を尋ね一昨夜此跡なる中山にて出會ひし所思ひの外手剛い働らき其中へ以前の家來め邪魔ひろぎ無念ながら取逃がしたが大袈裟に切り掛けたれば所詮叶ひはせまいと思ふ 九郎「スリヤ年頃は十八九肩先より大袈裟にすりやアノ奥の 貫「何ぞ心當てがムるか 九郎「サア四つ計りの子供は居ねども何でもわいつに違ひはない又富士太郎といふと隣の病人の涙人此間多次右衛門めが質に置て呉れと頼んだ相州正宗 貫「夫こそ今川より敵討餞別にきやつ

が貰ひし物ろやつ正し〳〵　九郎「ハテ何もあはてる事はないぞちらも病人ゝァ奥へ往て何角の相談　真「然らバ件藏ではない九郎八　九郎「お客斯うお出被成升せ」ト両人奥へ這入る上手障子の内より藪井道養娘お梅を追ひ出る」　お梅「ァ、悪い事さしやんすなお仁躰にも似合はぬ又しても置て被下んせ　道養「イヤ置ぬ〳〵つい得心さへ去て〳〵れりや兄貴は金出しさへすりや遣らうといふ故直々に奥様ぞうじやぞい〳〵　梅「兄さんか何といはじやんしてもいやでムんすわいなァ　道「いやといふ程猶一倍思ひがさす穂の薄じや　梅「アレエ誰ぞ來てたもいのう　道「去迚は八釜しい」ト およし橋掛りより出て内へ這入る道養取違へおよしを捕らへる」　およし「エ、主シある者に何さんすのじや　道「ヤァこりや　梅「およし様さつきにかち　道「ァ、コレいふまい〳〵○腹が痛いといふに依て撫てやらうといふに仰山な　梅「アレあんな事を　よし「深切なお方じやないかいなァ　梅「イ、エ、なァ　道「ソレ〳〵兎角言はぬは言ふに増るお娘が腹にかゝつて肝心の病人を忘れて居るドリャ見舞ふて來うの」ト奥へ這入る」　梅「本に又しても否で〳〵ならぬわいなァ　よし「ハテ年の行ぬ時誰でも覺への有る事じやわいなァさう去て呼びにおこさしやんしたは何の用じやへ　梅「サァ其用はァノ御病人はどうじやぞいなァ　よし「サァお前が此間眞珠を下さんしたのでちつとはよいけれど頓とはかゞ行のぬわいなァ　梅「わしやモウとんと氣に掛つて居るけれどけふハお客が多うて行かれぬ因て呼びに上げたわいなァ　よし「何じやいなァ　梅「サァきのふの事言ふて下さんしたか　よし「サァ其事は私が呑込んで居るわいなァァノお方は私等がお主様思ひもよらぬ事でお前の世話仇に思ひはせぬわいなァさうしてお前どうしてあなたがこちの内に居てじや事を知つてムんした　梅「サァ夫いなァ○アノ奥の二階に涼んで居た折りにふつと見初て夫からお目があしう成つてやつれなさつた程猶いとしうなつてお前の内へ行くのもあなたのお顔が見たいばつかり　よし「本に年も行かぬに深切な志しわたしが急度お禮仕升わいなァ　梅「ァイ嬉しうムんすわいなァ　九郎「お梅〳〵　ト内よりいふ」　よし「ソレ兄さんが呼んでじやぞへ　梅「エ、まだ咄したい事がある今のお醫者様をお前の所へナやつてナあなたの病氣を　九郎「お梅〳〵　よし「あないな悪性な人でも療治はよいかへ　梅「そりや上手じやといなァ　よし「さうして見舞ふて戻れてこのいなァ　梅「私が頼んで上げるわいなァ　よし「又滅多な事しられなや　梅「何んのあはらしい」ト九郎八出ておよしを後ろより捕らへる」　よし「エ、又今の藪醫さんか　九郎「いやおれじや　梅「兄様じやわいなァ　よし「エ、九郎八様か又してもてんごうさんすわいなァ　九郎「イヤてんごうじやない大眞實○ヤイおのれい奥へ早ううせあがれ　梅「サァ行は行くけれど　九郎「エ、うせあがらぬかい　梅「エ、行わいな」ト奥へ這入る」　九郎「サァモウ今やそつとの事じやない夫でわれが顔を見るとおりや目遣

ひ計りして居るこりや其樣につれなうした者じやないわいやい　よし「サア其お志は嬉いけれど多次右衞門と言ふ夫トの有る身じや故　九郎「サアさつぱりと去られて仕舞へ女夫になりやわれもよしおれもよし素寒貧の多次右衞門めより又福つんな此九郎八餘り憎うは有るまいがな「トお梅出て來りおよしを招き」　梅「是程に心を盡すもどうぞ叶へてほしい計りよし「サアお前の事は呑込んで居るわいなア　九郎「こりや來い〳〵○何でもかでも一口商ひじや應といやよし又いやじやとぬかしや多次右衞門めに仇するがサアどうじや　梅「どうじやどいなア　よし「お前の事はよいわいなア　九郎「サア返事はどうじや　よし「よいと言ふたらよいわいなア　九郎「アノよいな　梅「よいといいきと早う開かして下さんせいなア　よし「夫でも主シの有る身でどうも成らぬと言ふのに　梅「そりやお前胴慾じやわいなア　九郎「よけりや今直ぐに　よし「せわしない○ヱヽお前じやないわいおア　梅「ろんなら私は　よし「呑込んで居るわいなア　梅「そんおらお醫者さん連れて行かう「トお奥へ這入る」　九郎「サアモウ斯う言出すからは否でも應でも聞いて貰はにやならぬ「ト貫藏旅人奥より九郎八を呼びながら出る九郎八取遏へて捕らへる此間におよし樣掛りへ這入る」貫藏「九郎八殿是はいろな事　九郎「ヱヽ逃げやがつた忌々しいわい　貫「何んの事はない氣違いの沙汰○さうして櫻子富士太郎は愈々相知れ升たか　九郎「しつこう夫と知れてごんす　貫「是に居らるゝは皆平馬殿の隱し見附今夜は爰に泊り居れば　九郎「此上は戀の意趣を持込んでアノ多次右衞門め流れの來た正宗もあいつの手に入れずわはてさしてこますは　貫「シテ櫻子は　九郎「櫻子めはこなたに切られた疵で破傷風なれ共手剛い奴が付て居れば滅多に手出しは出來ぬ委細の事は奥の間で　貫「九郎八殿　九郎「お客衆皆ムれ「ト皆々這入る上手障子家体より兵藏道養連れ立ちて」兵藏「是は段々御苦勞でムり升病体は彌々夜前おつしやり升た通りでムり升るか　道「サア金瘡といふやつは大破傷風になれば中々事が六ケしいじや　兵「どうぞさう成り升せぬ内にあなたの御療治で　道「直すには夕べ渡した藥に男の生血を合して呑せば忽ち本復予が受合　兵「外にあなたの御療治は　道「何んにもないどうぞ生血を調へさつしやれドリヤ奥で休み升せう「ト奥へ這入る」　兵「一昨夜思ひも寄らず巡り逢ふた櫻子樣敵の爲に金瘡のお痛み其上和子樣を見失ひお力落ちに重る御病氣爰迄御同道は仕たは仕たけれど何を言ふても生血が調はずば本腹とおいとの事夫故腹切つてお役に立てんと思ひしが兄兵助は相果我又果なばお力に成る者も無し二つには多吉が事妹に告知らす者もおく我と心を取直し街道筋よ彷徨ひ道ならぬ事ながら主人の爲に往來の者を手に掛けんと刀に手は掛けたれども罪無き者は手に掛けられずすで〳〵夕べは歸りしが破傷風と成つては六ケ敷といふて誰を切るあてもなく御病氣だよ直しなば假令此兵藏が有らずとも甲斐〳〵しき櫻子樣成れば○ム

ゝ何とした者であらうなァ（ト上手より九郎八伺ひ居る此とたんに顔見合せ九郎八障子をしめきる兵藏急度見込み返し

遊物平舞臺見附赤壁納戸口押入上手隣坐敷の二階此下より大和茸の家体橋掛り拭垂塀門口富士太郎着流し浪人の形り眼病の体よて上手に坐はり居る下手に駕舁小助江吉ぞふ六八釜敷言ふて居る眞中におよし前垂姿にて斷り言ふて居る賑かなる鳴物にて道具納る　三人「聞かんぞ〳〵　よし「其樣にいはずと暫くの所でムり升わいなァ　ぞふ六「其暫ら〳〵も久しいものじや爰な多次右衛門の大盗人め三吉が盗へうせて一文なしに組さらし友達の好身じやと思ふて七貫五百文貸してこました　小助「おれも六貫たをされた　江吉「おれは又盗たびに貸したおんづもり丁度十貫五百文　ぞふ「夫から内へ來れば留守外で逢へば内へ來いと引ずりあがつて返へさぬ横着者　よし「サア尤でムんすけれど今はこちの人が居やしやんせぬ故　小江「ム、留守でも大事ない貸した代りに内の物持つていなうじやあるまいか　ぞふ「さうせう行け〳〵（ト富士太郎さくりながら出て」　太郎「最前から聞て居れば皆こなたが尤じやが拙者は此樣に眼病よて皆目見へずマア〳〵多次右衛門が歸る迄お待被成て被下升せ　小「ならんぞ〳〵　ぞふ「サア皆來い〳〵　三人「合点じや〳〵（ト およしを引き退け太郎の前を通るを一々投る此内お梅上手より出掛け見て居る」　三人「こりやおいらを投たぞよ　太郎「素町人の分際で事を譯て頼むに狼藉働かば手は見せぬぞ　三人「何じや〳〵こはい事はないぞ〳〵

お梅「マア〳〵皆八釜敷ういはずとよいわいなァ　三人「ヤアこなたと頭の妹か　梅「今聞けばおあ方の事じやさうなわしがどうなりとして置かう程にあすでも私に取りにムんせいなァぞ〳〵　ぞふ「サア皆來い〳〵（ト三人橋掛りへ這入る」　よし「本にお梅さん又しても〳〵お前のお世話に成り升してお氣の毒に存じ升申眞珠を下さんした隣りのナア兼々お咄し申たお梅さんでムり升富士太郎樣お禮おしやれ〳〵太郎「扨はお梅樣でムり升か御覽の通の眼病お心に掛られ眞珠を下されし上只今の御厚情千万有難う存じ升　梅「ハイ〳〵お禮は私しや辛氣千万に存じ升○エ、モウあのやうに慇懃にいふてじやと物がいはれねどうぞお前がエゝゐいろいなァ　よ「サア呑込んで居るわいなァ申若旦那樣改つた事なれども私は甲枝と申升て腰元奉公アノ多次右衛門殿は徒歩仲間若氣の至り不義のお咎めで既にお手討にも成るべき所あなたがお助け被下し上お金迄被下夫故女夫の者が寐升ても上方の方へは足も向け升た事はムり升せぬ夫に計からぬ今度の騒動夫トがあなたを連立て歸られ升ての御眼病眞珠の才覺に心を痛める折りに幸ひ此お梅樣があなたにサア死る程思ふてムる故頼まれ升たもお爲を思ふてゞムり升る此間の眞珠と言ひお醫者樣迄おこして下さんす心意氣女子の私さへ惚れ升てムんすぞうぞやさしい詞を掛け

て被下升せ　太郎「サア此間より其様に聞けど大望有る此身殊に眼病　よし「サア夫じやに因てのお願みでムり升　太郎「サア其様に申ならばマア如何様とも　よし「サア傍へ行きなされ」「トお梅をつきやる」　太郎「何にも言とね嬉しうムるぞや　よし「モウこちの人も戻らをさうな者じやが」「ト道養上手が酒に酔ふて出て」　道養「鳥は宿す池邊の樹僧は敲く月下の門ヱヽイ　下女「あぶないわいなア　梅「ナヽ道養さん能う來て下さんしたなア　道「そもじの頼みなら唐迄も行くじやシテ御病人はどれじや　太郎「是におり升る　道「御免被下下拙少々銘酊致して居るドレ見て進せう」「ト脉など色々見る事あつて」　道「こいつは六ヶ敷餘程心勞召れたと見へる　太郎「心遣ひ故の眼病でムり升　道「こりや水亀眼と言ふて捨て置くと命に掛る眼病じや　両人「ヱヽ　道「隨分直る薬も有る癪痛ひであらう　太郎「一向夜に入り升とせつなうムり升　道「其痛みは針で留めて進せう　太郎「夫は御苦勞に存じ升「ト隣より下女一人走り出て」下女「お梅さん旦那さんが呼んでじや　梅「つヽとモウ○道養さん頼み升たぞや　道「込んで居る〳〵　下女「サアお歸り被成升せいなア「ト上手切戸へ這入る向ふ多次右衛門馬士の形ヨて賣屋の手を引張り出て」　多治「さうされては濟ぬこつちへ來て貰らう〳〵　賣屋「デモ私じやてヽどうするものか　多「ハテこちへ來て呉れ〳〵「ト内へ這入る」　よし「こちの人何所へ行かしやんたぞいなア　多「サア正宗の事に附き○此人の所へ往たが○あなたは誰じやよし「結搆なお醫者様じや故お梅様が引合して下さんしたのじや　道「御亭お歸りかマヽ此病人は十日捨て置と心血を吐て即死じやまだよい時分に見せたのう　多「ろりや捨て置かれぬどうぞよい仕様は　道「有るとも〳〵併し滅多に言はれぬ他耳を憚る奇薬でムる御病人此針を打つてどうじやの　太郎「一向にこちへにくうムり升　道「痛い筈じや心の臓の釣が切れかヽつてあるわい　両人「ヱヽ　賀「コレ多次右衛門殿アノ相州正宗　多「コレ　賀「サアアノ代呂物は隣りの九郎八が手から受取つた物じやが其九郎八がこなたに渡して呉れなと言ふたに因てどうもならぬわいのう　多「成程尤じやがさう仕られてはどうも成らぬ何分後に金拵らへて九郎八を連れて行程に外へは遣らずと留置て被下あれを流しては○サアどうも濟まぬに因てくれ〳〵も頼んたぞや　賀「そんなら二人連でムれヤレ〳〵六ヶ敷質受けじや「ト向ふへ這入る」　多「若旦那の病はどういふものでムり升　道「此病は則水亀眼と言ふ水がつきると心火破れ出て五臓を燃やを即死〳〵　太郎「人間は病の器死る事は厭はねど望みある此身なれば　多「アイヤ若旦那何にもおつしやり升なィヤちと我々は望みある身何卒若旦那の御病氣平癒のお薬が　道「あるとも〳〵我等が家の秘法女の生血を合はして飲せば立所に直るじやて　両人「スリヤ其お薬に　道「ドッコイこりや安い薬じやないぞや能う似た事もあるものじや隣りの病人も人の入る薬廿金ヨ寶升た此薬も廿金じやが合点か　両人「其金は

太郎「命に換へる寶はないコリヤ是相州正宗大切の刀なれども差當る金の代りに〔ト刀を出そ」多「エ、〇イ、ヤこりやお放し被成升てはなり升まい　太郎「テモ差當る藥の價　よ「さうでムり升るマア御病氣さへ本腹被成升たら　多「何をおのれが知つた事を　よ「夫でも　多「譯も知らずに〇イヤ何お醫者樣後方迄に急度藥禮は調へ升るでムり升せう　道「ろんなら隣りの病人も請取て居れば隣にて待合さうか〔ト隣へ這入る」　太郎「長の年月寒さ暑さに苦しみて引出せし此病所詮本腹思ひもよらぬ　多「お氣遣ひ被成升お金子も血汐も調へ御本腹させ升　よ「夫々まさかの時は隣りの九郎八が口說を幸ひ道成らぬ事ながらたばかつて金を取る分の事　多「私女夫が居るからハ本腹させ升せいで御恩送りが何所で成り升せう　太郎「仮令藥は手に入つても女の生血が手に入らずば　多「夫も心當りがムり升女房共一寸おじや〇愈々隣りの九郎八が口說て居るじやな　よ「アイ最前も無理に捕らへて　多「よし〳〵およし主夫トの爲ゑは我が身命果れるで有らうな　よ「改つた事言はしやんすお何の命を惜まうぞいなア　多「出かした〇若旦那急度御病氣は平癒させ升る〇女房に惚れて居るこそ幸ひ非道ながらも間男にして藥代　太郎「シテ女の生血は　よ「其時は私が命　多「スリヤ得心か　よ「お役に立て下さんせ　太郎「イヤ〳〵およしをさう去ては　多「本望遂ず犬死がお望みか　太郎「じやといふて　多「背に腹は換へられ升せぬわい〔ト向ふよりぞろ六江吉小助九郎八出て」　ぞろ六「頭今立場の婆々の所で言合した通り　小助「おいらもねらいめに逢ふたざぶめ　江吉「尻持つて下さんす氣か　九郎八「チ、いけ〳〵〔ト本舞臺へ來て」　三人「多治右衛門内に居るこの　多「ヲヽ何去に來た　よ「最前あの人さん方があんまり八釜敷ういはんすので夫であなたがつい　多「ムヽよい〳〵　泥「イヤ貸したもの返さず取て投たり眉間に疵を付けられたので　小「おいらが堪忍しても頭が聞このね　江「夫で臺詞に來たのじやわい　多「ヘヽヽよう來たなアさうして頭は　九郎「チヽ爰に居るわい　よ「お前は九郎八樣　九郎「お内義我人につらければ人又我につらしじや夫で掛け搏はね事ながら皆の奴の尻持つて來たのじや　多「九郎八我身に折入つて頼み度事がある　九郎「刀の事か　多「サア其刀けふ中に受ねば流れる代呂物貴殿でなけにや渡さぬといふに依つて　九郎「チヽ頼むとありや頼まれてやらうがマアこいつ等に頼まれた仕返しを仕升せうかい　太郎「多次右衛門〳〵最前無体をもる故一寸さヽへしを根に持つてねだり込めば用捨はないそちも武士の果ッレ是で譯を立い　九郎「何じやい〳〵刀出したらてヽ何の別にてはい事はないぞェヽ震てずとおれに引附て居い　泥「何いはんすやらこなさんが　二人「震ふて居てからに　多「サア九郎八我が手先の物を打擲したは腹が立うサアおれを〇イヤサおれが相手に成つて撫切りじや　四人「ムヽろんなら　多「サア存分に〇イヤするのじや　よ「コレこちの人お前何で　多「八釜敷いだまつて居

れ　よし「エヽ　多「だまつて居て呉れい　よし「ろんなら　太郎「多次右衛門其方が猶豫せば某が意趣なれば眼病乍ら立合ん「ト皆々逃うとする」　多「イヤわなたの御手にかける迄もない　太郎「ぶち切つて仕舞へ　多「ハッ○サア何にもこはがる事はないコレ○此刀なア刀で　九郎「ろんならかう「ト多次右衛門を叩く」　三人「おいらもかう　よし「アレ　多「さうじや夫で○そんな事でいくのじやないおのいら是でも誤らんか「ト四人さん〳〵多次右衛門を打擲する　およし行かうとするを留る」　太郎「多治右衛門〳〵　多「ハッ　太郎「如何して居るぞ　多「イヤこりや○此通りに致して居り升る　太郎「早う片付い　多「ハッこりや是では存分で○言分は有るまい　九郎「イヽヤまだ　太郎「言分あれば某が　多「ハテモウ弱つて居り升　九郎「こりや其言分は「ト刀にて多治右衛門が眉間割る」　多「刀の極印　よし「お前の額から　多「ナヽ眉間を割つたらモウ存分で○ナア申御主人　太郎「よきに計らへ　多「是でちつとは胸が落付たわい　九郎「ナヽ是でこつちの言分も　三人「濟まさうわい　多「ちつとさうも有らうかい　九郎「多次右衛門仕返しが濟だ上はおれも男じやわれが頼みの○ナヽ其正宗○急渡頼まれた其代りこつちも望みがある　多「ろりや後の事　九郎「皆の者サア來い「ト皆々花道へ這入る　およし泣く」　多「ハテ掛け搦ひもない餘所の事を女子と言ふ者は氣の弱い者である○モウ初夜でもムり升せうおよし奥へお供しや　よし「アイ　多「エヽ早う奥へお供申て行け　よし「アイ○富士太郎様　太郎「コリヤ多次右衛門今の奴等を打擲の様子此富士太郎目は見へねども心地よい又實は身の差合せと言へば假令此相州正宗は紛失致しても質物に差入ても　両人「エヽ太郎サア本腹してろら本望遂げさへすりや其事には搦ひはない必ず短氣な事のない様に心急かず療治も頼んだがよい　多「畏り升てムり升　太郎「サアおよし案内「ト太郎およし奥へ這入る」　澤「早更渡る夏の夜の嵐と共にしみ〳〵と　多「チエヽ口惜しい富士右門様の徒歩仲間梶田十蔵ともいはるゝ者が斯成果るのみか御主人に憂目を見する口惜さ今のお詞では何も角も御存の様子貧苦の中の御介抱手詰に成つて現在主の刀を質に當座遁れの遣繰りも爵が當つて今の難義其刀の事と言ひ價の高い彼藥女房と相對で道成らぬ不義をさし此身の忠義を立るといふは不甲斐ない此骸　澤「チエヽ口惜しやと無念の拳暖簾の蔭に女房も俱にしをるゝ憂き涙「ト およし出掛け居る」　澤「留めかねてど見へけるが氣を取り直して門の口すつと出るを引留め　多「こりや何所へ行　よし「アイ搦ふて下さんすな　多「搦ふなとは　よし「愛想が盡た　多「ヤ　よし「サアあんまりお前にかいせうが無いので去られて行のゝやわいな　多「待て　よし「イエ〳〵放さんせ　多「こりや勤奉公に行氣なら篤くりと暇乞をして行きやれ　よし「エヽ　多「夫を隠して呉れるわれが心　澤「恨めしいと恨み歎けば　よし「そんなら様子を　多「九郎八に仕掛けても迚も刀の質請の金がないと思ふて勤奉公に行とは何に

も言はぬ是じや〳〵　浮「手を合いすれば引別けて　よし「エヽ、滅相な何をするもお主の爲機嫌ようやつて下さんせいなア　浮「泣かすとやつて下さんせと又さめ〳〵と袖の雨夫トも涙打拂ひ　多「サア是がいやさに一昨日の夜中山で駕舁共が六ッ計りの子が金持つて居ると言ふを取らんとする所へ驅付舁駕共を拂ひ藪の内へ遠ていて金を渡せと言へば只と〻様に逢ひ度いと財布を放さず鬼に成つて其子を殺し持つて戻つた其財布明けて見れば露金二つに錢三文する事成す事斯成るも一旦お主の目を掠めし罪夫から夜も晝も足手かいさまに歩いても出來ぬものは金手詰に成てけふの切羽富士太郎様に何も角も悟られ口惜しいわいやい〳〵　よし「さういふ事なら此間からなぜ打明ては下さんせぬ餘りわしを思ふて下さんすが今では結句涙の種　多「およし　よし「こちの人　浮「思へば因果な身の上と手を取かはし泣く涙泣顔拭ふて女房は　よし「泣て居る所ではない一時も早う金を調へて〇こちの人往て來やんせう　多「待て行には及ばぬ　よし「及ばぬとはへ　多「サアよ〳〵思案をして見ればまだ十日も大事ない富士太郎様の御病氣其内には又よい　案も出よう又刀の事は富士太郎様アノ様におつしやるしいら〳〵言ふは質屋の辯又利上げと言ふ事も有るもの思ひ詰れば詰り又緩めていふて居れば何でもない事　よし「夫じやと言ふて　多「ハテ一寸延れば尋とやら夫よりは富士太郎様が右の様子を御存じこちらが苦勞するを思ひ我身の病を苦に病んでどんな事が有らうやら心元ないそちや奥へ往て氣を付けて居いサア〳〵早う〳〵　浮「サア〳〵早うに是非お〳〵〳〵心を奥に入る跡を打詠〳〵獨り言　多「こりやおよしよ今言ふたのは皆嘘じやわいやい我が勘奉公に往て金が調ふても迚もアノ九郎八めすぐでは刀渡すまい又血沙がおければ御本復もおし最前醫者の咄しを聞けば隣りの女子の病人ういつを殺して生血を役に立て路金を取て藥代刀ハ九郎八めが命ゥ〳〵夫を言ふたりや留めるであらうと隱したのじやわい〇邪魔の入らぬ内さうじや　浮「さうじや〳〵と思案を極めて身拵らへ何かうなづき灯を吹き消し隣の切戸へ忍び入るすれ違ふて忠義と忠義隣りの切戸を兵藏が伺ひそつと立出で　兵「今醫者が咄しでは此家の内に命危き病人ありとの事是を殺して櫻子様の本復の合方の生血幸ひの闇がりュヽよし〳〵　浮「差足拔足伺ひ〳〵奥の間差て入より早くこなたの切戸に打合出る白刃と白刃　櫻子「こりや狼藉な何とする　多「我を殺して入用の藥に使ふのじや　櫻「夫トに廻り逢ふ迚は滅多にや死なぬ　多「何を　浮「手負ひながらも道の女おなたも剛氣の不敵者互に爭ふ劔の光り障子の内にも太刀の音あなたも二人こなたも二人両方夫ゞと白刃の爭ひ危ふかりける次第なり　兵、多「サア生血を取るのじや觀念せい　太郎、櫻「滅多にや死なぬ　櫻「滅多に死なぬと言ふ聲に切手の二人ハ不審顔　兵「今のは櫻子様　太郎「何櫻子　櫻「富士太郎様　兵「何富士太郎様とは　多「櫻子様とは　浮「怪しひ中に女房は伺ふ手燭

差出して　よし「ヤアお前は兄さん　兵「妹およし　多「そんならあなたが　太郎「櫻子　櫻「我夫ヤア　よし「思ひも寄らぬ　兵「一家の寄合　多「さうとは知らず　太郎「櫻子諸共　櫻「切られうとは　よし「御病直さん　兵「互の忠義も　多「危い事で　皆々「あつたよなア　太郎「シテ其方は　兵「櫻子様の家來村主兵助が弟兵藏　よし「わたしが爲には兄様でムんす　多「ろんなら大阪を出るとき厄介頼んだ兄貴かいのう　兵「サア厄介に付咄しも有れど又思ひ出し被成ては　太郎「シテ櫻子出立の節身でもりありし胎子は如何に　櫻「八重梅様の御介抱受け安々と產落し男の子にて仰せの通り叡太郎と号け今年で六ッに成りあなたに逢ひ度い〳〵とあんまり慕ひ升した故お跡を慕ふて尋來る道おとゝひの夜吉備の中山と言ふ所にて　太郎「ナヽヽ何と致した　櫻「追手に出會ひ難義の場で見失ひ升たわいなア　太郎「スリヤ怜叡太郎は　多「吉備の中山にて　よし「お見失い被成たとな　多「ホイイ　よし「若しや最前お前の咄しのナアこちの人　多「モウ是迄じや〔ト刀を腹へ突込ひ〕　皆々「是は　よし「コレこちの人お前何で死なしやんすぞいなア　太郎「子細は如何に　兵「様子はなんと　皆々「サアどうじや〳〵　浮「歎けば苦るゑき辭を上げ　多「是が死なずに居られうか忠義と思ふて成せし事は皆不忠となり大切な正宗の刀質に入れたが身の不忠何卒して取返さんと心を盡す折柄おとゝひの夜吉備の中山で六ッ位の男の子金を持て居ると聞し故　皆々「ヤア　多「殺し升たわいのう今櫻子様のお咄しでは正し〳〵叡太郎様如何に知らぬ事成れバ迚現在の主殺し此身の罪は逆磔　浮「竹鋸にも引かるゝ所　多「腹切て相果るはまだしも武運に盡きぬ十藏富士太郎様櫻子様　浮「何事も皆間違ひの事と御赦免被成下よと苦しき息の詫涙扨はさうかと驚く夫婦およしは猶も涙にくれ　よし「エヽ假令さうでも間違事ひよんな事して下さんしたなア　浮「介抱愚に泣計りこらへ兼たる兵藏は涙呑込み〳〵て　兵「エヽこりや皆間違じや〳〵　多「間違とは　兵「おとゝひ吉備の中山で殺されたのは叡太郎様じやない　太、櫻「何叡太郎でないとは　兵「サアありやこなた衆二人の中に出來た多吉じやわいのう　両人「エヽ　兵「悔りは道理〳〵最前言はうと思ふたれど御夫婦の前で歎かすまいと言はなんだがおれが誤り早まつた事して被下つたのう　よし「さうして多吉はどうして殺されたのじやサア言ふて下さんせ〳〵　浮「いふて聞のして下さんせと縋り付ば涙ながら　兵「サアこなた衆二人大阪を立退いたは六年前水子の多吉をおれに預けも行方知れず夫から育てゝ置たれどおれには何でとゝさまがないかゝ様に逢ひたいと夜も晝も泣いて賴むがいぢらしさ西國筋と聞し故こなた衆女夫を尋ねんとあいつを連れて旅の道殺さうと思ふて連れては來ぬわいのう〳〵虫が知らしたか死る前の日から無性に逢ひたい〳〵とせがむ故庭瀬の立場で駕を借り急ぐも矢張り吉備の中山　多「アノ殺したは　兵「ナヽ多吉じやわいやい　浮「ハアヽと計りに女房は身を投げ伏して泣く涙　多「そんな

ら叡太郎様ではなかつたかエ、有難いとは言ながら兵藏殿折角今年迄育てゝ遣れてムつたを現在親が手に掛けるも腹が立うこらへて下されや　兵「夫といふもおれが不調法こらへて下さ」〳〵　梅「あたりも恥ぢぬ男泣き道理至極と櫻子太郎倶にしほ〳〵忍び泣手負は財布を取出し　多「因果の種は此財布子供心に露金を金といふたがあいつが不運　梅「恨めしの財布やと打付投付恨み泣き女房は手に取り揚げ　よし「エ、此財布が多吉の財布かいのうコレ多吉産れ落すから人手に掛けた胴慾なこちらをようマア暮ふて來てたもつたのう　多「殺さうとした時と、様に逢ひたいか、様に逢ひたいコレ伯父様情けじや慈悲じや助て下されと手を合して拜みおつたに知らぬ因果の寄合同士主人の爲とひとたらしい今息引取る迄と、様か、様逢ひたいと言ふたのが目先へ見へる様でおりやモウ早う死たい〳〵　梅「身を悶へたるいぢらしさ　多「コリヤ多吉めと、も跡から追つ付て三途の川も賽の河原もおれが負ふてやらうぞよ　よし「如何に知らぬといひながら　兵「暮ひ暮ふを其親が　多「手に掛けて殺さうと言ふは　三人「如何なる因果の　梅「寄合じやと三人手に手を取かはし涙の限り聲限り歎きを聞て櫻子太郎も袖や袂にせき兼て涙々と荒磯や浪打寄る如くなり　太郎「コリヤ十藏汝が忠義過れ過分愁傷の程察じ入る　多「エ、忝い其お詞せめて死前の忠義には此血汐を早う櫻子様へ　兵「如何様」ト兵藏茶碗を取て來る二階を明けてお梅聞て居る」　櫻「私が病氣直つてもあなたの病氣が直らねば　よし「さうじやの」ト死うとする兵藏留めて」　兵「コリヤろちは何で死る　よし「夫ト子に離れ生甲斐のない此身せめてお役に　太郎「去つかり留よ　兵「ソレお留め被成るゝマア〳〵待て　よし「イヤ〳〵殺去て下さんせ　梅「南無阿彌陀佛」ト お梅懷劍を突込む」　太郎「ヤアアノ聲は　兵「隣の二階　よし「お前はお梅さん　梅「およしさん何も角も皆聞升た奥様のあるお方とは知らずに惚れた私が因果假令さうでないとてもあなたの敵の家來の妹迚も叶はぬ戀故にせめてあなたのお役に立て死んだなら　よし「アイ未來の事は私が頼んで上げるわいなア　両人「ろんおらあなたに　太郎「お梅とやら過分〳〵長い未來は夫婦と成らん　梅「エ、嬉しうムんす」ト 扶と り死る仕かけにて二階より血流るゝ」　多「サアア〳〵二人の血汐を早う〳〵　よし「さうしてあなたのお薬は　道雲「イヤろりや爰に持ており升」ト出て來る」　多「サ、早う〳〵　よし、兵「サア申一心の薬　櫻、太郎「エ、重々の心遣ひ」ト両人呑ひゥントト倒れる」　両人「此体は　道「ちつとの内じやあはてさい」ト切戸より九郎八貫藏伺ひ出て」　九郎八「覺悟」ト太郎に切て掛る太郎ひつ〳〵と起き九郎八を引廻す貫藏切つて掛る立廻つて」　太郎「此刀は相州正宗　兵「何正宗とな　櫻「申富士太郎様　太郎「そんならろちは本腹致したか　櫻「あなたはお目が見へ升か　太郎「今迄見へざる両眼の明らかに見へ心晴々と爽かなるは　道「夫こそ我等が家傳の利目何とひとい物でムり升せうがな　兵「ソレ両方

價の四十金　道「エ、忝い　太郎「不便なるは多治右衛門　多「お搾ひなくとも御疲足　蜆「とは言ひながら　道「ハテ跡は下拙が呑込升た　兵「妹は跡の問ひ吊ひ我は是より直様出立　太郎「委細は道にて言合せん　貫藏「富士太郎覺悟「ト切て掛る立廻りポンと切る」　捕「かゝる手練のぞつさりばつさり此世の名殘りかつくりと落入る手負泣入およし跡に見捨て三人は播磨路さして出て行「トよろしく三重にて幕

六幕目　〔阿彌陀寺開帳の場
〔同見染の場

役名			
一傾城　涙江	一順禮	一人	
一同　涙路	一代官	一人	
一同　涙崎	一仲居	大勢	
一花若丸	一禿	二人	
一奴三平	一幇間	一人	
一田舍侍	一捕手	一人	
一傾城涙花	一門弟	四人	
一奴國平	一捕手	大勢	
一浪間左衛門			

造物見附淺黄幕板松開帳の建札阿彌陀寺開帳と記しあり茶店床机二脚仕出し腰掛て居る皆坦にて幕開く　仕出し○「何と阿彌陀寺の開帳はゑらい評判じやないかい　口「ソレ〳〵造物の説法がいつちよいげゑ　△「ろんなら一所に參詣仕升せう　○「サアムれ〳〵「ト皆々上手へ這入る向ふより田舍侍大きゐる胴乱を提げひよろ〳〵して來る巾着切附て出て胴乱を取て走り這入る是を知らずに本舞臺へ來て」　侍「何じや〳〵身共に當り不禮をする此刀が目に掛らぬかたはけ者めが憎いやつの「ト上手へ這入る巾着切下手より出て」　巾着切「ハヽヽヽ餘ッ程たわけじや併ゑ此胴乱何ぼ程ゐるか知らん○忌々ゑい錢が二百入てゐるもつとよい仕事に掛らにやなるまい「ト上手より涙路涙花仲居幇間附て出る」　仲居「マア〳〵爰へお出被成升せ此阿彌陀寺へ傳樣が他所行の御趣向はよけれど　幇間「アノ無理酒にはほつと困りでムり升せう　禿△「本に爰らはよい風じや　禿○「さゝの酔を醒さしやんすが　△○「よいわいなア　浪路「他所行はよけれどもアノ意地惡るの傳さん　浪崎「本に遠慮も會釋もなう　浪花「金で高振るは餘ッ程念の入た　皆々「野暮じやわいなア　仲居「本に涙路さんが無理にさゝをしいられさんしたが酔醒しの藥を上げ升せうかいなア　浪路「イヱモウ否じや〳〵と思

ふ故無理なさゝも酔もせぬわいな（ト子役の順禮柄杓を持出て）子役「順禮に御報謝 鈴「ヂ、モウ歓から棒に惚りするわいなァ併し可愛らしい順禮じやナレ〳〵やり升せう 子役「悉う厶り升る（ト柄杓にて頂き這入るやり手出て） 遣手「チ、太夫さん方爰にかいなァ傳さんがとこへ往たといふておこつてじや又例の肝癪が出ぬ内來て下さんせいおァ 浪路「私しや否じやわいなァ 遣手「さうおつしやらずと往ておくれいなァ 皆々「太夫さんマァ往て上げさしやんせいおァ 浪江「成程他所行の事なれば困らんすも無理ならず私も一所に往く程に浪路さん往てやらしやんせいなァ 浪路「チ、忙がしやのう 皆々「サァ〳〵厶んせいなァ（ト橋掛りへ行うとする橋掛より淺間出て來り行違ふ此時浪路の袖淺間の刀の柄にかゝる淺間笠の内より浪路を見て互に心意氣あつて） 皆々「太夫さん早う厶んせいおァ 浪路「チ、辛氣やの 皆々「サァ厶んせいなァ（ト皆々下手へ這入る） 茶屋女「ハイお茶上升せう 遊「チ、〇よい天氣じやのう 茶屋女「左樣で厶り升る 遣手「ハイ 遊「お身に尋ねたい事がある 遣手「遊び事にゝ困るぞ世話やの〳〵 遊「コレ〳〵 遣手「何で厶り升るへ 遊「今是におつた太夫は何れの揚屋名は何と申ぞ 遣手「あの太夫樣ゝ千歳屋の全盛浪路浪江さんといふ太夫主で厶んすわいおァ 遊「ハンうつやかな者じやなァ 遣手「ろんならアノ浪路さんを〇申御大盡樣御心が厶り升るならば お立寄り被成升せ 遊「成程尋ねて參らう其節は又お身を頼ひであらう 遣手「イヤモウ太夫さん方をやり〳〵りするは私が役ぞの樣な事でも致ス升せう必ずお待申升（ト上手へ這入る） 遊「今の太夫ハ千歳屋の浪路〇ドリヤ參詣致さうこの（ト上手へ這入る向ふより髪結國平出る） 國平「チ、イ〳〵（ト跡より奴三平月代のばし鎗擔げて出て） 三平「チ、イ〳〵 國「三平樣まつとあるかんせぬかい 擔ぐとはいふものゝ此通りの長髪何と剃つて結ひ直してくれまいか 國「そりや安い事じやが爰はおれが近附故大事ない佐七内に居るか〇どこへゞ出たさうな〇チ、幸ひ湯も沸いてあるサァもまんせ〳〵 三「合点じや〳〵（ト天窓をもんで居る浪花走り出て） 浪花「こちの人じやないか 國「さういふはお京ィヤ浪花太夫此間はお目に掛り升せぬ 花「お目に掛らん所かいつから逢すと思はんすお前といひ替して大阪を立退き九州三界へ附歩くも皆お主の爲 國「アゝコレ何をいやる傍に三平さんが居てじやわいのう 花「サァお前の爲に廓に勤めもお主さんの爲じやぞへ 國「ハテ扨知れた事 花「其深い女夫じやないか何で鶴菱屋の寒菊さんとあの樣な事さしやんしたへ 國「おりやそんな事は知らぬわい 花「此狀見やしやんせ屈けてくれいと何で私を頼まんしたへ 國「夫をおれが知つた事かい 花「イヤこなさんは 三「てりや〳〵女夫喧嘩は尤じやがマァ剃て仕廻ふてからせり合やいのう 國「じやといふてあん

まりでムり升るわい　花「楽みを拵へて置て何で私があんまりじやへ　三「サア〳〵尤じや〳〵が月代剃る者の身にも成て見い月代がはゑび返つたわいのう〔ト向ふより花若見の形りにて走り出て三平に突當りべつたり坐る」　花「誰やら走て來て目を廻さんしたぞへ　三「行き倒れ〳〵　國「見れば寺のお兒さうな呼び起しや　三「兒様ィのう〳〵　國「氣が附升たか〳〵　若「どなた様かは存じ升せぬが段々のお心附けお嬉しう存じ升る　花「さうしてマア何として爰へお出被成升た　若「よう問ふて下さり升た何を隠さう私は此山寺の兒小姓花若と申者此頃寺へ尋ねてムんした上總之助様といふお大名の御子息様師の坊とは伯父甥の好身私が方丈に獨り花を生けて居る所へ來てあの〳〵ものゝとッイ一枕の嬉しい逢瀬所に其若殿は書置を殘して寺を出やしやんした和尚様より私が仰天行く先は慥に知れずあちよこちよと漸う爰迄來たのでムんもわいなア　花「本にいとしい事でムんすわいなア　若「併しモウ歎くは愚痴私も此事に尋ね歩いては咽が干上るどうぞ寺へいにたいと思ふてもいなれいせず○お前髪結さんと見たどうぞ私を法躰さして下さんせいおア　國「成程尤じや尤なれど夫は悪い思ひ付　若「じやといふて喰へぬが悲しい　三「こりや尤じやいつそあの經衆太鼓の拍子に合して女夫中直りに二人して剃つてくれぬか　國「こりや面白いサア喧嘩は跡へ廻してマア商賣が肝心じやそなたはお兒様を剃つてたも〔ト両人月代に掛る」　花「こちの人剃て仕廻て跡どうする待て居やしやんせ　國「何にもわれにさいなまれる覺へはない清淨な男じやわい　花「其口が憎いわいなア　國「おのれ憎いとて何とせうと思ふて〔ト又女夫喧嘩に成りトゞ國平花若を引寄せ剃り下げる涙花三平を引寄せ坊主にする」　花「サアよいか　國「隨分と際を立て剃り下げたそこな鏡で見やんせ〳〵　三「おれも是で心持がようなつた〔ト花若両面鏡にて見て」　若「ヤアこりや剃り下げに成たわいなア　三「ヤア此三平を坊主にしたぞよ國「本にこりや間違ふた　花「拍子に掛つて堪忍して下さんせ　若「只さへ愛想の尽た殿さん此剃り下げを見やしやんしたらトゞ愛相がつきやうものこちやいや〳〵　三「ハテ貴様は又坊主になられうがおれがのは急に生へぬはへねば知行よあり付れずサア元の通りよはやして戻せ　若「早う法躰さして下さんせいなア〔ト上手より代官捕手大勢連出て」　代官「ろりや〔ト國平を取り卷く」　國「こりや何故の狼藉じやなア　代「ヤアうぬは富士太郎が家來國平扨はそちらの男が富士太郎よか　若「エ、滅相な私しや兒の花若　代「其又兒の天窓を剃り下げる」　若「サア夫あんまり阿房らしうていはれもせぬ　代「言譯なくば家來縄打て　皆々「腕廻せ若「こりやたまらぬ〔ト逃るを立廻りにて皆々を追込む子役の順禮逃出る田舍侍と巾着切子役を捕らへ」　侍「ヤイびつちよめうぬ形りに似合ぬ太いやつじやサア白狀してきり〳〵そこへ出して仕廻へ〔ト此時淺間出掛居て」　巾「悪く意地ばると子供とて用捨はないぞ　子「何

も取たものはムり升せぬ 侍「取らぬわれが懐ろに紙入がどうしてあつた 子「其紙入は拾ふたのでムり升 侍「しぶとひ小びつちよめ痛いめさしてやらう 巾「うぬが様なやつはかうして 子「痛いわいおアアレエ〳〵 巾「サア痛くば出せエ、いつそ〔ト浅間両人を取て投げる〕 両人「アイタ、、、 巾「腰の骨が折れたぞ〳〵 侍「ヤアコレ侍盗人の吟味をして居る身共を何で投るのじや 浅「投ても大事ない 両人「大事ないとは 浅「小兒童べを捕へてあらくれの詮議よびはり手が廻り相果おば其時御身は何とする」 侍「ヤア 浅「假令廊外致さうと高が小供お手前は武士じやないう 侍「サア夫は 両人「サア〳〵 侍「ムゝ言譯はない 巾「何の事じや 侍「とはいふものゝ 浅「何がどうした 巾「エゝお侍様の御挨拶じや敬してこますぞ 侍「ハテよいわいいかひお世話さん〔ト両人橋掛りへ這入る〕 浅「ハゝゝ、他愛もあいやつじやコリヤ小兒何所も痛みはせぬ〻泣く事はないサア早く行け〳〵〔ト泣々子役向ふへ這入る〕 浅「世には狠藉者もあればあるものじやなア〔ト涙路出て右の有様を見て色々思入浅間下手へ行くを涙路袖を扣へる〕 浅「そちや先程の傾城涙路殿か 路「あなたはどうして私が名を 浅「知らいで成らうか出雲の神を恨みん斗り 路「イゝヤろりや陸其思ひがあれば身に引請て里の意氣張り 浅「義を變せぬが武士の魂 路「伊達や手管を取り置て 浅「スリヤ敵を惱す謀り事 路「深いゐにしに 浅「アノかくる所存か 路「コレ必ず共に 浅「通はにやなるまい 路「嬉しう厶んす 皆々「そんなら太夫様〇サア太夫さん日が暮る戻らしやんせぬかいなア〔ト涙路花道へ行き鏡袋より鏡を出して映す〕 浅「庚嶺雪深うして花梅を吐く 路「たがしらぬ佛山の春霞引ゝひあればはだしともなれ 皆々「サア行かしやんせいなア〔ト涙路皆々向ふへ這入る浅間うつとりとなつて居る門弟四人出て〕 門弟四人「先生お迎ひ〔ト浅間扇を落すを木の頭向ふ見込み宜敷早幕

七幕目

役名			
一浅間左衛門	一太皷持定八	（赤間ヶ關千歳屋の場	
一千歳屋金兵衛	一傾城涙路	（仝中一階の場	
一同女房おつる	一同涙江	（仝奥座敷庭先の場	
一同娘お梅	一同涙崎		
一藝子小糸	一同涙花		
一仲居お竹	一同涙間		
一かみこの長蔵	一今川上総之助		

一蛇の目の八　一奴　國平
一掛川貫蔵　一禿丶　一一人
一信樂傳平

造物平舞臺見付長暖簾上手折廻り障子家体橋掛り茶屋格子いつもの所に門口掛行燈千歳屋とかきあり上手に傳平貫蔵を留居る下手にかみこの長蔵を蛇の目の八留て居る藝子小糸仲居お竹娘お梅太鼓持定八皆々留て居る酒肴銚子鍋杯並べあり騒歌にて幕開く　貫、長「ヤア聞かぬ〳〵　皆々「マア〳〵宜うムり升すわいなア　傳平「コレサ貫蔵殿高が彼等風情を捕へておとなげない誰あらう當國の大守赤松義則公の御寵臣此廓の奉行たる室積平馬殿の身内の貴殿が心掛けられし浪崎も爰にはおらぬはつて置つしやれ〳〵　長蔵「コレアノ頬桁を　八「ハテよいわい赤松であらうが猿松であらうが何ヒやあらうとおのれが惚れた浪崎力づくで買ふて見い　貫蔵「さだあのごとく　傳「ハテよいといふのに　お梅「なんぼう其様にせり合ても肝心の太夫様が見へ升せにや分らり升せぬヒやムり升せぬかいなア　お竹「太夫さんがムんしてから互に立引して　貫「然らばさう致さうわい命冥加なやつではあるわい　傳「ハテ仔細は身共が胸にある　八「おのいら酒喰らふのを見ても居られまい　長「料理場へ往て喜助をいぢつて一盃呑まうゝい　八「サア來い「ト両人這入る」　傳「コレ仲居小いとさん方は太夫さんを迎ひに　竹「そんなら私等道迄迎ひに　小糸「往て來うわいなア「ト門口へ出る」　梅「サア〳〵一つ上り升せ　小「アレ向ふから太夫さんが　両人「見へるわいなア「ト浪路浪江浪崎浪花間皆々道中さしかけ傘遣手禿附添ひ出て」　浪崎「さゝれつゝ千歳がもとに押寄る　浪江「寄る邊定めぬ流の身　浪崎「岩にせかるゝ物思ひ　浪花「行衛も知れぬあだし縁　浪間「月に漂よふ　浪路　江「浪江　崎「浪崎　花「浪花　間「浪間　路「皆々打揃ふて　皆々「來やんしたわいなア　両人「サア〳〵ムんせいなア「ト皆々本舞臺へ來る」　定八「ヤア是は打揃て容顔美麗やつちや〳〵　梅「太夫様方お大盡様がお待兼でムんすわいなア　路「小糸さん頼で置た事はへ　小「サアねつから便りがムんせんわいおア　江「お梅さん夕べの山さんわへ　梅「奥二階で居續でムんすわいおア　江「チゝ嬉し　路「姉女郎様は此間から何やら嬉しさうな様子　江「サアおとついの夜からアノお侍の御客さんがどうした事か○後にいはうわいなア　路「わたしもお前に頼みたい事もあり後に逢はふわいなア　崎「浪路様きのふ私が頼んだ事　路「ハテ呑込で居るわいなア　江「浪花さん夕べの事も私が氣を付て世話する程に落付て居やしやんせ　花「アゝ嬉しうムんすわいなア　侍「ヤイ〳〵うぬら大切の金銀を出して身体髪膚を賣買して置ながらおのいらが内証咄し仕て客をもてなさいで濟か遊女が座敷で餘所の噺しするは第一の戒め生得は客を三文とも思はぬ故それでは身共が武士が立ぬ○とサ腹を立る所なれども

夫では又相の山の 三味線を綿打の樣にしられてはつまらぬ こりや太夫どうじやぞいやい
江「貴樣がさう出かけると身共もモウこたへられぬ 路、鯖「エ、あつ〳〵ろしいわいなア 小「あ
なた其樣に成されずともマアかゝさんに太夫さんの事を頼ましやんせいなア 梅「さうでム
んすさうするが廓の習ひ本に粹なあなた樣にも似合ぬ事 傳「ム、成程理屈じやシテ花車は
何れに おつる「イヤうれへ參てお目に掛り升せう」ト出て來る」 みな〳〵「おつるさん つる「
皆ようムんしたなア 傳「何花車委細は聞て居つらん つる「成程承り升した私も千歳屋のお
つると申て人に立られ又あんまり惚人が多うて喧嘩の絶る間のなく氣の叶ぬ男は戀焦れ
て死る可愛さ後家で居ては殺生と此春から金兵衛殿を婿に入れ升したがまだ青いゆへ立引
は私がせにやならぬ太夫が事も私が呑込み升したマア落付て居やしやんせへ 路「おつるさ
ん夫でも私に つる「ハテこちの人の妹同然わるうと思ひはせねどあのお客もふり此お客に
も逢はぬこちの人が最負そるといひ氣の迫る事もあれどろりや胸の捌たわしゃやものそん
な事はとつと思やせん夫じやによつて此客はわしが顔立て逢ふて貰はにやならぬまた逢て
いやじやといやるとどうやらこちの人と譯でもある樣にサア思やせぬけれど氣が廻るとい
ふものじやサア疑ひはらしに逢ふて下さんせ 路「サアお前の御詞無理な事はムんせんけれ
ど此事斗りはマア兄樣にも尋ねてから つる「イヤ尋る事はならぬ又してもし〳〵泣たり

其顔が氣に入らぬ 路「夫じやといふて 江「ハテ涙路さんモウいはしやんすな親方の意に任
せぬが太夫のならはせ又おつるさんも折角いひだしやさんした事を反古にもおるまいこり
やわたしが預つてとつ〳〵りと後に返事せうわいなア つる「ろんなら大尽さん奥へムつて
両人「返事を待うかい 梅「サア太太さんがた 皆々「行うわいなア 〔ト皆々奥へ這入る花道よ
り上總之助夜番の形りにて出で〕 上總之介「火の廻り〳〵〇ア、騒ぎ居るな〳〵色は更に變
らねど變つたはおれが身の上太夫に逢はうと思ふても今は夜番の淺間しさア、どうぞ逢ひ
たいなア〇火のまわり〳〵 お竹「アレ彌七どんがムんしたわいなア お梅「サアムんせ 〔ト
お竹お梅出て〕 お竹「コレ彌七どんモウ何時じやへ 上「さればおれも書から番部屋に寢て居
たれば知らぬが 梅「お前は何が役じやいな 竹「それに時知らいで濟むこのいなア 上「されば
そこが古實じや廓の初夜は町の夜半ろこで夜番迄ぐつと寢て町の夜半を聞くと初夜を打出
すじやまづ大事は限りの太鼓何かしつぱりと睦言の最中滅法彌八と打ではいぬる氣になる
そこを離れわるい樣にかすめてどん〳〵客の心がぐにや〳〵と成てつい朝迄是が傳授
の太鼓は涙の音火の廻りの水調子陽を去づめる利劍何と夜番の口傳はむつゝしいものであ
らうがな 竹「あんなよい口な事ばつかり 梅「其お前が粹なので惚れ人が多うて私しや氣に
掛るわいなア 上「あんまりなぶつてお呉なシタカ惚れ人があれば此彌七ちよんの間は辻の

番所揚詰なりやねは負けておき升　梅「ろんならわしや今夜行くぞへ　竹「チヽめつさうなお梅様此彌七様は私しがとうから惚れて居るわいおア　梅「イエわしが先じやわいなア〔ト二人一所に傍へよる奥より涙崎出る〕　両人「お前は涙崎さん　鯖「本にお前方もあつかましい夜番の彌七殿人が知らぬかと思ふてきつい欝嫌じやなア府中から爰へ來てちよろ〳〵顔を見ると思やモウ悪性せこの寝間番してじやへ　上「コレ〳〵太夫様そりや皆お前の事畫も寝夜るも寝るのがお前の商賣我等は夜番の悲しさは寝るが最期足上りア、何とせう落ぶれた身の因果夫も誰故お傾城のぬめたゆへ隨分お樂み被成升せ　鯖「そりや誰にいふのじやへ　上「おのれにいふのじや　竹「コレあぶないわいなア　鯖「イエ〳〵はつて置て下さんせ　上「その口を〔ト八出て傍へ來るを上總之助叩く〕　八「アイタヽヽこりやどうする、上「チヽ違ふた八「何じや人をくらわして違ふたそれで濟か　鯖「マア聞て下さんせ夜番に似合ぬ惚れ人が多いので氣がもめるわいなア　八「とんとおれと一所じや　上「一体あいつが悪性からおこる事じや　八「そんな顔付じや　鯖「さうして女子さへ見るとたわいがないわいなア　上「マア一ず下よ居て下されサア一体あいつは古狐じや　鯖「こなさんは古狸じやわいなア　上「何を論め鯖「犬め　八「ヤア評判の燒餅は爰じや〳〵　鯖「モウ了簡がならぬぞへ　上「おれも斯うする皆々「マア〳〵よいわいな　鯖「イヤ聞ぬ〳〵〔ト八をさん〳〵にして奥へ這入る〕　八「何の事じやひどい目に合しおつた〔ト貫蔵奥より出て〕　貫蔵「蛇の目の八か　八「貫蔵様　貫「こりや示し合す事がある我々は平馬殿の隠し目附夜番に姿をやつせしは上總之助さつた傾城乙女はきやつを尋る爲斯く馬鹿と成て入込しも夫と悟られさい爲奥へ往て傳平にも逢ふて何かの咄し　八「左様ならば貫蔵様　貫「蛇の目の八　八「先ムり升せ〔ト両人奥へ這入る奥より傳平出て〕　傳平「聞ぬ〳〵　皆々「マア〳〵宜しうムり升わいなア　傳「コリヤヤイ此間より武士のあるさじき廊通ひ鼻毛も三丈四尺二分五厘延して居るぞよ夫に何のかのとエヽモ了簡ならぬ〳〵　おつる「御尤でムり升する私が屹度申付け升せう暫くお待ち被成て下さり升せッレお寝間とりや　両人「ハイ　つる「エヽさり〳〵とさらさぬかい〔ト お竹お梅ふせう〳〵に蒲團をしき枕二つ直し置く〕　傳「ムヽ然らば相待ち居らうわい〔ト丸裸に成り大小さし蒲團の上へそはる此内涙路は煙草のみ居る〕　つる「サア涙路最前もいふた通りじや此客を勸めにや彌々わえが疑ふコレさだやず〳〵いへば此箒の胸打否か應か返事はどうじや　傳「アヽ退屈なさだか〳〵　つる「ハイ〳〵それへ遣し升す○サア涙路返事はどうじや　路「どの様にいはしやんしてもいやなお客に逢はれるものかアイいやでムんす　つる「エヽさういやモウ〔ト箒にて打て掛る傳平あわて涙路を囲ふ涙路を思ひ打うとしておつる氣がつき引退け打て掛る金兵衛出て箒を引たくり傳平が手をねぢあげ〕　金兵衛「コリヤ何さらすのじや〔ト傳平を

見事に投る」つる「ハテこちの人奉公人の折檻するを何で支へさんそのじやへ　金「おれが爲めには妹同然勤めはさゝぬ座敷斗りの附合ひならばと約束して出してあるわいのう夫に何じや抱て寢やうの客じやのとぬかすはおのれかい　傳「ハイ左樣でムり升る　金「其ざま何じやひが左衛門めが　傳「拙者ひが左衛門とは申さぬ信樂傳平と申　金「才六めが　傳「ソレ才六お呼び被成るぞよ　金「エ、やかましいわい○此太夫はおれが妹足元の明い內出てうせいつる「コレ〳〵こちの人いはしやんすな知つて居る妹じや〳〵といふて可愛がりこつろり呼出してなんぼもあるやつじやサア折檻するが氣に入らずばあれ置て出て行んせ　金「さういふわれから出て行け　つる「わしが內に小糠三合這入て居て出ていねとは何でわしが出て行のじや　金「千歳屋金兵衛と名前を切替へたりや此身上はおれが物すつこんでおれ涙路を賣る事はならぬぞ見れば端近う蒲團をしきさらしてどいつもこいつもおれが詞用ひぬやつはさらへ出そぞ　つる「エ、ひよんな事して名前を切り替た事じやコリヤ女子ども火入に火がない茶も汲でうせおれやい　お竹「アイ〳〵　金「コリヤ肩をもめやい殘りは臺所へ往て酒の燗して持て來い　竹「ハイ　つる「コリヤ火を入れぬかい　竹「ハイ〳〵　〔ト傳平金兵衛の後ろへ廻り肩をもみお竹に奥へゆけと仕方するお竹火入を持て這入る〕つる「ア、僅百両の數金を悅んで婿にしたが今では悔しいわいなア〔トお竹火入と茶を汲で出て〕竹「ハイお茶上げ升せう火も入れてムり升する〔ト茶と火入と取違へ呑〕つる「コリヤ何とするのじや　竹「お前さんの麁相でムり升する　傳「さうした所はとんと灰猫じや　つる「おのれが猫にしをつたなア〔ト皆々を追ひ廻し奥へ這入る〕　金「ハテそうゝしいやつではあるぞ○小雪樣嫌お腹が立升せう惡者五四郎にかゞわかされ此廓の騷動めあなたは御存じはムり升せぬが私は富士太郎樣の嫁御櫻子樣の家來兵助が弟でムり升又私が妹お吉めはあなたの腰元夫故方々とあなたを尋ねし所此家に勤め奉公と聞より漸く金子百両拵へ升した所三百両おらば身受と申故是非なく其百両にて入婿に成升したもあなたのお身を大切に存じ升すゆへ此後ともに必ず富士のお娘御とは御隱し被成て下さり升せ其內には富士太郎樣に廻り逢ひ敵　路「エ、　金「イヤサ何角を御聞被成たら其恟りなさる事は富士太郎樣のお目にかゝり升てからの事に仕升せう　路「本にモウ心遣ひ嬉うムんす○さうして恟りする事とはへ　金「サア其事は何も其樣に申升する程の事でもムり升せぬ是は又追つて申上升す此上とも心置なう御用がムり升ればおつしやつて下され升せ　路「いひにくき事じやがおとゝひの晝阿彌陀寺で　金「阿彌陀寺で　路「エ、つゝとモウ辛氣な事ではあるわいなア　金「辛氣な事では　路「見合してからいはうわいなア　金「私も見合してから咄しを致し升せうマア部家へ這入てお休み被成　路「夫でもわしや爰で待ねばおらぬ人もあり　金「ハ

テ妹マア來い〔ト両人奥へ這入る向ふより國平旅装束にて出て〕 國平「思ひ掛けなく夜を深かしたは殊更装ふ旅装束詮議の場所は此遊所浪花にも逢ふた上何は兎もあれ一宿を頼で見ん○イヤ一寸頼み升せう誰もおらぬか頼みたい〳〵 浪花「アイ〳〵仲居衆誰も居てじやないかいなア〔ト出て來り〕 花「ヤアお前は 國「ナヽろちはお京でないか 花「よう尋ねて下さんしたなア 國「今更改めいふではないが御主人右門様は非業の御最期小雪様のお行衛も尋ねたし又富士太郎様は敵淺間が此西國筋に住ひと聞き御出被成しとの事若旦那様にめぐり逢ひ俱々敵の行衛を尋ね本望遂んと遍歴いたす内先達てより此地に留り旅の出立も敵をば探らん爲 花「サア私もお前に咄を聞き心に少しも油斷せず廓は諸人の入込なれば〔ト金兵衛出かけ様子を聞居て〕 金「さうじや急度詮議をしたがよい 國「さういふろちは 花「金兵衛さん 國「最前からの様子をば 金「とつくり聞きやんした 國「それ聞かしたら〔ト切掛るを〕 金「ハテこなさんに切られる様な者なら聞たといふて出はせぬわいの○最前から聞ば外ならぬ○イヤ外ならぬ抱への太夫近附のこなさん今いはんした事を引受て世話でもせうと思ふて 國「スリヤ其方が頼まれて 金「いかにも此金兵衛が引受けたりや落付て逗留して委細の様子伺とんせ 國「スリヤ身共を 金「此浪花が揚の客 花「そんなら私の客にして 金「いつ迄なりと居續けさんせ 國「重々の志 花「そんならお客さん 國「然らば亭主 金「早う奥へ〔ト両人奥へ這入る〕 金「アノ奴も富士太郎様の由縁の者吉備の中山にてお別れ申てより富士太郎様はどこにどうして〻るやら折角小雪様に巡り逢ふたれど富士太郎様と一つにあらねば今でも敵に出合ふても○ハテどうしたらよからうな〔ト奥にて笛の合方〕 金「アノ笛の音は奥二階合点の行かぬあの調らべ○それ天王寺の樂はよく吊ひしらべ合せて六時堂の前なる鐘の聲應鐘調の最中成る此一調子を以て何れの聲をも調ふといふ正しくアノ笛の音は○ハテなア〔トよろしく思入あつて返し

造物二間の家体二階の体見付金襖つけ家根にて是に玉簾をかけ東西落間塀の上計り植込みの上計り見せ都て二階座敷の摸様淺間前又行燈を置き狀見て居る禿すはり居る琴唄にて道具納る 淺間「アノ琴の唱歌といひ此文といひムウ○おとつひ阿彌陀寺にて歌を送り玄女今夜忍ぶと此文体なにによるべ定めぬと書しは○ムウ此文の主シは浪路といふか 禿「ハイお返事被成て下さり升せ 淺「ムヽ〔ト右の狀を笛に入れ〕 淺「かうするが直に返事○此笛を浪路殿へ吹かれて見られよと渡してくれ 禿「ハイ——〔ト奥へ這入る 淺「此間當所阿彌陀寺へ參詣の折柄向より來る浮かれ女別れし時のあてやかさ跡にて名を尋ねし所赤間が關の千歳屋の浪路と聞きしゆへ直様爰に來つて呼寄せし處使せし者浪江といへる傾城を伴來りしゆへ違ひしといへども假令名は違ひたりとも來るこそ縁しと餘義なき頼みもだしがたく只一夜

と契りしが又夕べ彼より忍び來り今宵こそと思ひしを彼がさゝへて涙路に逢さず物思ひのつれ〳〵に最前調べし笛の音に組を合して恨みを添へ持せし文は兼ての約束斯程迄に思ひ居る其中を逢ふに逢はれず今宵で三夜さ〇ありや早二更最早月の出〇月花とはよい詠めじやなァ「ト涙路忍び來る」 幾「涙路殿か 浪路「アイ逢たうムり升たわいなァ 幾「チヽ逢たいとは我も同じ事此間阿彌陀寺にて 路「いひ寄る縁もなきまゝに 幾「もつるゝ袖のふりあはせ 路「鞘に掛りしお咎めも 幾「女と思ひ行過しに 路「とつと留めし其時に 幾「たがしらぬ佛山の春霞 路「引かひあらばはたしともなれ 幾「サア其歌に引かれて直樣其夜來たれども涙江涙路の間違にて 路「夫とは知らず待暮せしに聞へぬは涙江さん如何に間違なればとて人のお客を寢取とはあんまり胴欲なと思ふても恩のある姉女郎さんどうも仕方もなく泣てばつかり居る内ゑ最前あなたの笛の音にそれと知り今宵忍ぶと書たれば外を其儘笛に入れ人を呼子の御返事やう〳〵忍んで參じ升たわいなァ 幾「實くも悟りたり我も思ひに耐へ兼て竹にて夫といはせし時琴に合して持せし外の返事書く間も涙江を恐れ時に取ての譬への返事 路「思ひに思ふ其中を 幾「仇な縁しに隔てられ 路「お傍へ來る事さへならず 幾「竹と路「琴とに 幾「うたり合ひ 路「忍ばにやあらねといふ事も 幾「是も因果の 兩人「縁じやなァ「ト涙江聞居て」 浪江「涙路さん 幾「ヤアろなたは 路「涙江さん 江「エヽお前はおァ本に突出しの其時よりわしは姉女郎と名づけば何角に附けて引廻し立居振舞八文字口舌手管も教へ込み漸う一人捌きも出來マヽ嬉しやと悦ぶのも妹と思ふ故夫に殿御を寢取るとは本に恩知らずじやわいなァ 路「サア其恩は忘れねど 江「イエ〳〵畜生よかはす詞はない 路「いふまいと思へども夫程に思ふて下さんすお前が何故妹女郎の客を取らしやんした 江「何でわしがこなさんの客を取つた 路「はしたないふも耻かしいが抑も此廓では涙江涙路の全盛其マァお前に似合升せぬ涙路といふてムんしたを能うマァお前は逢はしやんしたなァ 江「假令名ざしは間違ても先に逢ふたらわしが客夫を忍んで逢ふとは本に間男同然外への見せしめ以後の爲「ト立掛る」 幾「涙江何をする 江「徒ら者に姉女郎がしつけ 幾「イヤ折檻に及ばぬ悪性するが客の習ひ 江「夫でも 幾「ハテ彼に科はない〇ろちと寢ればよいではないか「トおつる出て」 おつる「何事じやぞいのう 江「涙路さんが私のお客を取らしやんしたわいなァ 路「イエ〳〵是は つる「イヤぬかすなおのれなりや其筈じや〳〵最前もおのれ故に痛い目に合ふて居る是から又おのれを責て最前の腹いせ 幾「コリヤ花車是は涙路の罪にあらず皆身共が つる「イエ〳〵あいつが罪に違ひない遠てお前へじやとおつしやれば廓の法で大門口にて二人共にさらさにやならぬ搆ふてやらずとサアあつちへお出被成升せ 江「サア山さんムんせへ つる「め郎覺べておれ人の男を〇イヤサ人の客をとる科は外の女郎への見

せしめあしたは此廓の法の成敗大門口で眞ッ裸にしてさらさにやならぬ　淺「最前合はせし相戀の心を解くと思ひ出し必ず俱に○涙江おじや　つる「サアムんせ〔ト涙江淺間おつる皆々這入る」　路「ハア、　唄「憂き世の中の習ひと知られ斯く斗り　路「涙江さん胴慾でムんすわいなァ人のお客を取り乍ら理を非に枉げての姉女郎如何に恩ある中じやとて耻かゝした其上又見せ付けて連れて行とはエゝお前は胴慾とやわいなァ　唄「花の契りとなる初めの情け今の仇　路「おつる様の胴慾な此上にどの様なひどい目に合ふやら夫に厭ひはなけれども大門口でさらされて何と生て居られうぞいなァ○いとしいは涙崎さんわし一人を杖柱と思ふて居やしやんすのに死だ跡では泣かしやんせう一筆殘すが跡での言譯合点がいたらせめて水なと手向けて下さんせうとはいひながら是程迄思ひ思はれ一夜さの契りも結ばず死るとはどうした因果の縁じやぞいなァ今夜忍んで來なんだら此悲しみはあるまいに　唄「いつろ逢はねば斯うした事もあるまいよしなやつらや　路「其上金兵衛様の心遣ひ忘れは置升せぬ情序に此文を私が親里へ屆けて下さんせ　唄「仇に暮せし日月の程もいはで思ひの涙の雨ふいとどすぎなん四つの袖　路「さうじや〔ト死うとする淺間出て留て」　淺間「是待た死るに及ばぬ　路「夫じやといふて　淺「コレ〔ト懷紙をもぎとり」　路「申〔ト物のいへぬこなし淺間胸にあるといふこなし双方とたんにて返し

遣物二間の二重見付塗骨障子橋掛り二階此下竹の垣隱病口落間筋違に切戸口植込み抔あり

金兵衛狀を讀み居る合方にて道具納る　金兵衛「今二階より落散つた此狀コリヤ涙路が手跡今宵忍ぶとかきし文又最前の笛の音も二階正しくさやつこそ、コリヤちつと手掛りに取付き面白うなつて來たわい〔ト國平出て」　國平「スリヤ詮議の綱に取り付のれしよな　金「こなたは最前のお侍某も富士太郎様には由緒ある者心を合し互に詮議　國「心得てムる　金「アノ人音○此内へ暫らく隱れて何角の事を　國「スリヤ此内へ　金「窮屈ながら暫しの間〔ト長持へ這入る切戸より傳平上總之助貫藏涙崎出て來て」　上總之介「コリヤ私を何と被成升　傳「ヤァうぬは今川上總之助に相違ないまたこちらの涙崎は府中の傾城乙女太夫両人とも馬鹿と成て入込みしはうぬらを詮議の爲め平馬殿へ連て行ッレ貫藏殿　貫藏「心得てムる　上「イエ〳〵そんな者じやムり升せぬ世ゝ似た者もたんとあるもの跡で後悔被成升すな　傳平「慮外の過言ッレ貫藏殿〔ト両人切て掛り立廻りの内傳平涙路を捕らへ刀を差付け」　傳「手向ひ致さばこいつを芋ざし　上「コレ早まるまいぞ　貫「うぬは乙女ぬかせ　淺間「上總之助様此場にあつてはあぶない〳〵一時も早く落ち延びさつしやれ　上「夫でも一人は　淺「拙者は後より追付ん早く〳〵　上「サア〳〵行わいの〔ト花道へ行かける」　崎「ろんなら私も　上「一所に行

くのか　八長　さうはさゝぬ〔ト切て掛る淺間見事に投げ〕　淺「旅は道連れ　上「シテ道筋は
淺「若松よりへさきの渡しへ　上「重々の志太夫おじや〔ト上總之助涙崎向ふへ走り這入る〕
傳、貫「ヤア淺間殿　皆々「何故我々を　長八「うぬ〔ト切て掛る〕　淺「同士打するかかく致せ去い
我計略　両人「何計略とは　淺「平馬殿の心を掛し傾城乙女上總之助へ實心に見せ此所を落せ
しはへさきの渡し場にて平馬殿へ引立させん爲傳平殿貫藏殿は跡ぼつかけて　長八「シテ我
々は　淺「此家の亭主金兵衛といふやつ正しく富士の由緒の者コレ〔ト耳く〕　両人「心得升し
た〔ト両人走り這入る〕　傳「然らば拙者は　貫「へさきの渡しへ　淺「一時も早く　傳「貫藏殿ム
れ〔ト両人向ふへ這入る〕　淺「是でよし〳〵〔ト長持の中の國平と顔見合せ國平びしやり蓋
をする淺間長持の傍へ行うとする金兵衛出て〕　金「コリヤ何と被成升　淺「イヤアノ長持を
金「イヤ太夫の夜具長持どんな手道具が入れてあらうやら　淺「サアそこを見たいが客の辭
金「ハテ見せとひないが太夫の樂屋〇ハテらつしもない物　淺「すりやどうあつても　金「見せ
升事はマア成り升せぬ　淺「身受せう　金「何と　淺「あの長持の主は太夫身受いたさば身が所
持の手道具　金「あの長持は涙花が夜具なれば太夫に篤くり咄した上　淺「シテ其返事は　金「
古いやつじやが夜中の鐘　淺「シテ其價は　金「富士が秘藏の樂書の一卷　淺「ヤ何と　金「最前
聞し笛の呂律　淺「スリヤあの夫を　金「正しく淺間〇イヤト淺間しい廓の者よいものはしい
と思ふが病　淺「如何樣身受さへ濟まば與へてくれう　金「ことなう手管は横笛の　淺「なるか
金「ならぬは夜半の鐘迄　淺「奥で返事を待て居るぞよ〔ト双方心意氣あつて淺間奥へ這入る〕
金「正しくきやつはムウ〔ト長持より國平出る〕　國平「扨ころ淺間　金「コリヤ屹相變へて何所
へ行のじや　國「ハテ知れた事奥へ踏み込み只一討　金「こなたが討て富士太郎樣は誰を討ぞ
國「ヤ　金「彼が所持する樂書の一卷破却したら何とする態と詞を荒立ぬは事なく一卷取り受
る爲め　國「シテ又こなたの心底は　金「是より奥へ參り小雪樣にお目に掛り此事委しうお咄
し申　國「サア其小雪樣は淺間と忍び合　金「何と　國「奥にて涙花の咄しには涙江涙路の爭ひ
のありし元は笛の音　金「スリヤ推量に違ひなくあの淺間と　國「夫じやに因て　金「夫なれと
猶ならぬ若し荒立なば小雪樣のお身があぶない又其樣子なら小雪樣を連れ立退くは必定こ
なたは道にて　國「そんなら先へ　金「我も跡より一時も早う　國「合点じや〔ト向ふへ這入る〕
金「思ひもよらぬ小雪樣と左衛門が〇エヽいはざりしは我誤り何にもせよ〔ト奥へ行うとす
る八長両人うぬと掛る立廻つて両人を投げ〕　金「さうじや〔ト身拵へする見得よろしく返し
右の道具上手へ引正面に二階を見せ竹垣見越の松板塀一面に見せ下手奥深う涙幕舞臺さき
涙の打寄せを見せる踊り三味線にて道具納る　浪江「そんならどうでも殺すのじやのエヽ胴
慾じやわいなア〔ト淺間ものいはず殺す涙路出て〕　淺「涙路か　路「山さん〔ト両人摸樣取り

宜敷あつて両人トゞ塀より下る金兵衛伺ひ出てゾレと浅間を留る事あつてだんまり様の面白き立廻りあつてトゞ両人向ふへ這入る金兵衛すゝし見て急度見込むとたんよろし〳〵幕

大詰

役名

一富士知一　一奴國平　一於京　一奴角平　一同丸平　一同岩平　一同團平　一香具屋喜平　一女房於浪

一妻櫻子　一老母卯原　一信德尼　一浅間照行　一子叡太郎　一悪龜の精　一門弟四人　一狼一正　一家來大勢

（室積平馬屋敷の場　鳩胸峠老母卯原隠家の場　室の津沖中の場　同濱邊敵討の場）

實は小雪　一室積平馬　一鶴身四人

逸物二重上手障子家体下手屋敷塀切戸真中に襖爰に喜兵衛香具屋の形り奴四人取巻居る白雌子ばた〳〵にて幕明く　奴四人「動くな　喜「コリヤ何と被成升　○「何とするとは此庭へへちまひあるく素町人め　□「何用有つて是へ參つた　皆々「詮議するのだ　喜「成程私が大きな麁相イヤモウ結搆なお座敷ゆへ此先を見たい〳〵とお庭とも存せず是へ參り升た何事もお免し被下升せ　○「イヤさうは扨けさせぬ　△「何でも曲者　□「先づお頭へ　四人「さうだ○お頭〳〵　鶴平「エヽお面白う夢を見て居るにあつたら所をやかましい　□「イヤ奥を目掛る曲者故　四人「詮議せうと思ふて　鶴「ハレ待ちやい見りやア高が町人　喜「左樣でムり升お臺所迄參る小間物屋御勝手を存升せずッイうか〳〵と此奥庭迄　鶴「お臺所迄來るといへばお出入も同然表御門からお玄關先麁相のないやう敬へてやれ其替りおらが部家に酒が有るから往て呑めサ　○「ろいつは有難い案内すべい　□「町人おいらと一所に　四人「サアがう來やれ「ト奴四人先に喜兵衛上手へ這入る」　鶴「ハテ現銀なやつらゾタが町人の身を以て奥の樣子を伺ふは慥に味方エヽ何や角や咄合だらけ何とし[illegible]たものであらう　向ふより「お客人のお歸り鶴「何客人のお歸りムヽ○ドリヤ部家へ居て休もうか「ト下手へ這入る向ふより門人四人乘

物を昇き出る平馬腰元奥より出て」平馬「是はお客人よは早いお歸り乘物のまゝ奥座敷へゾレ腰元御案内　お京「サアお客人様　腰元「御案内致し升せう〔ト乘物を門弟四人手昇にして皆々奥へ這入り引違ふて門弟四人出て」平「各々にも草臥たであらう打くつろいで咄し召れい　口「先以て先生の義に付我々迄も御厄介　△「其上先生の男がよいから兎角女が惚れ騒々しい事でムる　○「赤松公のお差圖を以て淺間殿に附られたる助太刀の我々　×「はのかに承れば富士太郎當地へ入込しとやら　平「其義少しも氣遣ひ召るな富士太郎當地へ入込めば某支配の役目でムれば仕様は様々又鳩胸峠には淺間殿の毋卯原高燈籠を釣り置富士太郎を始め餘類の者共來るを合圖に切て落せば馳せ參て討殺す兼ての手筈　×「遖れの御計略夫聞て我々も安堵　口「太郎さへ消して仕廻へば舞樂の達人淺間殿只御一人直きに主人の執成しにて足利への歸參の手積り　△「さう成たれば我々も　○「其尾に付て立身出世　平「高燈籠の落るを相圖に　四人「惣が〳〵りして富士太郎を〔ト國平切戸より立聞居て皆々と顔見合はせちやつと隠れる」平「何れも今のを御らうじたか　四人「如何にも壁に耳　平「切戸の物いふ今の時節　四人「いつろ我々が　平「アイヤお搆ひなくともマア奥へ　四人「然らば平馬殿　平「先ヅムり升せ〔ト平馬侍四人奥へ這入る切戸より國平上手障子よりお京出る」京「こちの人國平殿　國「女房お京シテ何ぞ心當りは　京「さいなア合点の行ぬ奥の客人　國「サア某もさう思ふ故立聞けば敵左衛門當地に入込みある様子　京「その上鳩胸峠よ高燈籠の相圖の様子　國「直に是より鳩胸峠の實否を糺して富士太郎様へ　京「そんなら早う　國「合点じや〔ト行うと する家來大勢出て」家來「動くな〔トお京國平大勢を相手に立廻り有てトゞ皆々を上手へ追込む是にて山幕を冠せ山颪にてつなぎ道具出來次第山幕を切て落す

造物松の立樹同しく釣枝後ろ山の遠見山颪どん〳〵にて道具納る〔ト上手より國平お京大勢を相手に立廻りながら出て來り立廻りあつて東西へ別れて追込ひ薄ぞろ〳〵に成り信德尼走り出る跡より狠叡太郎を追ふて出る立廻りあつて信德尼珠數にて拜ひ狠恐れ駈けて這入る信德尼叡太郎を抱き走り這入る國平大勢を相手に立廻りながら出て來り立廻り見得宜しく留る返し

造物一面に岩窟正面納戸上手折廻り障子家体丸木の本様付高二重枝折門此傍に高燈籠後に火を入れ切り落す仕ゑけあり在郷唄コイヤイにて道具納る　浮るり「柴のとぼろは左ながらも鬼の住居といひつべし〔ト向ふより卯原出て來り」　卯原「定めて嫁が待て居よう○今戻つたぞへ〔ト奥より小雪出て」　小「ヲヽ、嗟様お早いお歸り此暑さのおいとひもなうどこへお出被成升た　卯「夫詮議してろなたはどうする言付て置た袷の縫ひ直し定めて出來て有う　小「サア縫直して置うと存じ升たが何や角や隙が入て　卯「夫見や我すべき事さへ出來ぬ甲斐性

なし小みづをつかふより針仕事の稽古でもさつしやれ　小「私も左様存し升て稽古も致し升れど産れ附ての不器用者見て厶つてはなをよう縫はぬで厶り升　卯「ろんなら奥へ居て休んでやらう針仕事もきり〳〵片付け足さすりに來て茶の下も焚附け日が暮たらおみあかし勝手の灯から高燈籠も忘れぬ樣ァ、世話やの〳〵南無阿彌陀佛　淨「念佛數程いひ付て納戸へころゐ入りにけるお涙は一人あたふたと習はぬ業も産れ附き器用の針手縫ひく〳〵り昔床しき表にも佛事の爲の尼姿泣入る稚子すかしつゝ見馴れし柴の戸押開き入間ひやい跡びつしやりこなたも恠りふしぎのお涙　小「あなたは尼御の修行者さん見れば稚子を抱きかゝへお顏の色も違ふてあるはどうした譯で厶んすへ　但「ようお尋ね下さり升た毎度お門へ參りお志しを受け申信德尼と申者けふ城山を通りかゝれば一ッの狼此子をくはへまつしぐらにゆく先に立ふさがり念珠を投つけ佛の經を唱へ升たら諸佛の功力に驚きて稚子捨て狼は逃げ此子は一つの疵付かず助くる事は助けても又も跡より追駈け來るかとけはしき道をこけつ轉びつィヤモウひやいお事で厶り升た　小「お咄しを聞てさへ身に冷汗さうして紅染の頭巾をきせ顏に出もの、四つ五つ疱瘡と申ものとやらでは厶り升せぬかへ　但「本に心せくまゝ氣も付ず可愛や誰人の子なるか定めて親だも泣愁歎　小「氣違のやうに成て居やしやんせう所當の樣な物はあるまいかいなァ　但「臍の緒が入て厶り升羽衣明神と住吉のお札もあり爰に何やら書た物が　小「何じや明德元年申八月戌の日戌の時誕生攝州淺澤の住人富士太郎知一が悴叡太郎○富士太郎が悴とは　但「淺澤とは攝州住吉如何程猛き獸物でも翼なければ餘も爰迄　小「成程旅のお人のいとしはを心なげに耆生めが　但「左すれば近邊の宿屋を尋ねるば知れさうなものお預り下さり升せ　小「お心安い事なれど夫トの留守の其上に姑御も御寢なつて厶れば私がまゝには成り升せぬ御苦勞乍ら抱て厶つて下され升せ　但「サァ夫はさうなれど目當もない尋ね者日脚は傾く山坂越へて此子の介抱心元なう存じ升お慈悲深いお志しある姑御樣と聞かねど知れた門の燈籠圍を照らす一燈は亡者の爲とは淺はかな事夜山を越へ道に迷ふといふ事なき目前の功德かゝるお家に此子を預けるは尼の安心是非お願ひ申上升　小「夫といはれぬ姑御のお心ァ、辛氣な事で厶んすわいなァ　卯「お涙や嫁女や（ト奥より出る）　小「アイ〳〵　卯「ぶつ〳〵と何で厶る　小「ヲヽお目が覺め升たか常に厶んす修行者樣此子が狼に喰はるゝ所を助けておやり被成たけれど乳のない稚子迚もの事に親達の宿々を尋る內此子を暫く預つてくれとのお賴みで厶り升　卯「ヲヽ心安い事じや此婆々が預り升た　小「そりやお前御眞實かへ　卯「ハテ尼御に何の嘘をつき升せう尋ね出して連れて厶れ何をするも後生の爲お茶でも參つて厶り升せ　但「ハァヽ有難い其お詞で力を得升た嫁御にもいかひお世話　小「尼御樣にもいかひ御苦勞成らう事ならお早うお出被成升せ　但「心得

升た往て參り升せう　浮「參り升せうといふ聲に虫が知らすか泣き出す稚子跡に尼君は功德の爲の燈籠と一心念佛狼の危難を救ひし跡乍らも鬼の首や虎の尾と踏分けてこそ出て行いつにない卯原はにこ〳〵　卯「ヲヽよい子やの見れば疱瘡して居る樣子何ぞ藥を呑してやりたいものじやのう　小「子供持ねば小兒丸一服なし　卯「イヤ室へ一走り往て買て來てやり升せう　小「アヽ滅相もお年寄りの餘程の道私が參り升せう　卯「イヤそなたは添乳が肝心俄よ出來た孫の樣な氣に成つて心がいろ〳〵するわいのう　小「左樣ならお召物お怪我なさつて下さり升なへ　卯「辷りてけうが孫故あれば厭ひはムらぬひよつと親達が尋ねて來ようとわしが戻る迄渡す事はならぬぞや　小「畏り升てムり升　卯「尼御せでも孫の樣に世話する藥迄買ひに行きしたといふて渡す事はならぬぞや　小「何のお詞を背き升せう早う戻つて下さんせへ　卯「ヲヽ合点じや　浮「合点じやと裾引からげ心の鬼を押し隱し室の津差して急き行く物憂き秋の定めなき空に色增す紅葉とも身に降り掛る獨り言　小「本に此子が身の上も私が昔の身の上も思ひ廻せばわじきないかどとかされて長の年月便りもせねば生死も知らず此子が守り袋に富士太郎の子と有つた所書は攝州淺澤私が產れは駿河世には似た名も有るものと思へど寢顏の兄樣に生き寫し三代先きの祖父樣い住吉の伶人とあれば若しや御歸參でも被成た故私が有所を尋ねて下さんすのか○アヽイヤ〳〵疱瘡子迄も連れあるきお尋ね成さる樣もなし行逢ふ事は叶はずとも便りが聞たい逢ひたうムり升わいなと計りにて過越し方を思ひ出し守りと共に稚子をひつしと抱〆め〳〵て袖くひしばる忍び泣き聲に目覺す叡太郎　叡太郎「乳が呑みたいか〳〵樣イのう　小「誰がよ〳〵可愛想に〳〵○アヽ日が暮たドレ燈籠に灯を燈して見せ升せう　浮「火打かち〳〵火を打て高燈籠に燈したて置き上る火もあすは我魂一つに祭るとは知らぬが佛の供養ぞと稚子抱て佛壇へしをれてころは入りにける既に夜は更行空も子ゆへの闇我家を伺ふ忍び足勝手覺へ玄柴の戸を押せば首尾よく內に入り納戸より取り出す出刃か邪けんか錆附し悪い報ひを白髮の卯原泣やひ故よ心得ずと伺ふお涙は氣も附かずちやつと背いて知らぬ顏蒲團をさつと稚子の首筋取て驚摑みわつと泣出す子をやらじとうろたへ圍ふを睨付　卯「ヤアぎやう〳〵しい其面ヲ何じや其餓鬼渡しや　小「ハイ放し升は放し升があなたはマア何時の間にやら戻つたともいはず其子を取てどう被成升　卯「エヽどうのかうのはない其悴をたつた一突　小「エヽ　卯「呪ひじやわいのう疱瘡のよい呪ひを聞たゆへ爰へ連れて厶れ爰へ〳〵　浮「猫撫聲庖丁諸共小手招き轟く胸の早鐘にお涙は膝節わな〳〵ふるひ　小「申かヽ樣呪ひは聞へ升たがお前のお手の出刃庖丁夫をお放し被成升せ　卯「サア切れ物が悪魔の呪ひ邪魔しやると此が參るが合点の　小「マア此子を一突とはどうした呪ひでムり升ぞいなア　卯「呪ひの譯聞たら其子をこつ

ちへおこしやるか　小「アイ　卯「ナヽさういやればモウ隠さぬ我悴は四天王寺の樂人淺間左衛門照行といふはこなたの夫トの本名でムるわいの　小「エヽ　卯「ナヽ恂りは尤々此樣な所に引籠るも住吉の富士右門同じ舞樂の遺恨に因て討果した　小「エヽ　卯「テモ仰山な驚きやう今此播州に隠れ住むを右門が悴富士太郎父の敵を討んと當國へ入込みしと聞て心も心ならず是個强の人質と情けらしう預り早速淺間に物語れば七歳に足らぬ疱瘡の出揃ひ迄の子血汐を取て秘藥に合せ呑時は忽ち髪の毛白く相好變はれば仕官の有附き心のまヽ又二葉にて根を斷てば斧を用ゆる憂ひなし急ぎ生肝を取て呉れよと聞て嬉しさ立歸れどこなたの前を計り兼最前からの猶豫サア夫トが出世の門出の血祭り共々に手傳ふてくりや夫がならずば年寄り役芋ざし料理サア〳〵どうじや　淨「始終の樣子聞くに附け扨はさうかと半乱のお涙は兎かう悲しさを泣も泣れぬ甥子の大事悟られまじと喰ひしばる卯原顔を差覗き　卯「何が悲しうて泣ぞ夫トの事は思はず此餓鬼が可愛いかいやい　小「イエ〳〵左樣ではムり升せぬ　卯「ろんぬら何で泣ぞ　小「さうしたお方とは露知らず是迄肌觸たのが　卯「ヤア　小「サア勿体なうムり升　卯「大事ない敕す〳〵サア得心がいたら退きや　母「アレこはいわいのう　小「ア此子がおびへ升今宵一夜さだかして寐さして下され升せ　卯「ならぬわいのう　小「スリヤどのやうゑ申升ても　卯「世の中に我子程可愛者はムらぬ　小「エヽお前はなア　卯「其面ヲ何じや姑おりや親じやぞよ親をにらんだら蝶に成るぞよ邪魔せずとろこ退け　小「ヤア〳〵待て下さんせいなア　卯「エヽ退けといふに　淨「肩口とつて引付れば裾や袂に修羅の一刀振り乱したる三途川雪の柳や八裏の地獄も目前逃げ惑ふ嫁稚子を追ひ廻す折から來ゐゝる富士夫婦内の物音何事と外面に彳ひ間もなくお涙を取て一間へ投込み尻栓をつかり流石にもこはい〳〵とうろつくを　卯「今が最期じや觀念せい　淨「觀念せいと取て伏せ出刃庖丁を振上るとたんへ飛び來る富士が手裏劍ウンとのる間も踏碎く戸よりも先へ稚子を抱き取る櫻子富士太郎老母が振舞憎さも憎しと急所をかけて切込む太刀無念と悪母が突掛るを心得かはす身のひねりすまたくらうてよろ〳〵〳〵樣板四五枚踏崩し脚骨打つて倒れしは心地よかりし有樣なり　母「ヤアかゝ樣　淨「叡太郎ようマア無事で居てたもつた　太郎「老母は正しく淺間が親此所におるからはスリヤ此家ころ淺間の隠れ家目差すは一間ぬかるな櫻子　淨「こちの人早う〳〵　太郎「左衛門は何國にある名乘合ふて尋常に勝負せよ何にもせよ此一間放なす隔ての障子イデ首とらんと踊り入見れば不思議や淺間にあらで美目よき女の斷末魔コハ早まりし何人と問ふ間も心せく夫婦お涙は苦しき息の下　小「ノウ珍らしや兄樣妹の小雪でムんすわいなア　太郎「誠に先年かどてかされし小雪　淨「常々お咄しのあつたお妹樣か

いなァひよんな事して下さんしたなァ「介抱おろこの涙ぐむ富士太郎眉に皺寄せ　太郎「其妹が今の穂先我と知つてか又知らずか樣子は何と　小「さればいなァ五四郎に欺むかれて此長門の國へ竇渡され父母の事お前の事泣て明かさぬ夜すがもなく夜毎に替る仇枕便り求めて弥をばと筆執る甲斐も親方の責折檻に隔てられ涙路と呼ばれし全盛も今山中の隱れ家で不思議に逢ひし叡太郎が臍の緒にて素性を知り両家の成行委しき事と老母のお咄し聞て生たる心もなくお前の刃にかゝれば本望悪人でも我夫マと呼べば操も捨かたく貞女と孝に一ツの命死するを不便と思召逢ふは始めの兄嫁御兄樣へ　お取成し頼み升　櫻「拜む手に涙ばら〳〵櫻子は正躰なく　櫻「ア、申勿体ない私も同し人買に危ふき難義を右門樣がお助け被成て被下升た御恩さへ送る間も情ない御最期と夫トは敵の跡を追ひ旅立玉ふ便り無き母樣も世を見限つての御最期八重梅樣にお暇願ひ夫トの跡をと此子を連れて憂旅路重なる難義に疱瘡の悲しき中へ平馬が追手支へる内ゑ叡太郎の行方しれず樣々と尋る内尽せぬ縁の我夫マに行き逢ふ嬉しさ悲しさも夫婦一所に子の有所無事を悦ぶ甲斐もなく名乗り合ふさへろ〳〵に成らぬはどうした薄い縁必ず死んで下さんもおへ　太郎「某とても殘念はいかばかりけふの參會敵ぞと切込しゑ淺間にあらで血筋の妹其けなげさ此世にて両親のお目に懸るならば嘸お悦びなされんに　小「父の仇共にといふにいはれぬ因果しらぬ事とはいひながら現在敵を我夫マとかはす枕の一夜妻思ひ廻はせば恐ろしい此世の夢は覺ひれ共未來は爵で地獄に行き鬼の責苦を受け升わいなァ　浮「取り乱したるいとらしさ　太郎「父といひ母といひそなたも同じ刃の最期　櫻「東西分かぬ此子迄いかい苦勞をかけ升わいなァ　浮「可愛の者やと三人がしがらむ涙一時に血汐あやなす韓紅に涙をぞ添へにける時に伏したる老母卯原ひつくと起きて門邊なる高燈籠を切落せば斯くと鳴る鐘法螺の音に連れて聞ゆる數多の人音コハ〳〵いかにと危ぶむ三人老母は高笑ひ　卯「叡太郎をゑばにしたもおのいら釣らん謀事兼ての相圖燈籠を切落すが最期平馬殿助太刀の大勢を連れ今此所へ追付命の根腐り時太郎「小癪な一言何にもせよ　浮「支へる老母を突退けはねのけるともに立たる一木の松是幸ひと攀登り四方を急度打詠　太郎「ム、扨ころ〳〵室の沖迄壹を欺く松明提灯某一人討んと卑怯未練の淺間左衛門假令幾万騎來るとも何程の事あらんイデ切り散して本望遂げん浮「大地へひらりと飛びおるれば　小「コレ〳〵兄さん穿穴やら釣り石やら爰で防ぐは危い〳〵此山手の小道から左りへ取て行時は濱邊の抜け道早う此塲を　太郎「じやといふて敵の來たるを見捨てい　櫻「テモ是では足塲もわし〳〵お妹御のお心遣ひ　太郎「ろんなら此塲は　小「早う〳〵　卯「ヤア動かしてよいものか　太郎「ヤアうぬから先へ覺期　小「コレ私が爲には大事の姑止め刺ぬが妹へ追善　櫻「爰搆はずとこちの人　太郎「行け○妹去らば　小「お去らば　浮「

跡に見捨て急ぎ行　卯「ヤア富士太郎を逃したな　小「夫をいふて下さんすなお慈悲でムり升わいなア　浮「シヤ面倒なと強氣の卯原立上がり乍らよろ〳〵〳〵こなたはかよわき女氣の既に斯くよと後ろの方　淺間「母人お待被成い　浮「一間の内より立出る淺間が出立伶倫の裝束雖兜見る母親は　卯「そなたの此出立は　淺「今日只今富士太郎をぶちはなし直に赤松公へ仕ゆる所存　卯「其富士太郎はたつた今め郎が差圖で小道から　淺「何も角も存じて居る裏道より忍び來て親子三人討はなすは易けれど平馬殿を始め助太刀の手前もあれば此場を落し花々しく返り討　小「エ、たつた一人を大勢して返り討とは卑怯なお心　卯「わしが事は案事ずともも小怜も忘れぬやう　淺「成程万事の手つがひ　卯「そんなら左衛門　淺「母人お去らば　浮「風を起して出て行　卯「やれ〳〵けなげな有樣じやなア　小「ハア、敵のよるい覺悟仕や　浮「突きかくる痛で乍らも負けず劣らず鍔音はてう〳〵〳〵親子は忽ち修羅道の切つ切られつくる〳〵〳〵廻ぐる因果ぞ　〔ト両人切りむすび卯原が腹へ懐刄を突立るぐる是にて淺黄幕を冠せる上下より國平お京出て來り」　お京「國平殿　國「お京シテ御主人は　京「サア室の沖にて淺間が爲にお果被成れしとの事　國「イヤ我よ靈夢の御告もあれば何でも駈け附け○女房來い　〔ト下手へ這入る淺黄幕を切て落す返し

向ふ一面の涙二段の手摺涙の書割どんちやん涙の音にて道具納る富士太郎櫻子大龜に乘り

橋掛りより出て」　太郎「ヤア〳〵女房氣を付いあれに見ゆるは慥に湊危き命助かりしも靈龜の奇特悦べ〳〵　櫻「龜の精で入水の難は遁れても方角知れぬ海の面　両人「應護のまなとり垂れ玉へ奇妙頂禮〳〵〳〵〔ト大ドロ〳〵にて龜の口より異人せり上る」　異「ヤア歎き玉ふな富士太郎我は先年三保浦にて右門殿に助けられ其恩義を報はん爲又叡太郎を預りし庵の尼ろ信德尼といふて兵助が女房なれば氣遣ふことなし舞樂の一卷平馬が首諸共國平夫婦が持參せん黒崎の湊へ只今淺間をおびき出し花々しき敵討我も影身に付添ひ居れば討とるべし見よ〳〵只今靈龜の案内陸地に到らん　〔ト大ドロ〳〵にて消へる是にて居所返しにある造物涙打寄せ磯馴松松の釣枝涙の遠見都て室の津濱邊の体富士太郎櫻子大龜に乘つたまゝうつとりして居る涙の音にて道具納る〔ト両人心附き」　太郎「嬉しや無事に陸地に着きしも靈龜の情け　櫻子「夢ともなく現つともなく今の告げ　両人「添ないぞや嬉しいぞや〔ト大龜海の中へ這入る上手より淺間出て來り」　淺間「ヤアうぬは慥に太郎櫻子　太郎「ヤア〳〵淺間左衛門父母妹并に家來の敵　櫻「私が爲には舅姑小雪樣の敵家來の仇　両人「遁れぬ所じや覺悟〳〵　左衛門「ヤア〳〵うぬは最前此沖にて平馬殿の助太刀にて討果せしにこりやどうじや〔ト異人出て」　異人「淺間左衛門遁れぬ所ヤア〳〵國平夫婦信德尼叡太郎を伴ひ早く參れ皆々「ハアヽ〔ト皆々出て」　國「ヤア〳〵其方が力と頼む室積平馬が首討たり　京「舞樂の一卷

跡に見捨て急ぎ行　卯「ヤア富士太郎を逃したな　小「夫をいふて下さんすなお慈悲でムり升わいなア　淺「シヤ面倒なと强氣の卯原立上がり乍らよろ〳〵〳〵こなたはかよわき女氣の既に斯〳〵よと後ろの方　淺間「母人お待被成い　淺「一間の内より立出る淺間が出立伶倫の裝束難兜見る母親は　卯「そなたの此出立は　淺「今日只今富士太郎をぶちはなし直に赤松公へ仕ゆる所存　卯「其富士太郎はたつた今め郎が差圖で小道から　淺「何も角も存じて居る裏道より忍び來て親子三人討はなすは易けれど平馬殿を始め助太刀の手前もあれば此場を落し花々しく返り討　小「エ、たつた一人を大勢して返り討とは卑怯なお心　卯「わしが事は案事ずとも小伜も忘れぬやう　淺「成程万事の手つがひ　卯「そんなら左衛門　淺「母人お去らば　淺「風を起して出て行　卯「やれ〳〵けなげな有樣じやなア　小「ハア、敵のよるい覺悟仕や　淺「突きかくる痛で乍らも貧けず劣らず鍔音はてう〳〵〳〵親子は忽ち修羅道の切つ切られつくる〳〵〳〵廻ぐる因果ぞ〔ト両人切りむすび卯原が腹へ懐刄を突立ゑぐる是にて淺黄幕を冠せる上下より國平お京出て來り」お京「國平殿　國「お京シテ御主人は　京「サア室の沖にて淺間が爲にお果被成れしとの事　國「イヤ我ゑ靈夢の御告もあれば何でも駈け附け○女房來い〔ト下手へ這入る淺黄幕を切て落す返し

向ふ一面の浪二段の手摺浪の書割どんちやん浪の音にて道具納る富士太郎櫻子大龜に乘り橋掛りより出て」太郎「ヤア〳〵女房氣を付いあれに見ゆるは偖に湊危き命助かりしも靈龜の奇特悦べ〳〵　櫻「龜の精で入水の難は遁れても方角知れぬ海の面　両人「應援のまなじり垂れ玉へ奇妙頂禮〳〵〔ト大ドロ〳〵にて龜の口より異人せり上る」異「ヤア歎き玉ふな富士太郎我は先年三保浦にて右門殿に助けられ其恩義を報はん爲又叡太郎を預りし庵の尼ろ信德尼といふて兵助が女房なれば氣遣ふことなし舞樂の一卷平馬が首諸共國平夫婦が持參せん黒崎の湊へ只今淺間をおびき出し花々しき敵討我も影身に付添ひ居れば討とるべし見よ〳〵只今靈龜の案内陸地に到らん〔ト大ドロ〳〵にて消へる是にて居所返しになる造物浪打寄せ磯馴松松の釣枝浪の遠見都て室の津濱邊の体富士太郎櫻子大龜に乘つたまゝうつとりして居る浪の音にて道具納る〔ト両人心附き」　太郎「嬉しや無事に陸地に着きしも靈龜の情け　櫻子「夢ともなく現つともなく今の告げ　両人「添ないぞや嬉しいぞや〔ト大龜海の中へ這入る上手より淺間出て來り」淺間「ヤアうぬは偖に太郎櫻子　太郎「ヤア〳〵淺間左衛門父母妹幷に家來の敵　櫻「私が爲には舅姑小雪樣の敵家來の仇　両人「遁れぬ所じや覺悟〳〵　左衛門「ヤア〳〵うぬは最前此沖にて平馬殿の助太刀にて討果せしにこりやどうじや〔ト異人出て」　異人「淺間左衛門遁れぬ所ヤア〳〵國平夫婦信德尼叡太郎を伴ひ早く參れ皆々「ハアヽ〔ト皆々出て」　國「ヤア〳〵其方が力と頼む室積平馬が首討たり　京「舞樂の一卷

も奪返したイザお受取り被成升せう　太郎「出かした〳〵最早のがれぬ淺間照行　皆々「覺悟〳〵　幾「うぬら一々撫切りじや覺悟（ト両人立廻り有てトゝ淺間を切り伏せ皆々寄て止めを刺す」　熊「チヽ逃れ〳〵敵討相濟上は　皆々「再び歸參の願ひをせん　熊「目出度い〳〵此場はお立〳〵（ト宜しく打出し

演劇脚本　復讐高音皷　大尾

明治廿七年十一月廿九日印刷
明治廿七年十二月五日發行
（定價金拾錢）

版權及興權所有
不許謄寫

大阪府東成郡東平野町大字南平野五百四十六番屋敷著作者故金澤龍玉相續人
大關シナ
大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷
版權所有者兼發行者
中西貞行
大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷
周擴社
印刷者
前田菊松

X-59